

折敷山遺跡
雲上山11号墳

1993年3月

総社市教育委員会



折敷山古墳周辺航空写真（北より）

序

総社市は、古代吉備文化の中心地として栄え、独自の歴史的風土を形成しています。市内には、過ぎ去りし昔を思い起こさせる文化遺産が数多く残されており、この度の発掘調査においても、弥生時代の村や古墳時代の有力者の墓（古墳）がみつかっています。

この報告書は、「協同組合テクノパーク総社」が計画する、工業団地建設に伴って実施されたものです。付近は、岡山県下第1位の規模をもつ造山古墳をはじめ、おびただしい数の古墳群が築かれている地域であります。調査の成果をまとめた本書が、この地域の歴史を理解する上で、また埋蔵文化財を理解していただく上で、ご活用いただければ幸いです。とくに団地内に自然公園として現状保存された折敷山古墳は、郷土を知る、生きた教材となることでしょう。

最後に、この調査にご協力をいただきました地元関係者、および関係諸機関の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成5年3月

総社市教育委員会

教育長 浅沼 力

例　　言

1. 本書は、協同組合テクノパーク総社が計画をしている工業団地の造成に伴う、「折敷山遺跡」「雲上山11号墳」の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、協同組合テクノパーク総社からの委託を受け、総社市教育委員会が岡山県教育委員会の指導・助言のもとに実施した。
3. 現地調査は、平成2年10月11日から12月15日にかけて行い、整理作業は平成3年度に実施した。
4. 本書で使用した方位は座標北に基づき、高さについては東京湾の平均海面を基準としている。なお、真北と磁北との偏角は $6^{\circ} 40''$ で計算している。
5. 本書は、村上幸雄、前角和夫が執筆し、前角が編集した。
6. 出土遺物や写真、図面等については、総社市教育委員会で保管している。なお、付載として報告する作山古墳、宿寺山古墳の埴輪については、その多くを葛原克人氏（古代吉備文化財センター）が多年にわたり採集された資料である。葛原氏には資料の実測・報告を快く許可され、また多大なご教示をいただいた。厚く感謝の意を記します。

目 次

序 例 言

1. 調査の経緯	1
(1) 調査にいたる経緯	1
(2) 調査の体制	3
(3) 遺跡保存とその対応について	4
2. 歴史的・地理的環境	7
3. 折敷山遺跡の調査	10
(1) 集落の位置と環境	10
(2) 遺構と遺物	12
(3) 小 結	31
4. 雲上山11号墳の調査	33
(1) 古墳の位置と環境	33
(2) 遺構と遺物	34
(3) 小 結	43
5. ま と め	45
付載 1 折敷山古墳の調査	47
2 小造山古墳の埴輪について	58
3 周辺古墳出土の埴輪について	66

挿 図 目 次

第1図 工業団地計画平面図 (S=1/3000)	2	第7図 住居跡 出土遺物 (S=1/4, 1/2)	15
第2図 調査地周辺遺跡分布図 (S=1/10000)	6	第8図 段状遺構1 平・断面, 土層断面図 (S=1/100)	16
第3図 調査地位置図 (S=1/30000)	8	第9図 段状遺構2 平・断面図 (S=1/100)	17
第4図 折敷山遺跡 遺構配置図 (S=1/400)	11	第10図 段状遺構3 平・断面, 土層断面図 (S=1/100)	18
第5図 住居跡 平・断面図 (S=1/80)	13		
第6図 住居跡 土層断面図 (S=1/80)	14		

第11図 段状遺構 出土遺物 (S=1/4)	20	第20図 遺構にともなわない遺物 3 (S=2/3)	30
第12図 土坑1 溝 平・断面図 (S=1/80)	21	第21図 雲上山11号墳 墳丘測量図 (S=1/200)	34
第13図 土坑1 出土遺物 (S=1/4)	22	第22図 雲上山11号墳 土層断面図 (S=1/80)	35
第14図 土坑2 平・断面, 土層断面図 (S=1/40)	22	第23図 雲上山11号墳 摳埴丘測量図 (S=1/200)	36
第15図 鍛冶炉 平面, 土層断面図 (S=1/40)	24	第24図 遺物出土状況図 (S=1/40)	37
第16図 鍛冶炉 出土遺物 (S=1/2)	25	第25図 雲上山11号墳 出土遺物 1 (S=1/3)	38
第17図 火葬墓実測図および出土錢貨拓影 (S=1/40, 2/3)	26	第26図 雲上山11号墳 出土遺物 2 (S=2/3)	39
第18図 遺構にともなわない遺物 1 (S=1/1)	28	第27図 雲上山11号墳 出土遺物 3 (S=1/4)	41
第19図 遺構にともなわない遺物 2 (S=1/3)	29	第28~47図 付載古墳挿図	46

表 目 次

第1表 折敷山遺跡出土弥生土器観察表	23	第4表 雲上山11号墳出土須恵器観察表	40
第2表 火葬墓出土錢貨計測表	27	第5表 雲上山11号墳出土埴輪観察表	42
第3表 折敷山遺跡出土陶磁器観察表	30	第6~12表 付載古墳表	46

図 版 目 次

図版1 開発予定地全景	91	図版9 土坑1出土遺物	99
図版2 調査地全景, 折敷山遺跡全景	92	図版10 火葬墓出土錢貨, 遺構にともなわない遺物	100
図版3 住居跡	93	図版11 遺構にともなわない遺物	101
図版4 段状遺構, 鍛冶炉	94	図版12 雲上山11号墳	102
図版5 土坑, 火葬墓, 溝	95	図版13 墳丘および周溝の土層断面	103
図版6 住居跡出土遺物	96	図版14 雲上山11号墳出土遺物	104
図版7 段状遺構1・2出土遺物	97	図版15 雲上山11号墳出土遺物	105
図版8 段状遺構3出土遺物	98	図版16~33 付載古墳図版	46

1. 調査の経緯

(1) 調査にいたる経緯

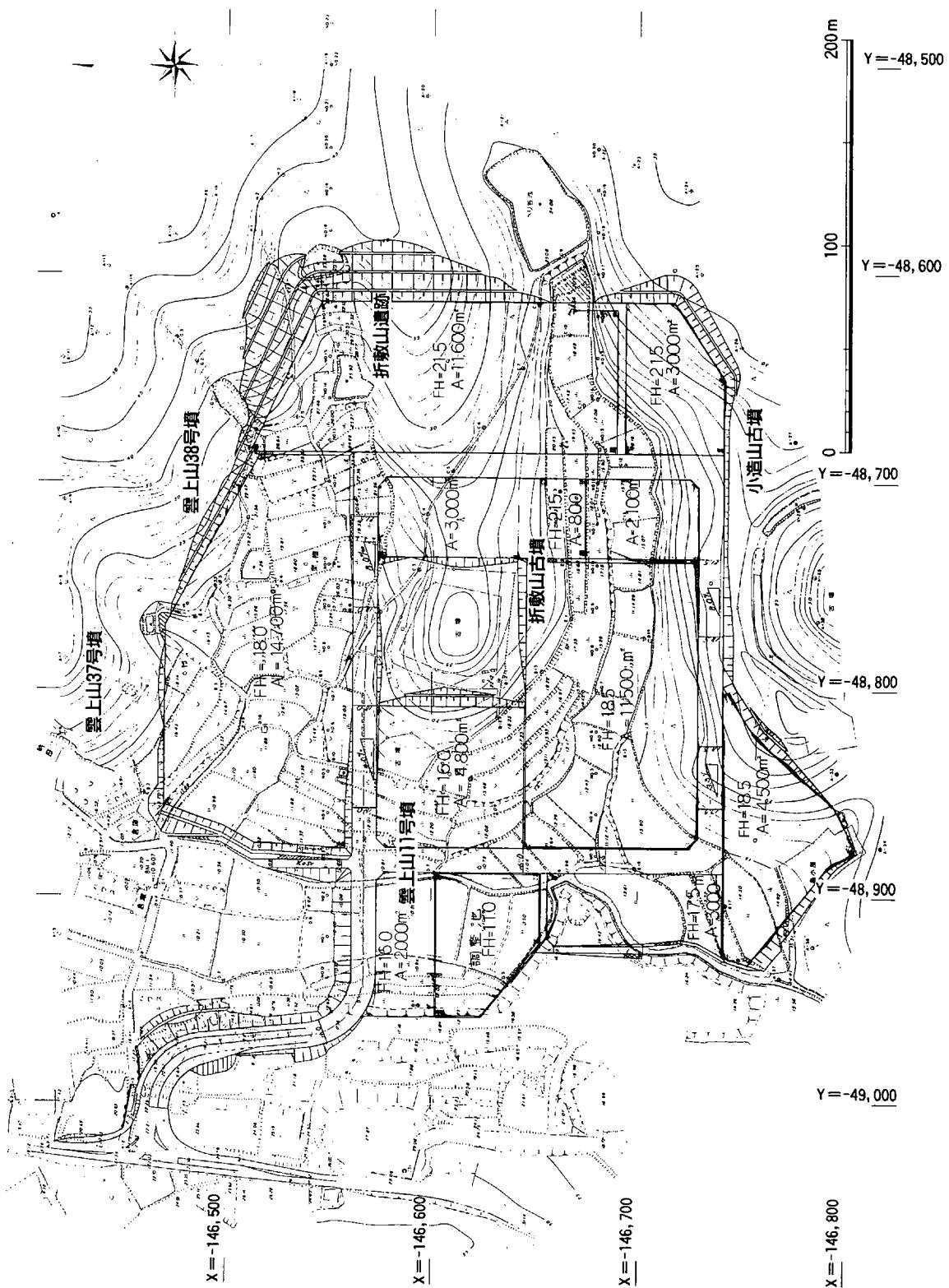
総社市は、「古代と21世紀を結ぶ風格ある文化創造都市」の建設を合言葉に、岡山県南圏域の一中核都市として限りない発展を続けている。しかも、瀬戸大橋の開通や新岡山空港の開港、山陽自動車道岡山総社インターチェンジの供用開始という国・県の大型プロジェクト事業が次々と完成したことで、より一層早いテンポで進行している。この広域高速交通網の整備は、総社市が田園都市から内陸型工業都市へと大きく転換した昭和30～40年代に続く、新たなる飛躍の時代になるものと位置付けられよう。

内陸型工業都市とはいうものの、市内企業の大多数を占めているのは中小企業である。そのため生産規模からみても工場の敷地は狭く、設備拡充の余地もないほどである。それでも経済の発展にともなって受注は増大し、機械設備等も増設されつつある。しかし、合理化や生産効率のアップを図るような設備レイアウトを行うには、工場敷地が充分に残されていない。逆に作業環境の悪化や機械騒音の増加などの諸問題を抱えることとなる。さらに、最近の経済の国際化と激しい技術革新の進展にも対応しなければならず、経営の近代化や生産の合理化などが急務となっている。

このような状況のなかでは、各企業が諸問題を独自に解決していくことは困難である。そこで協同組合を設立し、各関連企業のもつノウハウ等を提供し合って新製品・新技術の共同開発を行い、時代の要請に対応していくこととなった。このことが、この度の発掘調査を実施することの直接的契機である。

組合は、省力化機械製作を主体とした先端産業を担う企業体で、10社を数える。このうち6社が全面移転する計画で、「協同組合テクノパーク総社」として工業団地を建設することになった。昭和63年頃から団地建設設計画が具体化し、総社市赤浜の丘陵地約10haが選定された。開発区域は、総社市街地東部約5km、国道180号線と国道429号線の分岐点に位置している。ここは岡山市と倉敷市の中心部にも近く、また山陽自動車道岡山総社インターチェンジが隣接するなど交通の便は最良の地である。

開発区域内の埋蔵文化財については、すでに周知の遺跡として折敷山古墳、小造山古墳のほかに3基の古墳が知られている⁽¹⁾。このうち、折敷山古墳については岡山県下最大級の方墳と推定されていることから、また小造山古墳は県下第8位の規模をもつ全長約142mの前方後円墳



第1図 工業団地 計画平面図

であることから、計画段階から現状保存できるよう事業主と協議するとともに、ほかの3古墳や新たに発見される遺跡についてもできる限り保存できるよう対応を協議した。結果として、事業主の多大なるご理解とご協力を得ることができ、折敷山古墳は自然公園として、雲上山38号墳は設計変更をして、小造山古墳と大型の横穴式石室をもつ雲上山37号墳は計画地から除外して、それぞれ現状保存することができた。とくに折敷山古墳については、遺跡説明板の設置、駐車場の新設、あるいは見学路等の整備に積極的な取組みをしていただき、また記録保存となつた遺跡についてもその調査において充分なご協力をいただいた。

発掘調査に先立っては、岡山県教育委員会、総社市教育委員会、協同組合テクノパーク総社の3者による、文化財保護に関する覚書が平成2年6月25日に締結された。この内容にもとづき、遺跡の存在する可能性が非常に高いと思われる敷地中央部の丘陵地において遺跡の確認調査を実施（9月11・12日）。また、前年度においても水田部分での確認調査を行っている⁽³⁾。

確認調査の結果は、予想どおり丘陵上の平坦面に集落跡の存在することがわかった。折敷山遺跡である。この新規発見の遺跡も含め、事業主と文化財の保護・保存に関して協議を重ね、最終的には、折敷山遺跡と雲上山11号墳を記録保存とし、折敷山古墳と雲上山38号墳を現状保存とする、ということで合意した。これを受け、平成2年10月1日には総社市と協同組合テクノパーク総社とで、発掘調査覚書を取り交わし、10月11日より発掘調査を開始することとなった。

（2）調査の体制

発掘調査は、協同組合テクノパーク総社からの委託を受け、総社市教育委員会が岡山県教育委員会の指導・助言のもとに実施することとなった。発掘調査作業は平成2年10月11日より12月15日まで行い、整理調査作業は平成3年度に実施した。

調査にあたり、協同組合テクノパーク総社には経費の全額負担をはじめとして多くの便宜をはかっていただいた。また、造成工事を担当したアイサワ工業株式会社には工事日程と文化財調査との調整を始め、調査範囲内の伐採やバックホーによる表土除去など多くの労を煩わした。記して厚くお礼申し上げます。

調査組織

社会教育課（文化係）

課長	樋口 文男	主幹	村上 幸雄
係長	森田 忠志	主事	三宅 正吉
主事	谷山 雅彦	〃	高田 明人

主 事 武田 恒彰 主 事 前角 和夫（調査担当）

主事補 高橋 進一

作業員 犬飼克己, 岡 了, 岡 治生, 杉山 長, 芳谷 稔, 前田正博, 植枝慎一, 守谷
克己, 万成 讓, 芳谷千代子, 守谷澄子（発掘作業）, 西平登代子（整理作業）

なお、調査にあたっては下記の方々から多くのご指導とご教示を得たことを記し、厚くお礼申し上げます。

葛原克人, 正岡睦夫, 伊東 晃, 中野雅美, 島崎 東, 田中清美, 草原孝典, 弘田和司,
小松原基弘, 渡辺 黙

調査方法

発掘調査は、折敷山遺跡と雲上山11号墳の2遺跡を記録保存による全面調査とし、また折敷山古墳を現状保存とするための墳域確認調査を実施した。調査面積は、折敷山遺跡が1670m²、雲上山11号墳が410m²、折敷山古墳が40m²の計2120m²である。

現地調査では、表土の除去作業や用地内での遺跡確認調査等においてバックホーを用いた。

実測図は、遺構平面・断面各図を1/20の縮尺で計測測量。また遺構配置図を1/50、墳丘測量図を1/100の縮尺で平板測量した。なお、折敷山古墳については測量作業の委託契約により、国土座標にもとづき、光波距離計等を用いての地形測量である。また各平板測量の主なポイントも国土座標数値に変換して作図している。

(3) 遺跡保存とその対応について

現状保存となった遺跡は、小造山古墳、折敷山古墳、雲上山37・38号墳である。

開発における遺跡の保存については、いろいろと難しい問題がある。今回のように工業団地の開発では広大な敷地を必要とし、しかも広く平坦な区画をいくつも造るために、丘陵部においては山を削り、谷部においては埋めるという設計がなされる。一般に遺跡の多くは谷部でなく、丘陵部に立地している。このことが、遺跡の保存をより困難なものとしている。仮に丘陵部全体は無理としても、遺跡の立地する範囲内ののみを残すとすれば、これに伴うであろう区画の変更はかなり大規模なものとなり、予定地内あるいはその周辺に区画を移転させたとしても、遺跡が集中している地域では新たに遺跡があたってしまうことになる。また、残された遺跡もそのまわりの掘削レベルが大きい場合には、その価値を半減したような保存に終わってしまう危険性を孕んでいる。

さらに工業団地とか住宅団地などでは、広大な面積が一時に開発される傾向が強い。このことが、開発計画段階までにすべての遺跡を確認していたとしても、設計変更等による保存対策

を困難としている要因でもある。しかも、往々にしてすべての遺跡を確認できるのは計画が軌道に乗ったあとであるから、なおさら遺跡を保存することは困難なものとなる。しかし、一時に開発するのではなく、順次なされる開発においては、その保存にやや対応できる術が残されている。ただし、充分な遺跡分布範囲等の確認調査がなされている場合に限られるであろう。通常は、いわゆる虫食い開発で遺跡の消滅する可能性が非常に高い。けれども、官衙遺構のように遺跡範囲がある程度限定できるものや、広大な敷地の中で順次開発されていくことの明瞭な開発の場合においては別であろう。ある程度の調査の進展により、明瞭に遺跡範囲が確定できたり、その遺跡のもつ価値等が判明した場合は、今後の保存あるいはその活用を踏まえながら調査計画、あるいは開発計画にも遺跡保存と活用の観点から参画できることとなるからである。いずれにせよ、残念ながら県内においては充分な対応がなされているものとは言い難い。総社市においては備中国府跡がまだ確定できておらず⁽⁴⁾、備前国府や美作国府でもその範囲が住宅地内にあることから虫食い開発が進んでいる。

このたびにおいては、2遺跡が記録保存となったものの、岡山県下最大級の方墳とみられる折敷山古墳や、県下第8位の規模をもつ小造山古墳などは現状保存できたうえ、その活用として見学路や遺跡説明看板の設置、あるいは見学者のための駐車場など事業者の多大なるご理解とご協力により、かなり保存対策ができたことは大きな成果といえよう。

（前角和夫）

註1 岡山県教育委員会『岡山県遺跡地図』第3分冊、1975

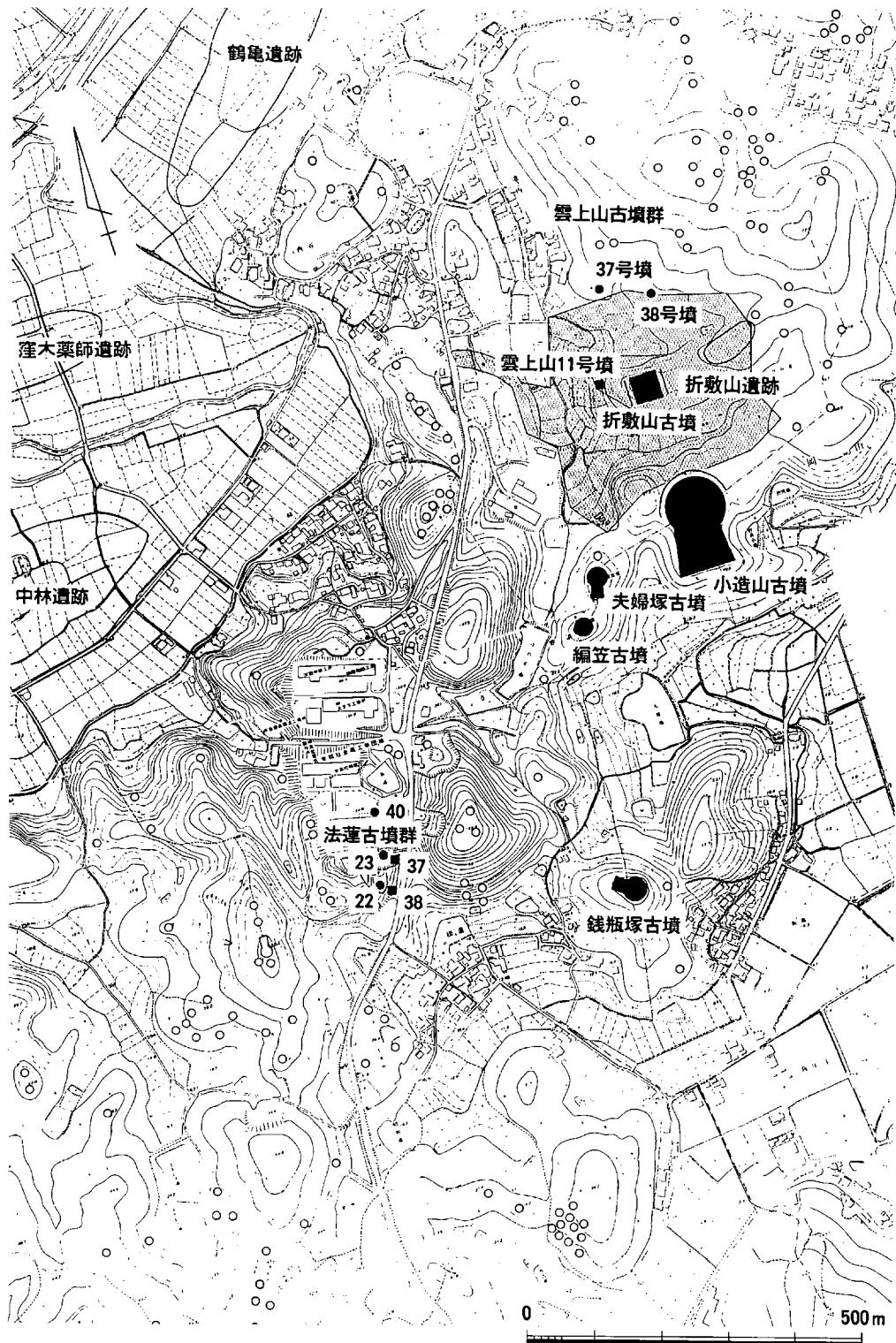
岡山大学考古学研究部『三須丘陵遺跡分布調査報告』1976

緑山古墳群調査団『緑山古墳群』1987

2 葛原克人「古墳時代前期」(『岡山県の考古学』1987)

3 総社市教育委員会『総社市埋蔵文化財調査年報』1, 1991

4 総社市教育委員会『備中国府跡緊急確認調査』(『総社市埋蔵文化発掘調査報告』7, 1989)



第2図 調査地周辺遺跡分布図

2. 歴史的・地理的環境

計画地は三須丘陵北東部の、総社市赤浜字大辻山366-3番地ほかに所在する。

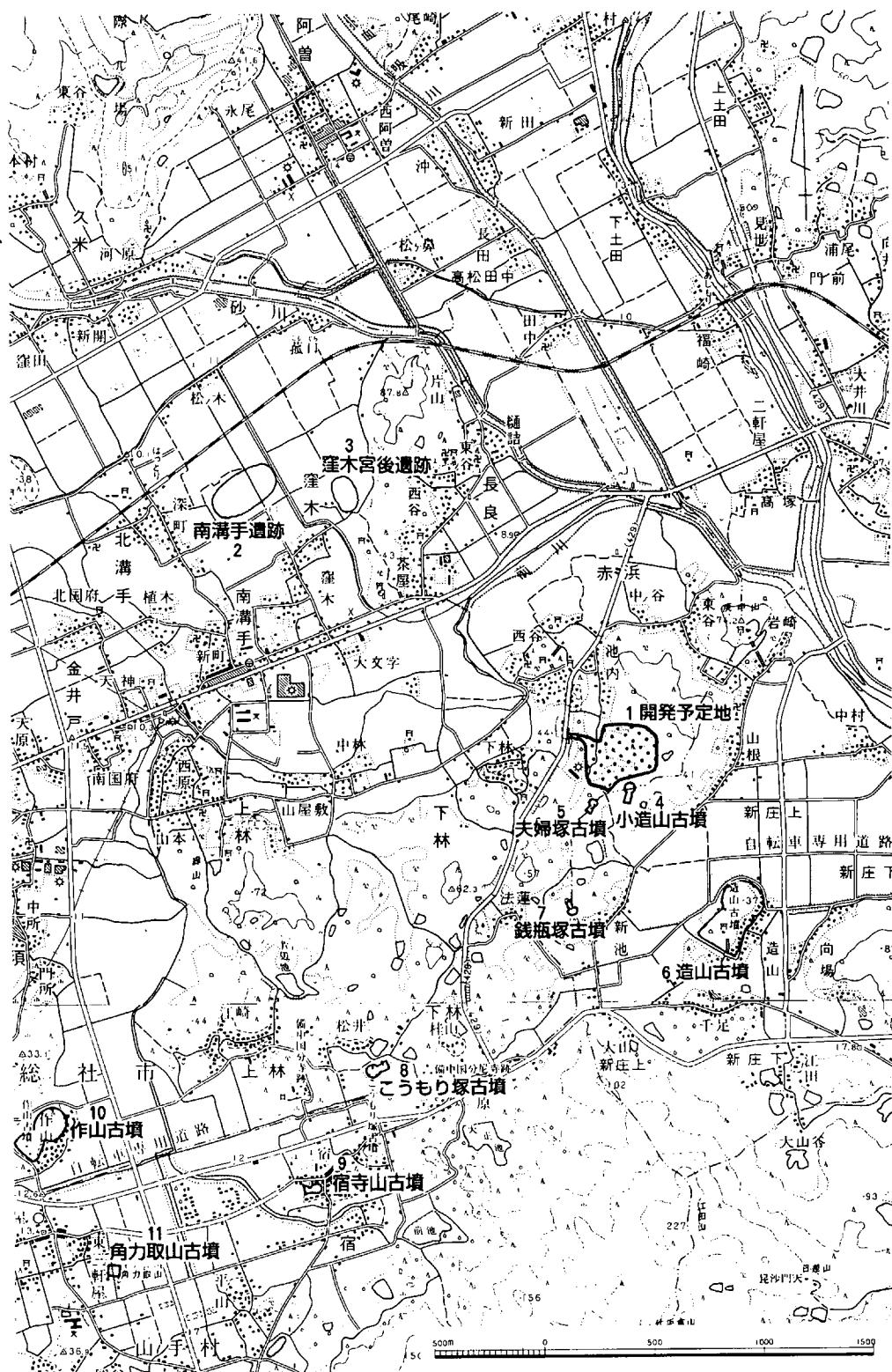
三須丘陵は、仕手倉山塊から北にのびる丘陵群である。北東～南西方向に3.3kmにわたって拡がり、最大幅約1.5km、標高は30～40m前後、最高所の庚申山や稻荷山でも75m前後の、概してなだらかな低丘陵群からなる。この丘陵の南側は、仕手倉山や福山、軽部山などの200m級の主峰列が東西に走る。一方、平地をへだてた北から北西部にかけては、南にのびる低丘陵群から急速に高度を増し、400m級以上の山並みとなって吉備高原の南縁をなす。南北の山並みに挟まれた広大な平地部は総社平野と称され、高梁川や足守川などの河川群の沖積作用によって造り出された沃野である。気候・風土に恵まれたこの地が、遠い過去にあっても先人たちの格好の活動の場になったことはいうまでもない。

三須丘陵とその周辺部には、造山・作山古墳の二大巨墳や備中国分寺・尼寺跡など著名な遺跡が多く、また丘陵内には総数300基を超える大小さまざまな古墳がしられており、いわば文化財の宝庫ともいべき景観を呈している。この丘陵群の約半分は「吉備路風土記の丘県立自然公園」に、さらにその中の備中国分寺・尼寺跡、こうもり塚古墳を含む一帯は同上の特別地域に、北東端の庚申山一帯は「吉備史跡県立自然公園」に指定されているのは、そうした文化財とその景観保持を目的としたものである。しかし三須丘陵は全地区が花崗岩風化土に覆われているため、良質の造成土として部分的な採土が進んでおり、またなだらかな低丘陵であるため古くから畑や果樹園としても開墾されている。さらに近年は風土記の丘県立自然公園指定地外であるが、住宅団地や工業団地の造成も行われ一部地域ではあるものの景観が一変したところもみられる。

さてこの広大な沃野が有効に活用されたのは、先人たちが水稻栽培を取り入れてからである。

総社平野内における集落跡⁽¹⁾の調査は、中央区画整理事業に伴う真壁遺跡、備中国府跡確認調査⁽²⁾、岡山県教育委員会による県立大学建設に伴う南溝手遺跡・前川改修に伴う窪木薬師遺跡などの調査をとおして、少しづつその実態が判明してきた。これまでに検出された遺構でみると、一部に縄文時代のものを含むが、圧倒的大多数は弥生後期から古墳時代初めのものであり、それにつぐのが古墳時代後期で、遺構数は減少するものの中世にいたるものも含んでいる。

一方、岡山県教育委員会が実施した山陽自動車道建設に伴う津寺・高塚・政所遺跡や足守川河川改修に伴う加茂遺跡などでは、弥生後期から古墳時代初めの遺構はいうに及ばず、古代の



第3図 調査地位置図

遺構も先述した総社平野内の遺跡群に比べれば圧倒的に多く、中には官衙的性格をもつものも検出されている。両地域の遺跡群には、調査区の地域性や広狭などの問題はあるものの、一般的な傾向としては首肯されるであろう。従って足守川地域、特に左岸を中心とする地域は、弥生期以降、古代末にいたるまで中心的地位をもつ地域であったといえよう。

ところで三須丘陵内には、300基を超える古墳が所在することは先にふれた。さらにその周辺部に眼を転ずると、まさに圧巻という他ない。丘陵東部には全国的にみても第4位に列される吉備最大の巨墳の造山古墳、その陪塚とされる榎山古墳や千足古墳。南には宿寺山古墳。西には作山古墳と角力取山古墳がある。発生期の有力墳を欠くものの、造山古墳、作山古墳は吉備の大首長墳であり、5世紀代においてこの地域がいかに枢要な地であったかを如実に物語っている。丘陵内にあっても、折敷山古墳、小造山古墳、夫婦塚古墳、銭瓶塚古墳など吉備政権を支えたであろう有力首長墳がある。このうち特に注目されるのは小造山古墳である。三段築成の前方後円墳で、全長約142m。吉備有数の大古墳の一つに数えられるものである。未調査墳であり、その実体は不明だが、数少ないながら表面採集で得られた円筒埴輪や外形観察から、前Ⅲ期後半に比定⁽⁴⁾されている。吉備ではその全域を統括する大首長墳として、造山古墳から作山古墳へと推移し、以後は備前に両宮山古墳、備中に宿寺山古墳への二極化が想定されているが、その過程にあると考えられる小造山古墳の存在は、極めて注目されるものであろう。また今回の調査でその一端が明らかとなった折敷山古墳についても、県内で一、二を争う大方墳として、しかも造山古墳とほぼ同期と考えられたことも、極めて意義深いことであろう。古墳時代後期になっても、この丘陵には巨大な横穴式石室墳が築かれている。こうもり塚古墳、江崎古墳、その背後の緑山古墳群や丘陵東部の翁塚古墳、新池大塚古墳。また用地に隣接している梅ノ子谷大塚古墳などは、巨大な石室を今に伝えている。

(村上幸雄)

註1 1980~82年にわたって総社市教育委員会が発掘調査。弥生~近世の集落跡。報告書未刊。一部は『総社市史 考古資料編』1987に掲載。

2 総社市教育委員会「備中國府跡緊急確認調査」(『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』7, 1989)

3 岡山県教育委員会「山陽自動車道と埋蔵文化財」(『教育時報』1991・12)

4 葛原克人「古墳時代前期」(『岡山県の考古学』1987)

“ 「備中」(『前方後円墳集成』中国・四国編, 1991)

3. 折敷山遺跡の調査

(1) 集落の位置と環境

総社平野は、肥沃で広大な平野である。けれどもその中には独立あるいは半独立した小山塊がいくつも認められ、その最大規模を誇るのが三須丘陵である。この丘陵の北東部、赤浜地区に折敷山遺跡は位置している。

折敷山遺跡は、総社市赤浜字折敷山南と辺り谷山とに所在する、弥生時代の小集落である。

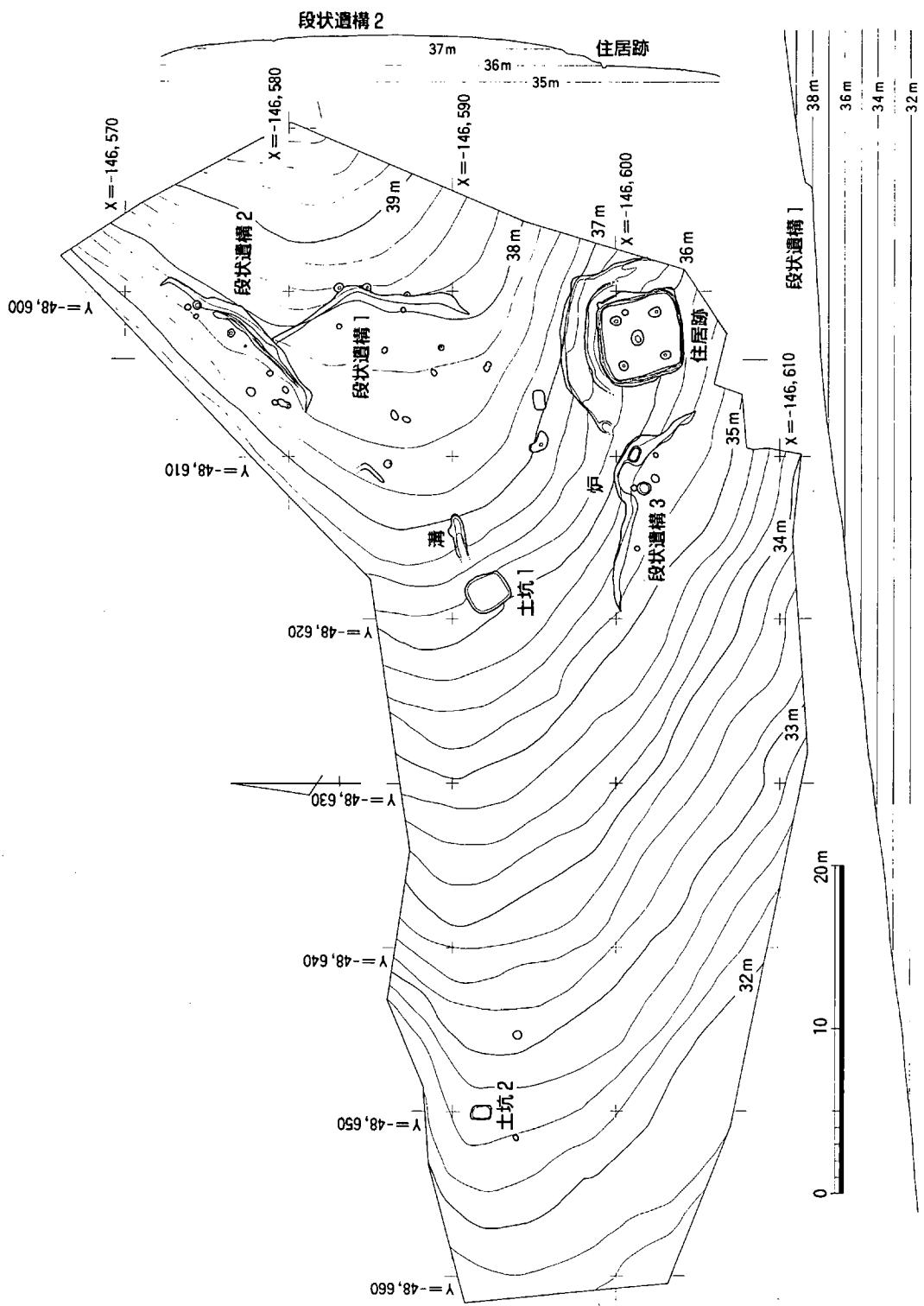
開発用地の北東に接する標高70.8mの頂からは、西に向かって小尾根が細長く派生している。この小尾根は用地をばば南北に2分するようにしてのびており、その付け根部分に集落が営まれている。標高は35~38m、谷部との比高差24mを測る。集落構成は、わずかに住居跡1軒ほかであり、およそ遺跡範囲は40×25mの約800m²にすぎない。

三須丘陵における集落遺跡の発掘調査例はなく、立会・確認調査を含めても、わずかに弥生土器の散布を確認したにとどまるか、地形的に集落の存在が予想されているかである。けれども、三須丘陵以外でみると、高梁川分流域においては千引・新池ノ奥・天満遺跡、新本川流域においては高本・板井砂・大ノ奥遺跡など、丘陵上に立地した遺跡の発掘調査例がある。

千引遺跡では、比高差60mと非常に高い丘陵上に立地し、3地点で総計住居跡15軒ほかの遺構が検出されている⁽¹⁾。また、新池ノ奥遺跡も同様にかなりの比高差があり、住居跡5軒ほかである⁽¹⁾。いずれも弥生時代中期末の集落と考えられる。これら高所に立地する遺跡に対して、天満遺跡（山手村）では比高差18mと低丘陵上に立地し、かつ50軒以上にもおよぶ住居跡が検出されており、弥生時代後期～古墳時代の集落と報告されている⁽²⁾。

遺跡周辺の平野部においては、県立大学建設に伴う南溝手遺跡（第3図2）、窪木宮後遺跡（第3図3）の発掘調査や、前川改修に伴う調査（窪木薬師遺跡）、赤浜地区ほ場整備に伴う調査（鶴亀遺跡）が実施されている。これらの遺跡では、弥生時代後期から古墳時代にかけての遺構・遺物が多いものの、弥生時代中期の遺構・遺物も検出されており、窪木宮後遺跡ではガラス滓も出土している⁽³⁾。

総社平野における弥生時代集落は、拠点集落と推定される真壁遺跡を中心とし、前期おわり～中期はじめの段階で周辺の微高地上にも小規模集落を派生させ、中期中ごろにはガラス工房を備えるまでに発展した集落さえ認められる。そして中期おわりの段階には丘陵上にも集落が派生するものの後期までは継続しない。後期には、とくにそのおわりごろにいたって爆発的に



第4図 折敷山遺跡 遺構配置図

集落が増え、いずれも畿内地方と歩調を合わせた傾向が認められる。

なお、雲上山11号墳の調査中に検出された近世墓や溝、それに陶磁器等も便宜的に本遺跡に含め、報告する。

(2) 遺構と遺物

遺跡の立地する丘陵は、古くより開墾されており、試掘調査では中世に遡る時期の遺物もみられる。丘陵地の畑であるから、山側においては掘削をし、谷側においては掘削された土砂をもって埋め出し、平坦地を造っている。つまり段々畑である。丘陵斜面を削り落としていることから開墾時以前の遺構は、削り取られて消滅し、あるいは埋められて残されるという、両極端の経緯を経て現在にいたっている。しかも、斜面の傾斜がきついところでは掘削部が多く、埋め出し部が少ないものとなり、遺構の残される可能性は低い。その反面、傾斜の緩やかなところでは掘削部が少なく、埋め出し部が多く、遺構の残される可能性は高くなる。

折敷山遺跡では、南斜面が緩く、北斜面がきついという丘陵地上に立地している。遺跡範囲とした部分は、丘陵尾根線上の平坦な部分と傾斜の緩やかな南斜面であり、それ以外の急な北斜面や南斜面の開墾されたところについては除外している。このほか、折敷山遺跡と折敷山古墳との間には傾斜も緩やかで、広い平坦面が尾根線上を中心に残されている。試掘調査の結果では、遺構が検出されず、遺物もわずかであった。しかも弥生土器においては皆無である。後世の開墾によって遺構が消滅したと考えても、埋め土内に遺物が残らないのは不自然である。もともと遺跡として利用されたところではないものと考えられる。

なお、出土した弥生土器については、丘陵地という保存状態にあったため、例外なく器壁が剥落あるいは風化している。そのために調整手法が不明であったり、端部の形状などがやや磨滅していたりする。さらには土層堆積が活発でないために、完形品での出土ではなく、小片となっているものが多い。このような状況であるから土器の傾きや口径などにやや不安をのこすものの、実測はできるかぎり多くの器形・器種にわたって行うこととし、ここに報告する。

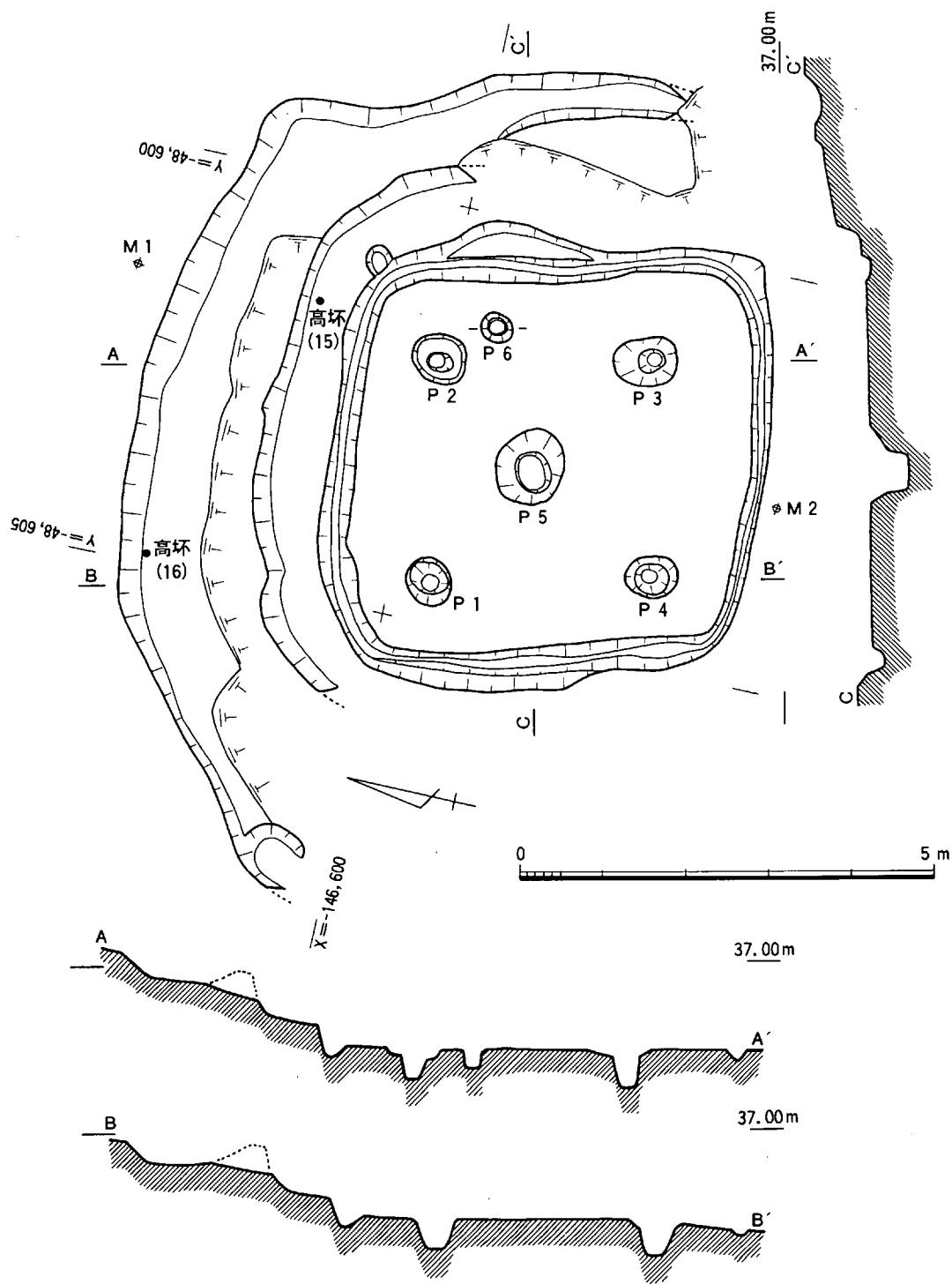
以下、各遺構とその遺物、そして遺構にともなわない遺物の順序で記述し、時期等については小結でまとめる。

住居跡（第5図～7図、図版3・6）

丘陵の稜線よりわずかに下がった、南斜面に位置している。

平面形は、ややひしゃげているもののほぼ方形プランを意図しており、四隅がわずかながら丸い。規模は、内のりで $4.7 \times 4.3\text{m}$ を測り、それに幅30・深さ10cmの壁帶溝がめぐる。

住居跡の山側においては2段のテラスが削り出されている。下段は住居跡内のテラス、上段は住居跡外の雨落溝的な機能をもったテラスと考えられる。下段テラスの幅は60cm、上段テラ



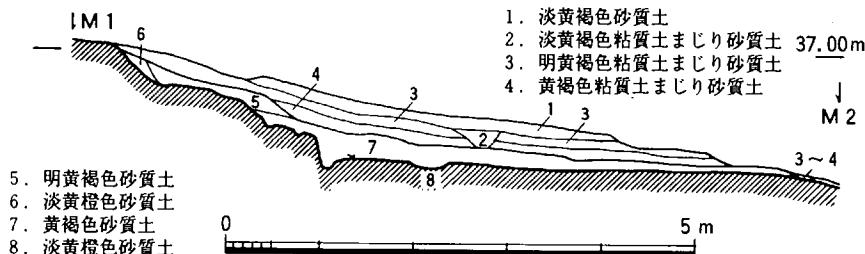
第5図 住居跡 平・断面図

スの幅は1.2mを測り、どちらのテラスにおいても、また壁帶溝からも屋根を葺き下ろした、あるいは壁を立てたことを推定させる小ピット等は検出できなかった。ただし、土層断面の作図時点では、下段テラス上に直径8cmほどの小ピット状を呈する凹みが検出されている。垂木尻が埋め込まれていた痕跡であろうか。

主柱の配置は四本柱である。各柱間は260cmと揃っており、掘形は40~60cmの円形または梢円形で、深さ30~40cmを測る。柱穴の底径からは直径20cmほどの丸柱を立てていたものと推定される。上部構造については、これまでの研究成果を進展させるような、遺構・遺物の検出状況ではなかった。けれども、一般的に西日本の弥生時代の堅穴住居は同心円形プランが主流であり、隅円方形プランは弥生時代V-V⁽⁴⁾期末に現れるとしているが、各遺跡によってその状況は異なり、その出現時期も後期より遡るものであろうか。⁽⁵⁾

住居跡の中央には炉が置かれている。炉は、径80~90・深さ47cmを測る。掘形は上半が擂鉢状で、下半がピット状となる。埋土には炭が多く含まれていた。

住居面積は、内のりで約19.4m²となり、内側のテラスまで含めると推定約39.6m²である。



第6図 住居跡 土層断面図

出土遺物は、住居跡の埋土（覆土からが多く、流土からは少ない）、あるいはテラス内よりわずかの弥生土器片が検出されたほか、柱穴内より土器片とサヌカイト剥片が出土している。

なお、流土とした土層は第1~4層で、覆土とした土層は第5~7層である。（第6図）。その区別は土色・土質のほかに、堆積過程の違いから土層の堅さがかなり異なっていたことによる。中でも第7層は非常に堅く締まっており、弥生土器片や炭粒を多量に含んでいた。流土とした土層は非常に軟らかく、新しい時期まで土砂が移動していたものと考えられる。

弥生土器には、壺・甕・高壺ほかの器形がある。いずれも全体の形をうかがえるものはない。

壺（1） 器種は広口で、口縁端部を上部に拡張している。端面には3条の凹線を施すほか、調整手法は剥落等により不明。

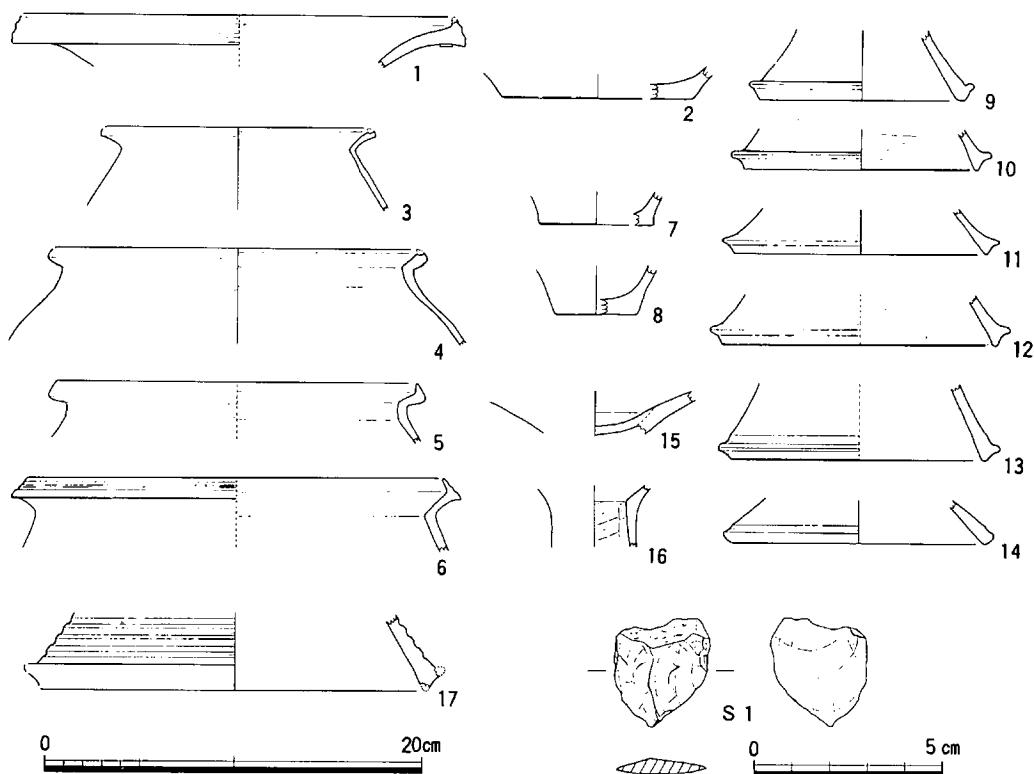
甕（3~6） 口径からは、中型の甕と、小型の甕とがある。3は「く」の字状に口縁を折り曲げ、端部をわずか上方内側にまるめている。4も同様に、「く」の字状口縁で、わずかに端部を拡張する。5は頸部をわずかに立ち上げ、口縁端部の拡張もやや大きくなっている。さ

らに 6 は、口縁端部の拡張が下部にまで認められ、上部の拡張もかなり大きく、その端面には 2 条程度の凹線が施されている。

高坏（9～16） 脚部と坏底部のみであり、坏部の形状はわからない。脚部は、端部を外上方に拡張し、端面に凹線を施したものが多い（9～13）。14は、端部を拡張せずに、1条の浅い凹線を施しておさめている。調整は、剥落や磨滅により確認しにくいが、いずれも外面をヨコナデ、内面を横方向のヘラケズリとしたものである。坏部と脚部の接合は、円盤充填（15）。

器台（17） 脚部片である。端部はわずかに欠失しているものの、端面に凹線を施していることから、上部に拡張しているものとみられる。外面には「V」字に近い凹線を連続して施す。

石器（S 1） サヌカイト剥片である。長さ 29.0・幅 25.5・厚さ 4.0mm、重さ 3.1g を測る。調整は自然面を残した片面調整で、細部調整は認められない。P 6 出土。

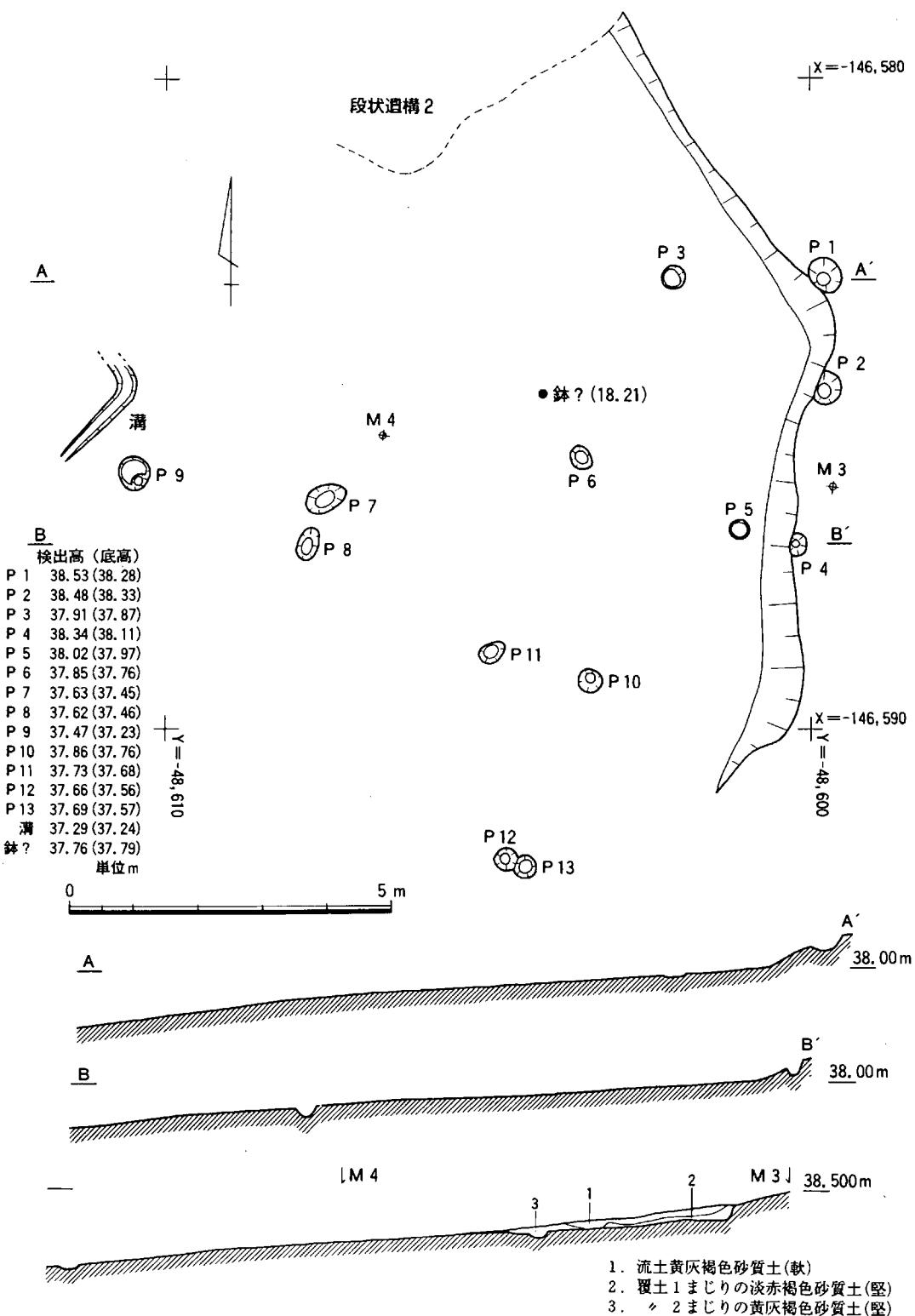


第7図 住居跡 出土遺物

段状遺構（8～11図、図版4・7・8）

段状遺構1 丘陵の稜線上にあり、一部は段状遺構2と接している。

遺構は、幅 12m にわたって深さ最大 30cm の地形カットを行い、覆土とした埋土（第 2・3 層）の広がりからは 4.6m、面積にして約 45m² の平坦面をもつ。ただし、丘陵の傾斜が非常に緩い



第8図 段状遺構 1 平・断面、土層断面図

地点であることからもともとの平坦面はさらに広いもので約100m以上あったと考えられる。

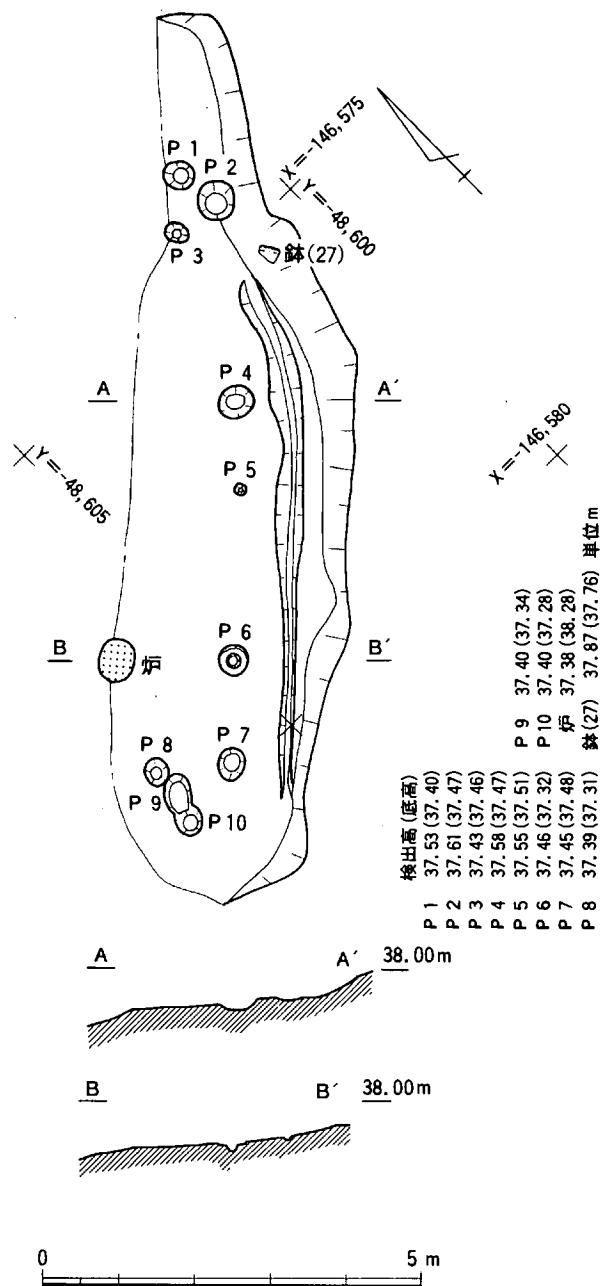
平坦面と地形カットの山側に接した位置からはいくつかのピット群が検出された。ピット群は、直径50cmほどのものと30cmほどのものとがあり、掘り込みは深くて20cm、浅いもので5cmである。いずれも規則的な配列は認められず、樹木痕の可能性が高い。おそらく段状遺構3には堀立や高床建物が置かれたものではなく、中央広場的な機能をもった平坦面であろうか。遺構が尾根上平坦面にあることからもこのことを裏付けていようか。

出土した弥生土器は、ほんのわずかである。甕(18)と高坏(21)が床面よりまとまって出土しており、台付きの鉢となる可能性もあるが、器壁の厚みが違いすぎることからここでは別の器形としている。

甕(18~20) 口縁部片のみであり、全体の形はわからない。甕と分類すべきものを甕としているかもしれない。⁽⁶⁾ いずれも口縁部は上下に拡張させており、その端面には3~5条の凹線を施す、中型の甕である。

高坏(21) 坏部と脚部の接合部分であり、円盤充填による接合を行っている。外面は縦方向のヘラミガキ。

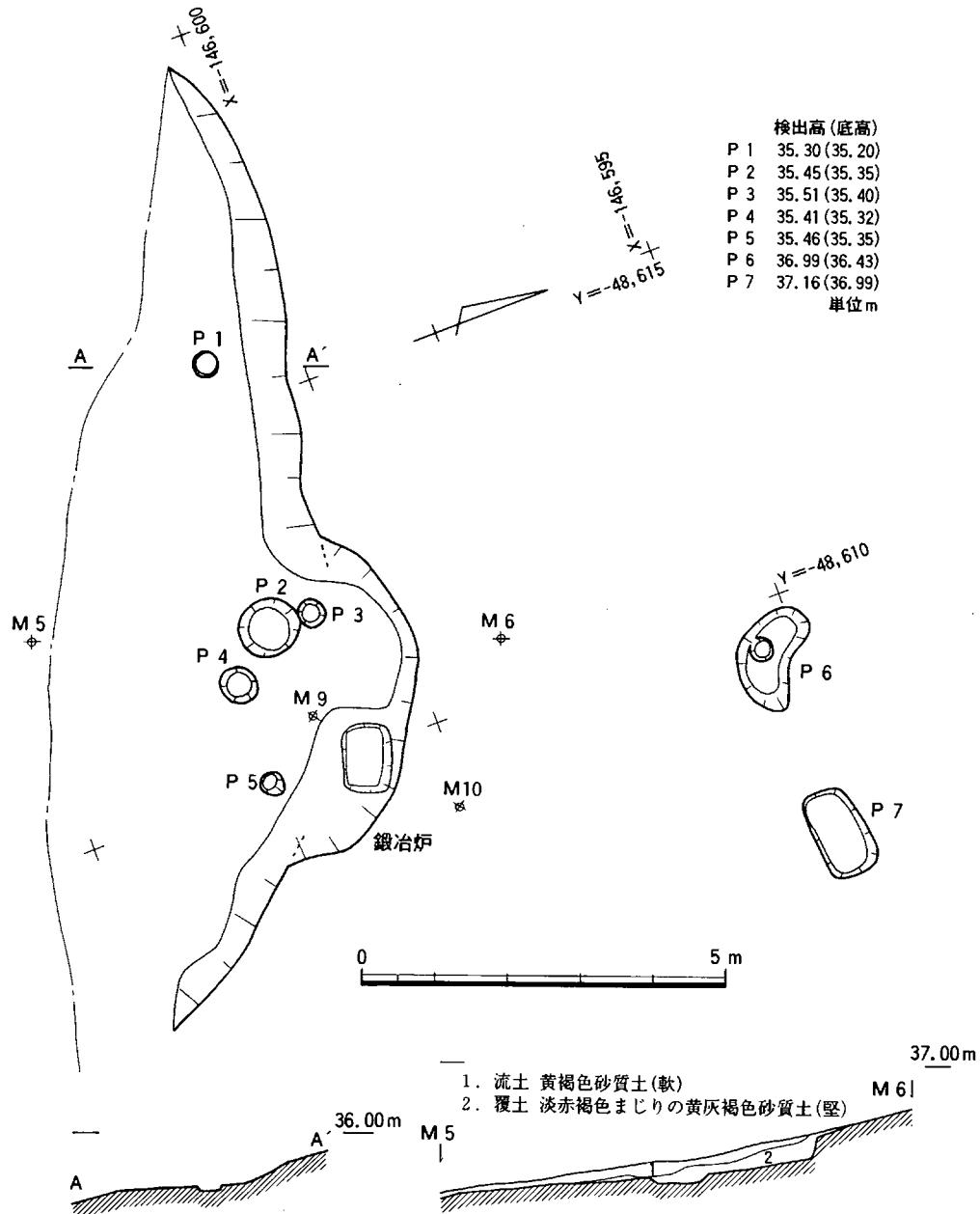
段状遺構2 北斜面で検出された。等高線に沿って幅11.8m、深さ15cmの地形カットを行い、約3mの削り出しによる平坦面をつくる。山側には深い溝がめぐり、平坦面にはピット群が掘られている。溝は幅15~40・深さ4~7cm、ピットは直径30~50・深さ4~14cmを測る。ピット群の配列からは建



第9図 段状遺構2 平・断面図

物を復元できないものの、直径50cm程度の焼けた面が検出されていることや、流失したもの埋め出しによる平坦面の造成がなされていたであろうことから、何らかの建物が建てられていたものと推定される。

出土した遺物は、弥生土器であり、甕・高環・鉢の器形がある。いずれも細片で、鉢（27）が地形カットされた斜面上にあったほかは、いずれも覆土内からの出土である。



第10図 段状遺構3 平・断面、土層断面図

甕 (22) 小型の甕である。口縁部を上方内側に折り曲げることにより端部が拡張され、その端面には2条の浅い凹線を施す。

高坏 (24~26) 26は、坏部の上半分を欠失しているが、やや深めの壠状となろう。脚部は端部の拡張がなく、1条の凹線を施すのみである。坏部と脚部との接合は円盤充填で、脚柱部外面の突帯はみられない。25は、脚部片である。端部を上方に拡張し、外面をハケのちナデ、内面を横方向のヘラケズリで調整している。端面には凹線が認められない。24は、円盤充填により接合した坏底部の破片である。

鉢 (27) 従来は、大型の高坏として分類されていたものの、ここでは台付きの大型鉢としておきたい。

口縁部は、かなり浅く広がる体部よりシャープに直立させ、端部では水平方向に肥厚させている。直立させた口縁部の外面には6条の凹線が施されている。調整は、口縁部がヨコナデ、体部が丁寧なヘラミガキと考えられるが、剥落等によりほとんど確認できない。

段状遺構 3 南斜面で検出された。35.5mの等高線に沿って、深さ約20cm、幅13mにわたる地形カットを行い、約2mの平坦面を削り出している。この遺構の西側にはやや等高線のひらく部分が認められ、段状遺構3が続いていたものと考えられる。同様に、東側には竪穴住居の南端が接していることから、段状遺構3は住居に向かう、通路的な機能をもった平坦面と推定される。

平坦面からはわずかのピットが検出されている。ピットは直径50cmを越すものと35cm前後のものとがあり、いずれも深さ10cm程度と浅い。樹木痕か、あるいは段状遺構を切り込んで築かれている炉に伴うものか。

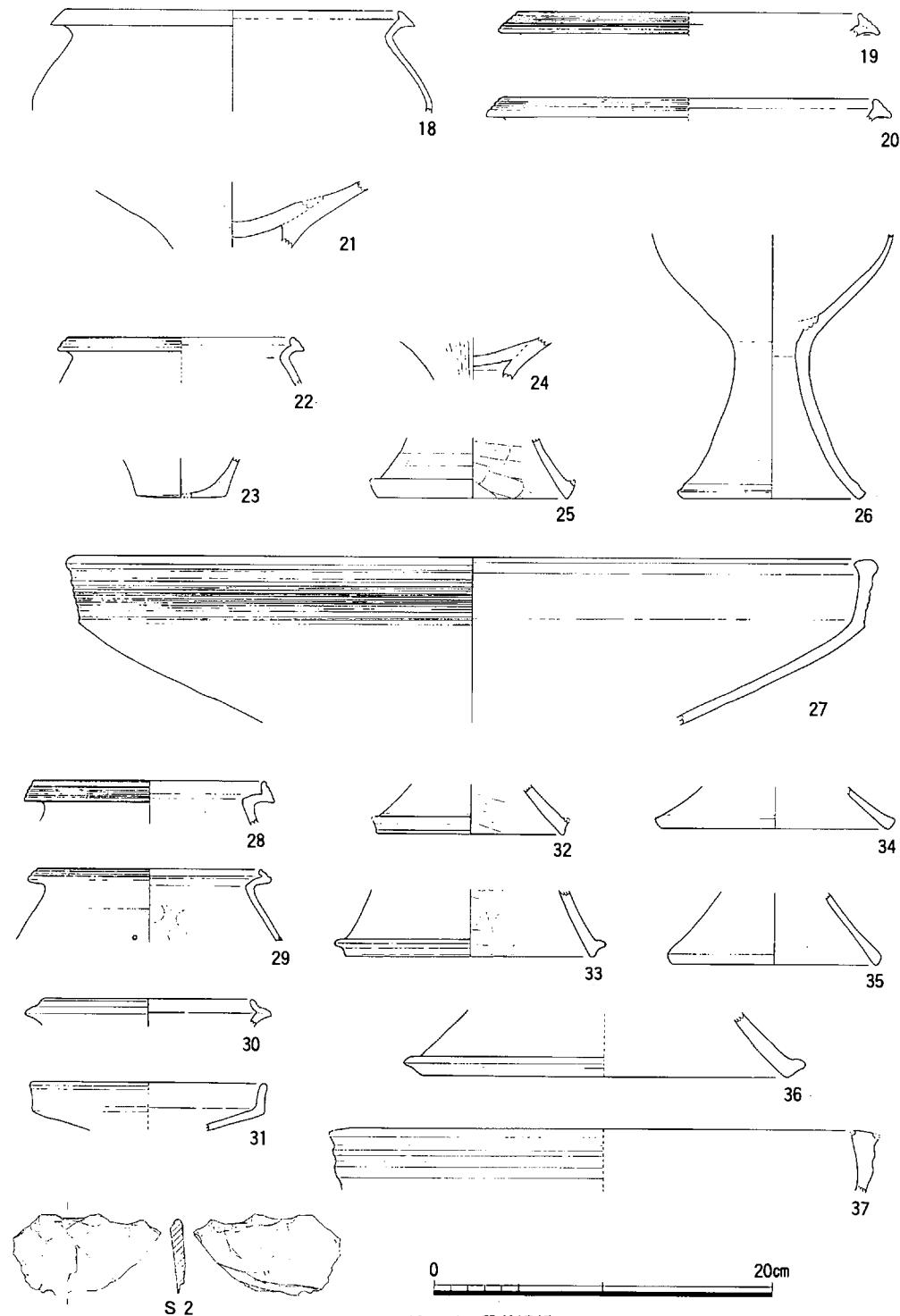
出土遺物は、弥生土器のほか、サヌカイト剝片がある。そのほとんどが流土、あるいは段状遺構3の一部を壊して築かれた炉の埋土から出土したものである。

甕 (28~30) いずれも小型の甕である。28がやや直立気味に、29・30がやや内傾気味に、口縁端部を折り曲げて拡張している。端面には凹線を施す。口縁部はヨコナデ、体部はハケによる調整である。29の体部外面には、竹管文の刺突がみられるが、その間隔は小破片のため不明である。

高坏 (31~36) 直立させた口縁部をもつ坏部片が1点のほかは、すべて脚部片である。

脚部片は、端面に凹線を施することで、上部を拡張しているものが多い(32・33・36)。しかし、端部の拡張をしないものもあり(34・35)、かつ凹線をもたない。この相違は坏部の形状によるものと思われる。後者は、段状遺構2出土の高坏(26)のタイプか。

鉢 (37) 口径からは、高坏とも考えられる。やや内湾気味の口縁部で、外面に幅広の凹線を連続して施している。



18~21：段状遺構 1
22~27：段状遺構 2
28~37・S 2：段状遺構 3

第11図 段状遺構 出土遺物

石器 (S2) 細部調整をもたない横形剝片で、長さ47.5・幅88.0・厚さ8.0mm、重さ30.9gを測る。打面調整にともなう小さな剝離が一辺に集中し、また先行剝離面も認められる。材質はサヌカイト。

土 坑 (第12~14図、図版5・9)

丘陵の稜線上にあり、一つは段状遺構1の下、約14m離れたところに位置しており、もう一つは、さらに30mほど下ったところで検出された。

土坑1 長軸2.5・短軸2.2・深さ0.42mの規模で、埋土は黄褐色砂質土である。土坑の底や埋土中より、多くの弥生土器片が若干の炭とともに出土した。ゴミ穴であろうか。

壺 (38~40) 広口壺の口縁部片であり、口縁端部に向かって大きく開いていく39とあまり広がらない38がある。どちらも端部は拡張して端面に3条の凹線を施すが、端面の作り方には違いが認められ、前者は垂直、後者は内傾している。

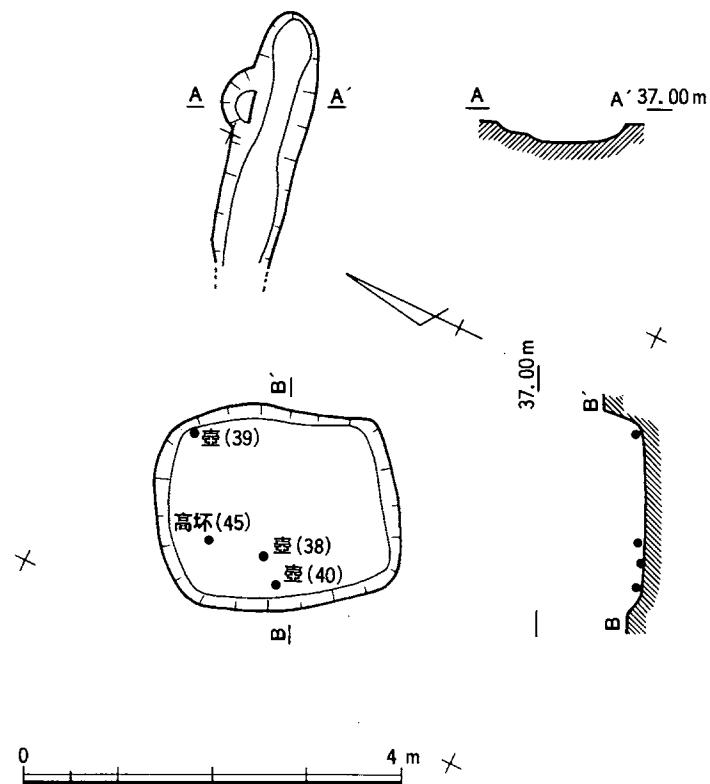
40は胴部の上半のみであり、口縁部の形状などは不明。広口か。胴部中ほどにはハケ状工具による刺突が施されている。調整は、外面が胴部中ほどを横方向のヘラミガキ、それ以上を縦方向のハケと、ハケの一部

を消すようにして肩部にナ
デ。内面は斜めのハケで、
指頭圧痕が多く残る。

壺 (42・43) 小型と中
型とがあり、どちらも「く」
の字口縁である。43は端部
を拡張していないが、42は
内側に拡張させており、端
面には凹線を施している。
42の頸部には、キザミを施
した張り付けの突帯がめぐる。

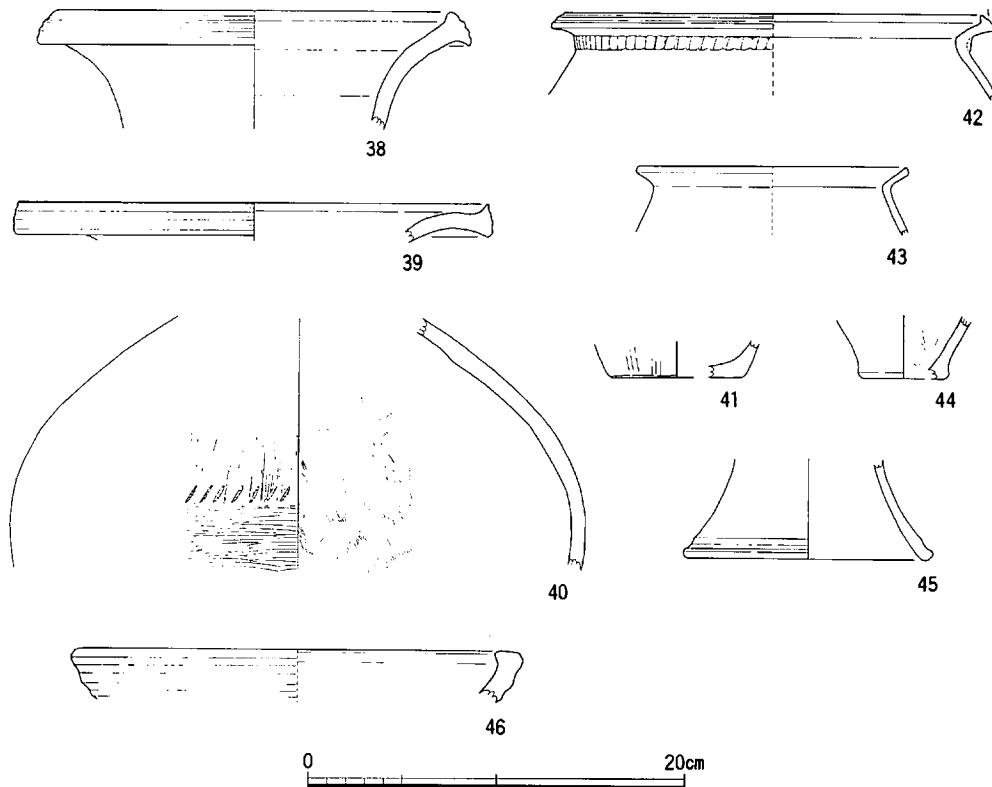
高坏 (45・46) 45は脚
部片で、端部を拡張するこ
となくまとめており、1条
の凹線がめぐるのみ。坏部
の形状は段状遺構2出土の

高坏 (26)と同じタイプか。



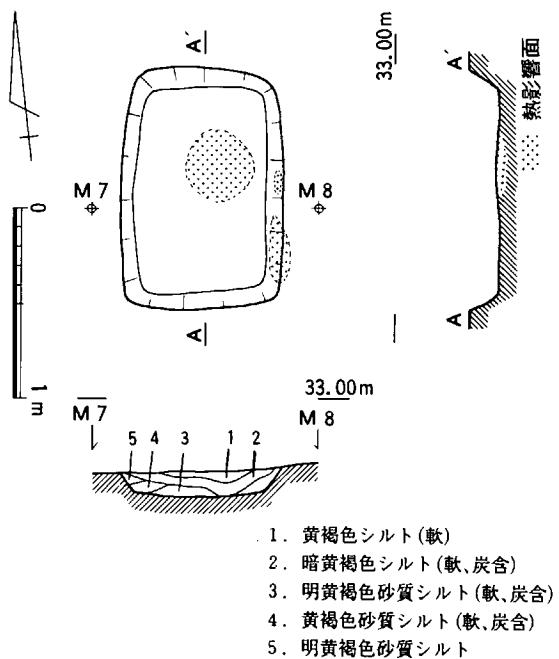
第12図 土坑1 溝 平・断面図

46は大型の鉢となる可能性もあるが、端部を肥厚させ、外面に凹線を連続させている。



第13図 土坑1 出土遺物

土坑2 長辺130・短辺86・深さ14cmを測る。土坑の底面には直径35cm程度に、壁面には部分的に、火を受けてやや赤く変色したところがあり、数cm程度の炭層も土坑底に残っていた（第3層）。遺物は出土しなかったが、埋土が非常に軟らかいこと。住居跡や段状遺構など遺構の集中している遺構群からは30m以上離れていることや土坑2のほかにはピットが二つ検出されたのみで、遺物もまったく出土しなかったこと。これらのことから土坑2は、弥生時代の折敷山遺跡に関係する遺構ではなく、弥生以降、おそらく近世の焚火跡ではないかと考えられる。



第14図 土坑2 平・断面、土層断面図

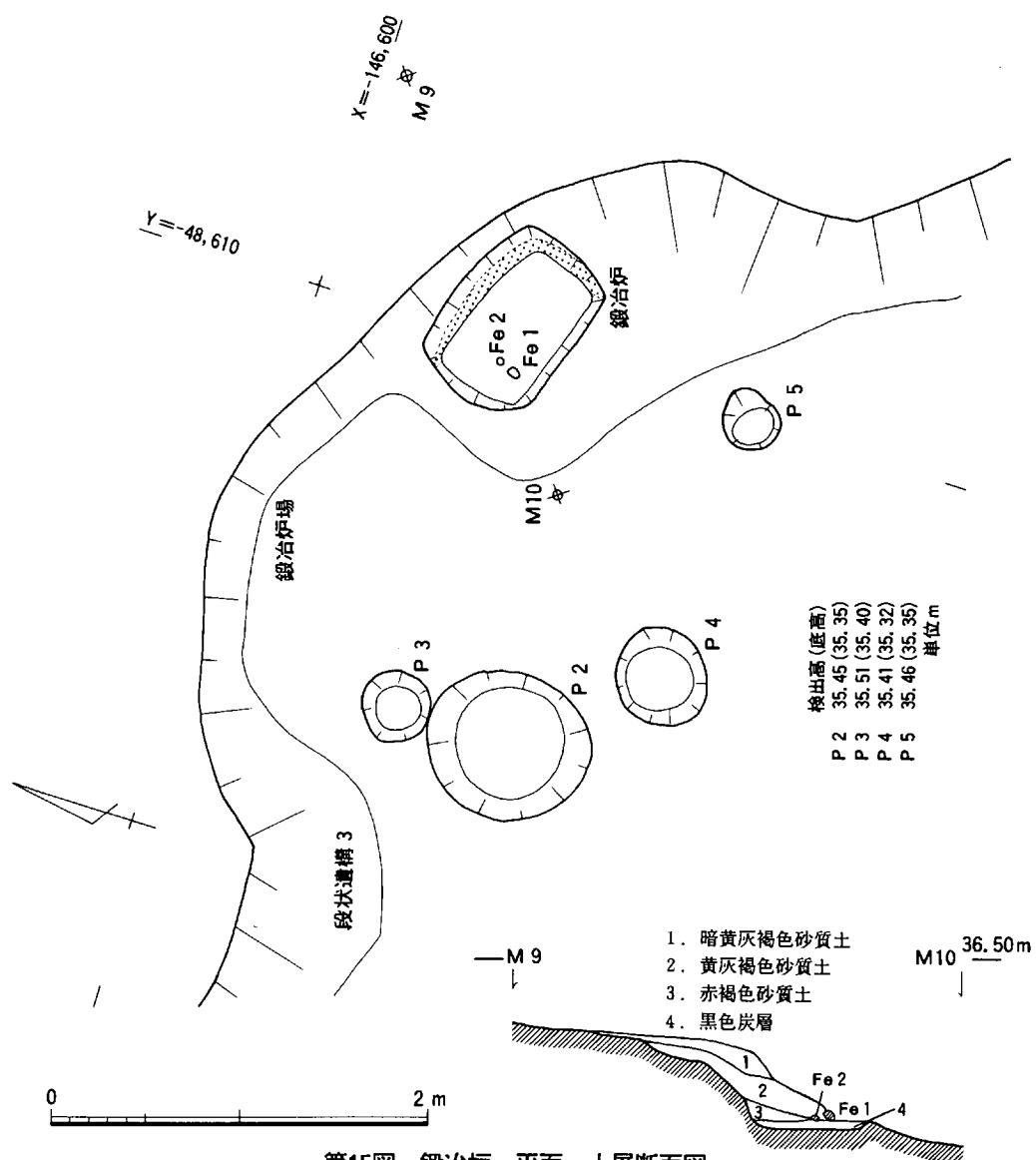
番号	器形	出土地点	法量(cm)	残部	胎土	色調	備考
1	壺	住居跡覆土	口 径(22.8)	1/12	微砂多	淡黄褐色	
2	"	"	底 径 9.8	1/ 6	細砂多	"	
3	甕	"	口 径(13.8)	1/ 8	"	"	
4	"	"	口 径(19.0)	"	"	"	
5	"	"	口 径(19.0)	1/12	"	"	
6	"	"	口 径 22.0	"	"	"	
7	"	" P 2	底 径 6.0	3/ 4	微砂多	淡橙褐色	
8	"	" P 4	底 径 4.0	1/ 4	"	淡茶褐色	
9	高 坏	"	脚 径 10.8	1/16	微砂少	淡黄褐色	
10	"	" テラス	脚 径 12.4	1/ 6	"	"	
11	"	"	脚 径 13.4	1/ 8	微砂多	淡橙褐色	
12	"	"	脚 径(14.4)	1/12	微砂無	明黄褐色	
13	"	" テラス	脚 径(13.2)	1/10	細砂多	淡黄褐色	
14	"	"	" 13.3	1/ 8	微砂少	"	
15	"	" c1	円盤径 5.6	完	"	"	
16	"	" c2	-	2/ 3	"	淡橙褐色	
17	"	" 覆土	脚 径(20.3)	1/ 6	微砂少	淡黄褐色	
18	甕	段状遺構 1	口 径 17.7	1/ 6	細砂多	"	
19	"	"	口 径(22.0)	1/15	"	"	
20	"	"	口 径(20.3)	1/12	"	"	
21	高 坏	"	円盤径 5.4	1/ 3	"	"	
22	甕	段状遺構 2	口 径(13.2)	1/12	微砂少	"	
23	"	"	底 径 5.3	1/ 3	微砂多	"	
24	高 坏	"	円盤径 3.3	完	"	赤橙褐色	
25	"	"	脚 径 11.2	1/ 6	微砂少	"	
26	"	"	脚 径 10.5	1/ 4	微砂多	淡黄褐色	
27	鉢	"	口 径 47.2	1/ 5	微砂多	黄褐色	
28	甕	段状遺構 3	口 径 13.6	1/ 8	"	淡黄褐色	
29	"	"	口 径 13.2	1/ 4	細砂多	"	
30	"	"	口 径 12.3	1/ 5	微砂少	淡橙褐色	
31	"	"	口 径(13.6)	1/12	微砂多	"	
32	高 坏	"	脚 径 11.0	1/ 5	微砂多	淡黄褐色	
33	"	"	脚 径 14.6	1/ 6	"	"	
34	"	"	脚 径 13.4	1/ 5	"	淡橙褐色	
35	"	"	脚 径 12.0	1/ 6	"	"	
36	"	"	脚 径(21.6)	1/12	細砂多	淡黄褐色	
37	鉢	"	口 径(29.4)	1/20	微砂多	橙褐色	
38	壺	土 坑 1	口 径 20.6	1/ 8	細砂多	黄褐色	
39	"	"	口 径 25.0	1/ 6	微砂多	"	
40	"	"	胴 径(30.6)	1/ 3	細砂多	淡黄褐色	
41	"	"	底 径 6.8	1/ 4	"	"	
42	甕	"	口 径(22.2)	1/10	"	"	
43	"	"	口 径 14.2	1/ 8	"	淡橙褐色	
44	"	"	底 径 4.3	1/ 5	微砂多	淡黄褐色	
45	高 坏	"	脚 径 12.6	1/ 4	"	明褐色	
46	鉢	"	口 径(23.6)	1/14	"	赤橙色	
47	壺	表 採	口 径 8.2	1/ 8	"	淡橙褐色	

第1表 折敷山遺跡出土弥生土器觀察表

鍛冶炉（第15・16図、図版4）

段状遺構3の検出中、炭と焼土が集中し、しかも鉄滓が出土した。土層観察のセクションを残したもの、すでに段状遺構として掘り下げを行っており、その流土内より須恵器刃が1点出土したほかは、須恵器も鉄滓も新たに検出できなかった。平面的には、この部分が大きく山側にふくらんでおり、段状遺構とは別遺構として理解できるものの、はっきりとした切り合い関係はおさえられなかった。鉄滓がわずかであるが出土していること、土坑状の掘り込みの底に炭層が残され、壁面が赤く焼けて変色していること、などから鍛冶炉と推定される。

須恵器が段状遺構より出土していることから、一応は古墳時代の鍛冶炉と考えているが、こ



第15図 鍛冶炉 平面, 土層断面図

れ以外に同時期の遺構が遺跡内よりまったく検出されておらず、須恵器片を混入として、弥生時代の炉跡とも考えられる。

炉の規模は、幅4.3m、深さ35cmにわたって丘陵の斜面をカットし、さらに上端で96×68cm、下端で80×48cmの長方形土坑を壁際に堀り込んでいる。土坑の深さは16cmを測り、底に5cmほどの炭層、その上に焼けた壁や赤色に変色した砂質土、そして炉を埋めた地山の砂質土が堆積していた。北側と東側の壁面は、熱により赤く変色しているものの、炉壁は崩れ落ちており残されていない。

鍛冶炉となる土坑は、斜面カットによる平坦面の東端に築かれており、大きく作業空間が残される。P 2は水槽かもしれない。

須恵器・甕？（48） 第1層の黄灰褐色砂質土（流土）より、小破片の須恵器が1点出土した。外面に平行タタキ、内面にややナデ消されたような同心円文がみられる。断面はセピア色で、焼きもかなり良い。微砂をわずかに含み、淡青灰色を呈す。炉に伴うものか、あるいは開墾によって消滅した古墳の遺物かもしれない。

鉄滓（図版4） 炭層のほぼ上面において2点出土した。ともに5×3cmほどの大きさで、重量は95.6gと84.0gを測る。

溝（第12図）

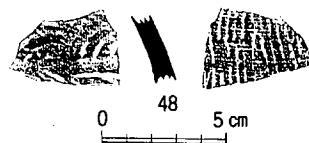
土坑1のすぐ山側、約1.5m離れたところに位置する。幅70・深さ11cmで、長さ2.6mにわたって検出されている。埋土は黄灰褐色砂質土である。人工的な溝ではなく、山水が流れたことで地山が削り取られ、溝となったものと推定される。遺物は出土しなかった。

火葬墓（第17図、図版5・10）

雲上山11号墳の発掘調査にともなって、火葬墓1基と溝3条を検出している（第21図）。

火葬墓は、地面を長方形に堀り込んだ土壙で、長さ2・幅0.67m、深さ25cmを測る。埋土は3層に分層され、下層に木炭、中層に焼けた壁土が認められる。土壙の底面中央部には30~40cmほど、また長辺の両壁には長さ1.2mにわたり、ともに火を受けたことによる赤色化現象が認められ、とくに壁面の縁部では焼土壁ともなる。このような検出状況に加えて、錢貨とわずかな火葬骨？が出土したことから、火葬墓と考えている。おそらく底面に燃料となる木材を敷いて、その上に寝棺を据え、さらに燃料を被せて火葬とする、荼毘を行ったものであろうか。骨片がほとんど残されていないことや錢貨が上層より出土していることから、拾骨され、新たに墓地へ葬られたものと思われる。

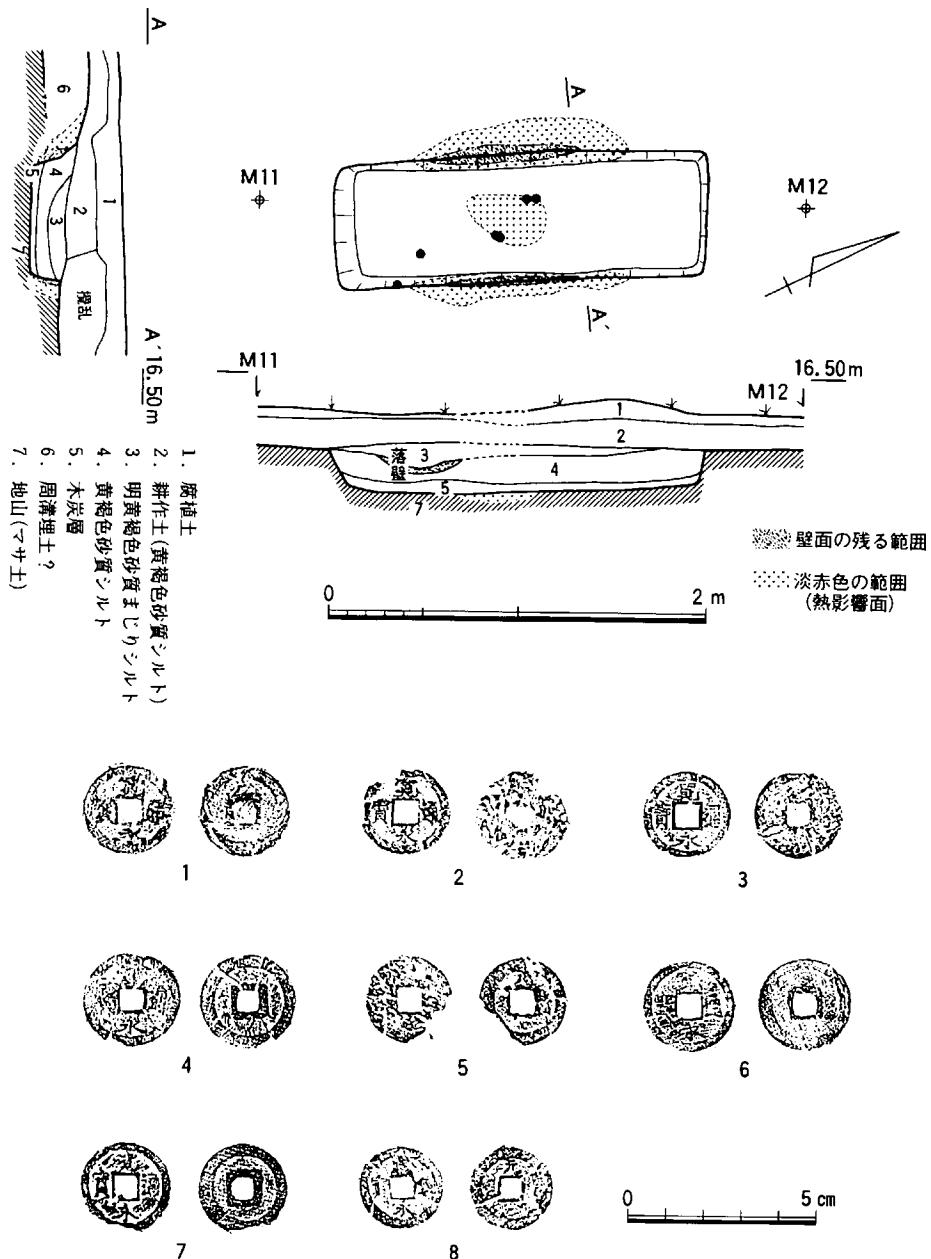
六道銭（1~9） 火を受けているため、いずれももろく、かつ鏽がかなり進行している。銭名の不明のものもあるが、すべて寛永通宝と考えられる。出土した錢貨の枚数は9枚で、1



第16図 鍛冶炉 出土遺物

枚のみが鉄錢、あとは銅錢である。出土状況は、土壤底面中央部の赤く焼けた面の上に4枚、南東の壁際にかなり浮いた状態で3枚、埋土中から2枚であった。

寛永通宝の初鋳は、水戸の豪商佐藤新助が幕府の許可を得て、1626（寛永3）年に鋳造したのが始まりである。その10年後（寛永13年）、幕府は江戸橋場と近江坂本に錢座を設けて本



第17図 火葬墓実測図および出土銭貨拓影

格的に鋳造事業を開始し、民間の鋳銭請負をも許可するなどして、幕末（万延元・1860年）にいたるまで鋳造を続けた。この寛永銭は江戸時代の代表的な銭貨であり、長期にわたり、全国各地で鋳造されたことから、かなりの種類に分けられている。⁽⁶⁾

火葬墓より出土の寛永通宝には、背丈に「元」とあるものが1枚ある（8）。これは寛保元年（1741）に大阪高津で鋳造された「細字背元」である。ほかの8枚は二次焼成を受けており、文字がはっきりとしないものの、1をのぞいてはすべて新寛永銭であろうか。

出土した枚数は9枚と半端である。しかし火葬骨？もみられたことから、一般に麻の小袋にいれて遺体の首に下げられたという、六道銭と考えている。

番号	銭文(表) (裏)	寸 法	量目	備 考	番号	銭文(表) (裏)	寸 法	量目	備 考
1	寛 寶 通 永	直径2.43 穿径0.60 厚み0.15	2.4	銭文太い 完 形	6	寛 □ 通 □	直径2.46 穿径0.60 厚み0.10	2.4	完 形
2	寛 寶 通 永 ?	直径2.35 穿径0.61 厚み0.14	1.7	銭文細い	7	寛 寶 通 永	直径2.39 穿径0.56 厚み0.12	1.7	
3	寛 寶 通 永 ?	直径2.30 穿径0.59 厚み0.15	1.7	完 形	8	□ 元 寶 □ 永	直径2.20 穿径0.56 厚み0.11	1.3	細字背元
4	□ □ 通 永	直径2.53 穿径0.53 厚み0.14	1.9	完 形	9	□ □ □ ? □	直径2.60 穿径 - 厚み -	3.6	鉄 銭
5	□ □ □ ? □	直径2.33 穿径0.64 厚み0.11	1.1		* 銭径・穿径とも縦径の実測値、銭厚は縁（外輪部）の 実測値				

* 単位は、寸法がcm、量目がg

第2表 火葬墓出土銭貨計測表

溝（第21図、図版5）

溝はその位置をほんのわずかに移動しつつも、規模・方向いずれも踏襲して検出された。およそ幅50～60・深さ30～40cmを測り、N65°Wで西に向かって流れしていく。初めに掘られた溝の傾斜は約4度である。また最終の溝はまだ完全に埋まりきっておらず、非常に新しい時期のものと考えられ、かつ現況の畑の段差変換点に沿っている。このことから溝3条は、いずれも畑の山側をめぐる排水路の埋没にともなって堀り替えられたものである。

溝より出土した遺物はごくわずかであり、雲上山11号墳にともなう須恵器甕片や近世以降の瓦片などが主である。

碗（53） 広東碗風の丈のある高台で、濃淡のある染付を施す。図柄不明。

遺構にともなわない遺物（第18～20図、図版10、11）

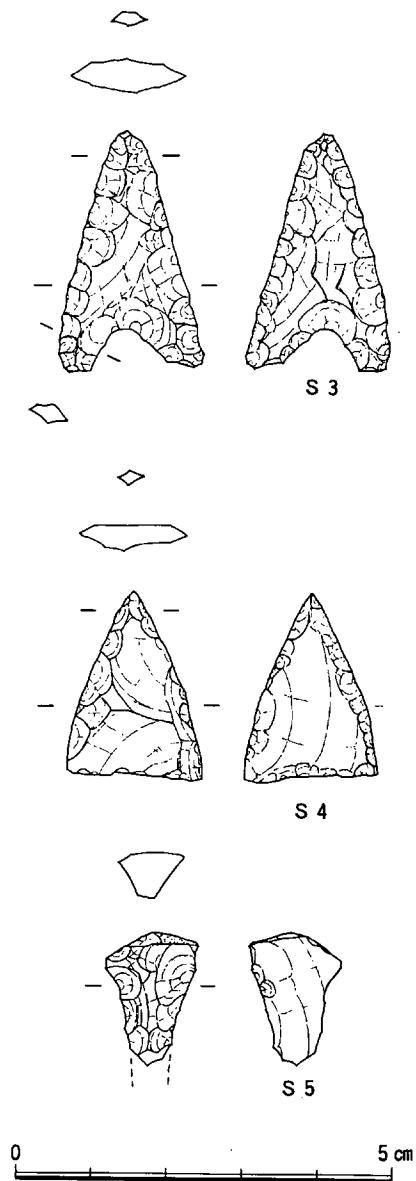
折敷山遺跡での調査中・あるいは試掘調査の各トレンチや、雲上山11号墳の調査中に出土した資料である。出土した遺物の中には、各遺跡にともなうであろう弥生土器・須恵器・埴輪のほかに、陶磁器・瓦・土師質土器がある。

石器 (S 3～5^⑦) 3・4は石鎌である。4は、長さ24.5・幅18.0・厚さ3.5mm、重さ1.1gを測る。基部はごくわずかに凹むものの、基本的には直線的で、平基式に分類される。中央断面形は平凸形で、尖端は鋭く作りだされている。調整は原面を残さず、片面調整であり、基部の作りだしは薄形両面細部調整によるものである。材質はサヌカイト。3は、長さ31.0・幅19.0・厚さ4.0mm、重さ1.5gを測る。基部の形態から凹基無茎式に分類されるが、極凹形を呈し、いわゆる有脚石鎌である。中央断面形は両凸形で、尖端の作りだしはやや鋭さに欠ける。調整は原面を残さず、両面調整で、基部の作りだしは薄形両面細部調整によるものである。材質はサヌカイトで、やや風化して白色を呈す。

5は錐と考えられる。尖端部を欠損し、現存長17.0・幅12.0・厚さ5.5mm、重さ(1.2)gを測る。中央断面形は平凸形である。調整は片面調整で、頂部に原面をわずか残している。両縁には厚形表面細部調整が施される。材質はチャート。試掘第12トレンチ出土。

弥生土器 (47) 折敷山遺跡の範囲とした以外からは、試掘トレンチという制約があるもののまったく弥生土器は出土していない。後世の開墾によって遺構が消滅したとしても、段々畑の造成土内にはわずかでも土器が残るはずである。けれども、丘陵斜面に対して頂部から谷部に長い試掘トレンチを掘ったが、中・近世以降の遺物がわずかに出土しただけである。

47は、無頸壺の口縁部片で、6条の凹線を連続して施している。口縁端には穿孔が1つなされているものの、小破片のためにその間隔は不明。折敷山遺跡内の表採。

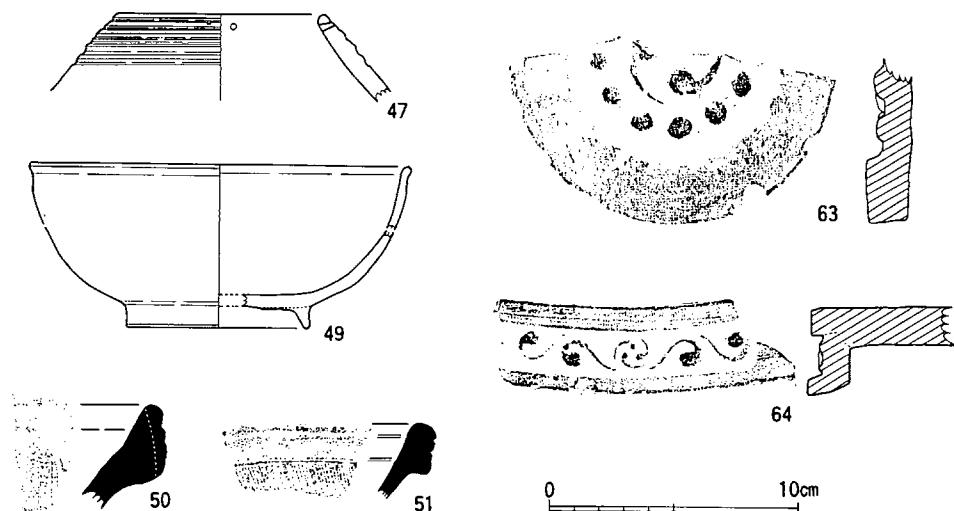


第18図 遺構にともなわない遺物 1

土師質土器 (49) 雲上山11号墳の周溝埋土より出土したものである。出土状況は古墳に供獻された須恵器群に混じって出土したもの、まったく時期を異にする遺物であることから、周溝内に何らかの遺構が切りあっていたものと考えられる。しかし、周溝底から遺構は検出されなかった。49は塊で、体部以下と口縁部が接合しないものの、復元口径15.2・高台径7.2・復元器高6.5cmを測る。口縁端は外側にわずかまるめており、高台の接合は底に段をもたせている。

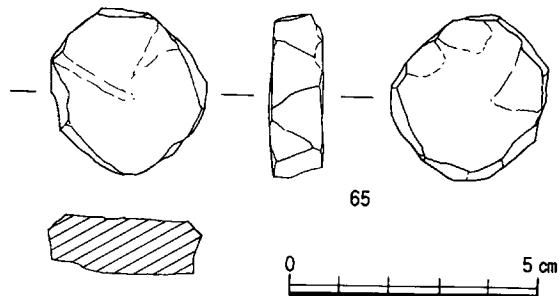
陶器 (図版10) 摺鉢・碗・皿・鉢・甕などの器形があるが、いずれも小破片にすぎない。摺鉢は、50が単帶のスリ目、51が連続のスリ目で、どちらも備前焼か。江戸期および明治。52は瀬戸美濃の陶器皿か碗で、内底に吳須の染付が施されている。

瓦 (図版10) 巴文の軒丸・軒平瓦である。63は、瓦当径13.3cmを測り、中央に三つ巴、その周辺に珠文帯を配す。巴は、頭が大きく尾が非常に短いものである。珠文は、巴の頭に近い大きさで、その数12個と少ない。巴の型や珠文の数と大きさ、さらに周縁幅が瓦当半径の37%と広いことから、江戸時代後半の瓦と考えられる。64は、瓦当厚3.5cmと薄く、文様面の大きさが縦1.65・幅10cmと非常に小さい。そこに小さな三つ巴文を中心として、両側に方向の違えた巴を各2個配している。周縁の両側縁部は残されていないものの、極端に広いものと推定され、瓦当面に占める文様面の面積は極めて小さなものとなる。これは、軒丸・軒平瓦の重なる部分に文様を配さないという、より本瓦葺に則した合理化であろう。ただし、周縁部が欠損しているため、棟瓦の軒平となる可能性もある。



52~62の遺物は図版および観察表
第19図 遺構にともなわない遺物 2

小型円板（65） 黒灰色にいぶした平瓦を素材とし、およそ直径3cmほどの円形になるよう打ち欠いて加工するもの（B類）である。⁽⁸⁾ 厚み1.1cm、重さ10.8gを測る。雲上山11号墳調査中の表採資料。小型円板の用途については、これまで真銭、玩具・遊戯具、紡錘車などとの諸説があったが、その多くは「燈芯押さえ」⁽⁹⁾として利用されたものであろう。



第20図 遺構にともなわない遺物3

磁器（図版11） 磁器のはほとんどは近代のものと考えられるが、わずかながら江戸期のものもある。

54は染付碗で、高台に1条の圈線を施し、2本の花の咲く樹木を描いている。55は色絵の碗で、口縁の内外面と高台際に各1条、外面の腰に2条の圈線を施し、2体1組の人物像を3ヶ所に描いている。人物画は、欠損部分があるために全体像のわからないものがある。けれども、僧形1、官人2、女房1が判明する。のこる2体は男性像とみられ、男性5体、女性1体の計6人物像である。女房装束や直衣装束などから、平安時代あたりの人物と推定され、在原業平・僧正遍昭・喜撰法師・大伴黒主・文屋康秀・小野小町の、いわゆる六歌仙を図案化したものであろう。56は、見込みに1条の圈線と「寿」のくずし字、外面に牡丹？を染付する。

57は、口ベニを施し、緑の発色釉による菱形尽くし桜花紋の小皿である。明治印判。58は輪花の中皿で、蛇の目高台である。内面は銅板による印判染付で、2重圈線の松竹梅を中心に3方の格狭間を配し、余白は草花地紋で埋める。格狭間内には藤をプリント。59も輪花の中皿で、外面に唐草紋、内面に七宝繋ぎと菱形繋ぎを交互に配した図柄である。

番号	図版	器形	出土地	法量（口径・高台径・器高）	残部	備考
50	10	擂鉢	古墳表土	—・—・—	小片	陶器
51	"	"	"	—・—・—	"	"
52	11	?	トレンチ	—・—・—	"	"
53	"	碗	境界溝	—・2.9・—	小片	磁器
54	"	造成立	造成立	9.7・3.2・4.7	4/5	"
55	"	"	"	9.2・2.7・4.5	3/4	色絵
56	"	"	古墳表土	—・—・—	小片	磁器
57	"	皿	造成立	10.7・6.3・2.1	完形	"
58	"	"	"	6.3・8.0・2.8	3/4	"
59	"	"	"	6.9・—・—	小片	"
60	"	水滴	"	—・6.2・3.2	1/2	"
61	"	?	"	—・—・—	小片	"
62	"	筆筒	"	5.6・5.6・10.7	1/3	"

第3表 折敷山遺跡出土陶磁器観察表

* 法量単位cm

60は水滴、61は蛸唐草の瓶か油壺片。62は、四方を亀甲透かしで埋め、上面を大きく開けた長方柱の器形である。器高の高いことや口を大きく四角に開けていることから壇台とは考えられず、おそらく筆筒か箸立か。

(3) 小 結

折敷山遺跡は検出したかぎりでは、非常に小さな集落であり、その構成人員もわずか1家族程度の人数にすぎなかったものと考えられる。検出した遺構は竪穴住居跡1、段状遺構3、土坑、炉跡などと非常に少ない。住居跡は、中央に炉をもつ四本柱の方形住居で、住居面積約19.4m²と一般的にみられる規模である。段状遺構は、北斜面のもの（段状遺構2）が建物跡と推定されるほかは、広場的なもの（段状遺構1）、住居に向かう通路的なもの（段状遺構3）との性格づけができる。このほかに、ゴミ穴と考えられる土坑も検出されている。

これら遺構の分布する範囲はせまく、開発範囲外に拡がることを考慮しても、遺跡範囲はあまり広いものではないだろう。地形的にも丘陵上の平坦面が横幅であまり広くなく、稜線ののびる方向においても上っては傾斜がかなりきつくなり、下っては平坦面がつづくものの遺構・遺物がまったく検出されていないことから、折敷山遺跡の推定範囲は800m²程度になろうか。かなり小規模な集落跡である。

出土した遺物も、非常に少ない。弥生土器以外には、炉から鉄滓が出土し、須恵器が伴うようである。古墳時代の鍛冶炉と報告したが、これ以外に同時代の遺構がまったくなく、須恵器の出土状況も流れ込みともみられることから、弥生時代の炉となる可能性も充分にあろう。

弥生土器はいずれも細片であり、しかも摩滅して調整等の不明なものが多い。器形としては壺・甕・高壺・器台・鉢があり。甕と高壺の出土点数が多い。

壺には広口壺と無頸壺の器種がある。広口壺の口縁部は上方あるいは下方にまで拡張され、端面にはいずれも数条の凹線が施される。体部の調整は外面をハケやヘラミガキ、内面をハケとし、ヘラケズリは認められない。胴部中ほどにハケ状工具による刺突文を施す破片がある。無頸壺は口縁に6条の凹線をもち、一つ以上の小穿孔があけられている。

甕には、「く」の字状口縁や頸部をやや立ち上げているものがあり、いずれも口縁端部を拡張するものとしないものとに大別され、さらにその拡張の違いから細別も可能である。拡張はわずか内面上方にまるめているものから、大きく上下につまみだすものまであり、端面に凹線を多用しているものが多い。頸部にキザミを施した貼り付け突堤をもつタイプがある。なお甕の破片で、胴部上半の内面をヘラケズリしているものはない。

高壺は脚部片がほとんどで、壺部片はわずかである。脚端部の形態からは、端部を拡張するものとしないものとに大別され、さらに端面に凹線を施すものと施さないものとに細別される。

端部を拡張するタイプの坏部は直立する口縁部をもち、端部を拡張しないものは塊状の坏部になるものと考えられる。坏部と脚部の接合は円盤充填によるもののみである。

これらの遺構・遺物からみて、折敷山遺跡は、ほんの1時期だけに集落が営まれていたものにすぎない。その時期は、弥生時代中期末、瀬戸内第IV様式と考えられる。従来の編年観では前山II式にはほぼ該当しようか。

註1 村上幸雄・武田恭彰・前角和夫「岡山県総社市千引遺跡群」(『日本考古学年報』42, 1991)

武田恭彰「鬼ノ城ゴルフクラブ造成に伴う発掘調査概報」(『総社市埋蔵文化財調査年報』1, 1991)

2 山手村教育委員会『山手村新屋敷地区は場整備に伴う天溝遺跡発掘調査終了報告』1990

3 宮本長二郎「住居」(『岩波講座日本考古学』4, 1986)

4 円形のみの竪穴住居群、円形と方形の竪穴住居群など遺跡によりその構成が異なっている。

総社市教育委員会『水島機械金属工業団地協同組合西団地内遺跡群』(『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』9, 1991)

津山市教育委員会『西吉田遺跡』(『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第17集, 1985)

5 壺Hとその系譜をひく器種の場合、口頸部の破片だけでは壺との区別が困難である。

平井泰男「弥生時代中期の土器」(『岡山県埋蔵文化財調査報告』51, 1982)。しかし壺Hを壺として認識すべきかどうかについては検討する必要があろう。

6 矢部倉吉監修『古錢の集め方と鑑賞』

7 石器の分類、用語等については下記の文献による。

山中一郎「石器遺物」(『長原遺跡発掘調査報告』II, 1982)

松本武彦「弥生時代の石製武器の発達と地域性——とくに打製石鎌について——」

(『考古学研究』第35巻9号, 1989)

8 兼康保明「冥錢」(『日本佛教民俗基礎資料集成』第4巻 元興寺極楽坊IV, 1977)

9 兼康保明「中・近世の小型円板とその用途」(『考古学叢考』中巻, 1988)

朝倉氏遺跡調査研究所『一乗谷』1981

4. 雲上山11号墳の調査

(1) 古墳の位置と環境

雲上山11号墳は、総社市赤浜字折敷山下に所在する。

雲上山古墳群は、三須丘陵の東端近くに位置し、標高79.3mを測る雲上山の山系に立地するものを総称している。しかし、細かくは山頂・北斜面・東斜面・西斜面などの小支群に分けるであろうし、大きくは三須古墳群の一支群と考えることもできる。これまでに知られている雲上山古墳群の総数は、42基である⁽¹⁾。このうち、横穴式石室を内部主体とするものが10基程度、それ以外が箱式石棺または木棺直葬墳と推定されている。横穴式石室墳については、今後そう増えるものではないが、前期小古墳については、低墳丘であることなどから今後かなりの数になるものと考えられる。折敷山遺跡の立地する小尾根上で実施した試掘調査でも、トレンチより遺構の検出はなかったが須恵器片が出土しており、開墾によって消滅した前期小古墳もあったものと思われる。

雲上山11号墳のすぐ東側、約35m離れた同一丘陵上には、県下最大級の方墳とされる折敷山古墳があり、同じく南側、谷を隔て約125m離れた別丘陵上には、全長約142mを測る小造山古墳（前方後円墳）が位置している。しかも、岡山県下で第1位、全国でも第4位の規模を誇る造山古墳（前方後円墳・全長360m）がすぐ間近にみられる（図版2）。そして三須丘陵全体では数百基にもおよぶ古墳が築造されており、この丘陵が古代吉備の中枢地域における重要な墓域として考えられていたものであろう。

雲上山古墳群内での発掘調査は、今回が最初である。周辺では、南東約800mに位置する法蓮古墳群内において昭和60・62年に発掘調査が実施されている⁽²⁾。調査墳は5基であり、径10mほどの円墳と一辺7mほどの方墳が尾根上と尾根斜面とに意識的に選地され、築かれている。いずれも前期小古墳である。内部主体は、木棺直葬および箱式石棺である。

このほか開発予定地内には、横穴式石室墳が2基所在している。雲上山37号墳（通称梅ノ子谷大塚）と雲上山38号墳である⁽³⁾。雲上山37号墳は北側の用地境に位置し、石室全長11.5・玄室長4.5・玄室幅2.2・玄室高2.1mを測り、墳形は円墳で、直径約17mと記されている。雲上山38号墳は、開発範囲の北側で短く突出する尾根上にあり、計画では丘陵掘削の法面にあたる。現状は石室石材がわずかにのぞいているのみであり、墳丘や周溝などはかなり流失しているか、埋没しているかであろう。しかし、石室の規模からすれば、もともと明瞭な墳丘や周溝をもっ

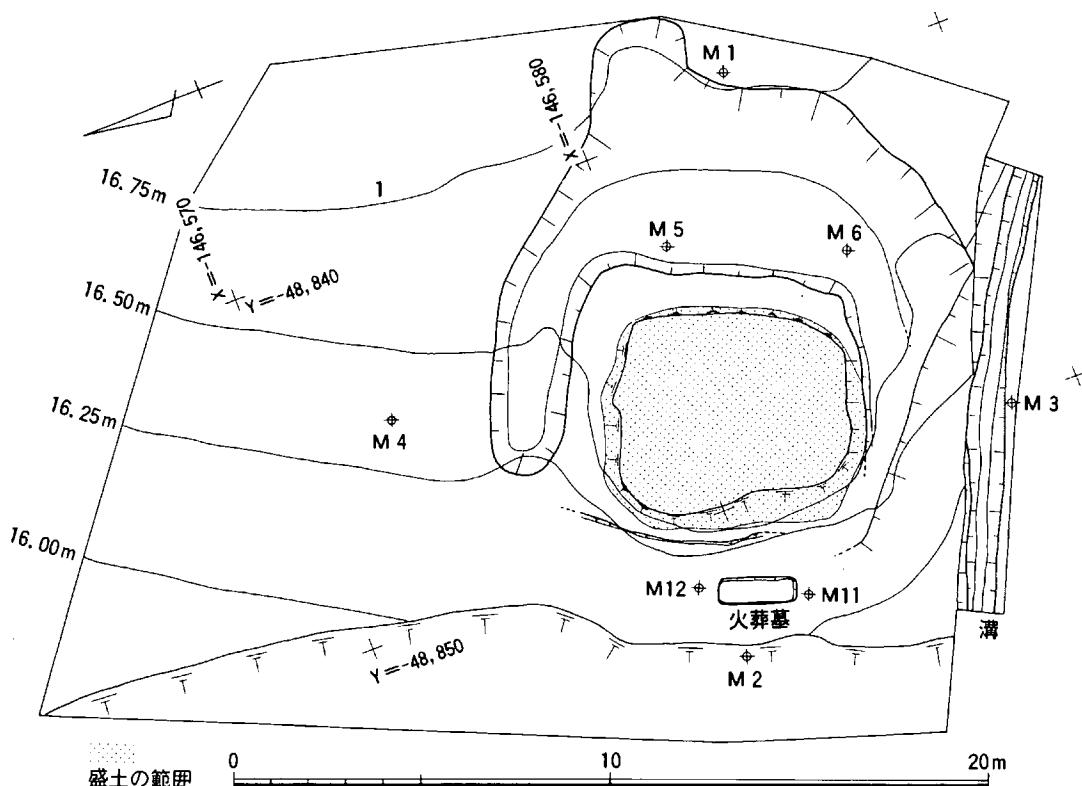
た古墳とは考えにくい。およそ石室長4・幅1mほどの小横穴式石室墳である。

(2) 遺構と遺物

本墳は、緩やかにのびる丘陵斜面を柵田状に開墾した、その一平坦面にある。現状は、明らかに土盛りを行った古墳状を呈している。しかし、畑の開墾面にかなりの高さで広い範囲に残されているという不自然さと、70年ほど前にすぐそばの溜池を掘ってでた土砂を積んだものと地元で言い伝えられていることなどから、古墳と確定するには疑わしいものであった。

第1次の遺跡確認調査（平成元年度）においては、本墳の立地するすぐ南西、一段下位の平坦面から円筒埴輪片（11）が出土しており、雲上山11号墳の遺物と考えられている。ただし、本墳のすぐ東側には折敷山古墳が位置しており、その遺物となる可能性も充分に考えられよう。

そこで調査は、まず古墳であるかどうかを確定するために、土層堆積の状況観察、あるいは遺構・遺物の検出等を行った。調査の所見は以下にまとめるが、雲上山11号墳を古墳と確信させる根拠には乏しい結果におわったが、周溝状の凹みや墳丘盛土と考えてよさそうな土層が存在していることなどから、古墳と推定した。



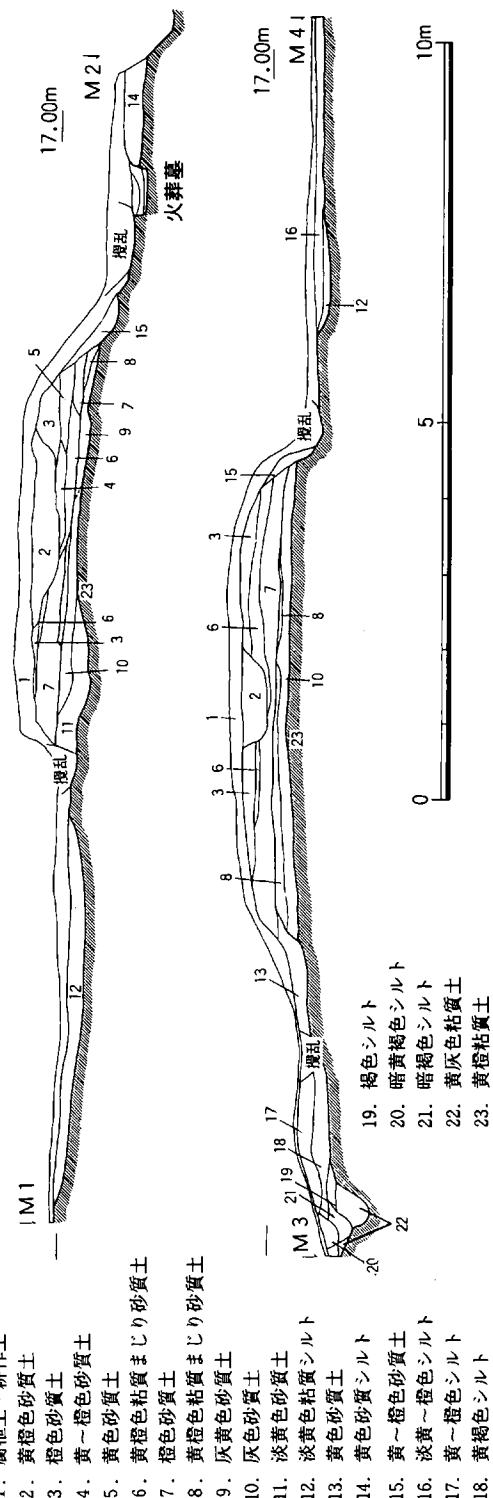
第21図 雲上山11号墳 墳丘測量図

墳丘

トレンチは、小尾根ののびる方向を基準として十字に設定した。各トレンチでの土層の状況は、第22図に土層断面図として示すとおりである。

明らかに古墳の盛土と考えられる土層は、第8～11層である。そして周溝埋土と考えられる土層は、第12～14層である。これら以外の土層は、腐植土あるいは耕作土や、墳丘崩落土である流出土、それに何らかの理由で土砂を盛り上げた土層（第2～7層、再盛土層）とに分けられる。この再盛土層が問題である。調査当初より、現状で高さ約1mにもおよぶ前期小古墳が丘陵斜面の畠地の中に残されているものなのであろうか。また調査中においても、墳丘盛土と考えるにはあまりに軟らかく盛られた状況の土層ばかりで、しかも主体部が検出できなかったことから、古墳と確定するにはかなり障害となつた。第2層の土層が土坑状に窪んでいたこともなおさらである。細かい検討は次項に譲るが、周囲の再盛土層とほとんど差異がなく、調査前の状況でも頂部に大きな切り株が残っており、かっての樹木痕跡とも考えられる。これらのことから、土層状の窪みも含めた再盛土層を擬墳丘とし、それ以下の土層を墳丘と考えておきたい。

墳丘は、後世の開墾により大きく周囲を削り込まれており、現畠の山側にめぐらされている水路と同じと推定される痕跡が北・南・西側の3方で確認された。攪乱とした土層がそれである。また古墳の南側を大きく掘削して取り付けられている山道（第17～19層、造成土）もある。



第22図 土層断面図

これらの状況から、墳丘規模を推し量るのには芳しくない保存状態といえるが、古墳の北～東側に残る周溝の検出。あるいは周溝埋土と推定される第12層の存在より、南北方向で8.64mを計測することができる。東西方向では、東側周溝の墳端から西7mの位置に墳丘崩落土（第15層）が認められるものの、あまりに軟弱な土層であるため周溝埋土とするよりも、2度にわたる畠地の開墾（拡張）によって墳丘を削り込んだものと考えられる。⁽⁴⁾ そして南北方向で計測された8.64mの位置には、折敷山遺跡の中で報告した火葬墓（第17図）が、江戸時代になって掘り込まれており、この方向での墳丘規模は計測できない。

北と東側とにめぐる周溝の状況からは、本墳を方墳と考えて間違いないであろう。東西方向の規模は不明であるが、南北方向の状況より一辺が8.64mを測る方墳とみられる。墳丘の高さは東側周溝底より測ってわずかに0.5mであり、そのうちの半分が盛土によるものである。

周溝

墳丘の東側と北側で検出された。南側については山道により削り取られたものと推定され、西側についてはその存在すら不明である。けれども第14層が西周溝の埋土となる可能性もあり、現状では「コ」の字に残されている周溝も、かっては方形にめぐっていたものであろうか。

古墳は東から西にのびる丘陵斜面に立地しているため、山側となる東周溝はしっかりと掘り込まれていたものであろう。けれども開墾によってその大半が削り落とされ、現存底幅4.2・深さ0.2mを残すのみである。北

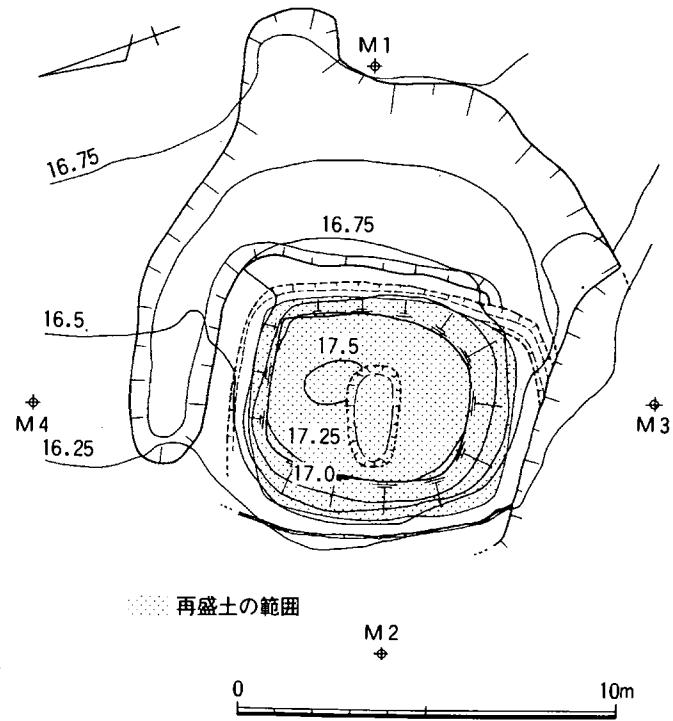
周溝ではさらに削平を受けており、現存底幅1.0・深さ0.1mを残すにすぎない。

主体部

内部主体は、後世の削平により消滅したものと考えられるため検出できなかった。

けれども、調査段階においては、不明瞭ながらも土坑状の窪みを1基検出している。

しかしこの窪みを、木棺あるいは土葬とする墓墳を考えるのには、さきの土層観察からも肯定できず、しっかりと掘り込まれたものでもない。



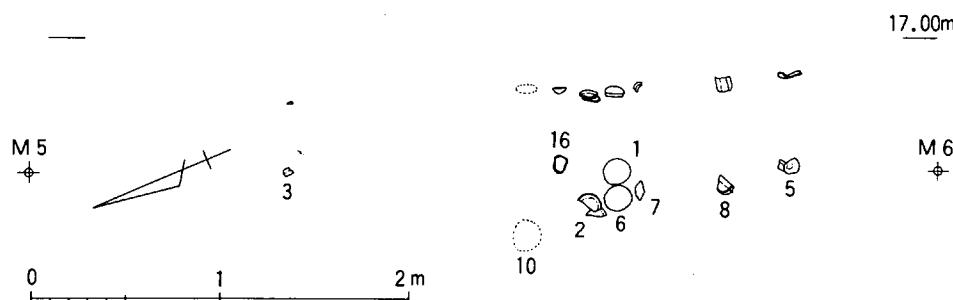
土坑状の窪みは、 2.7×1.4 mで、深さ40cmを測る。平面形は橢円形に、断面形は長軸方向にやや擂鉢状、短軸方向に舟底状で掘り込まれている。埋土は、土層断面の第2層である。円礫を少なからず含み、灰白色粘質土が部分的にブロック状でみられた。埋土と、その掘り込み面の土層（第3層）との差は、土色が若干異なるものの、ともに円礫を含むなど、ほとんど同じものである。さらに第4・5層も同様の状況にある。またブロック状に混入している灰白色粘質土は、確認調査で谷筋にあたる水田部分に設定したトレーンチ内で確認したものと同じと考えられる。

以上のことから、この窪みを古墳の内部主体とするのはかなり困難であると判断した。

なお、土坑状の窪みからは須恵器が1点出土している（13）。甕か壺の胴部片で、外面を平行タタキ、内面をナデとするが、おそらく内面には同心円文タタキがあったものと思われる。同一個体と考えられる破片は、擬墳丘内や山道の造成土内から出土している。

出土遺物

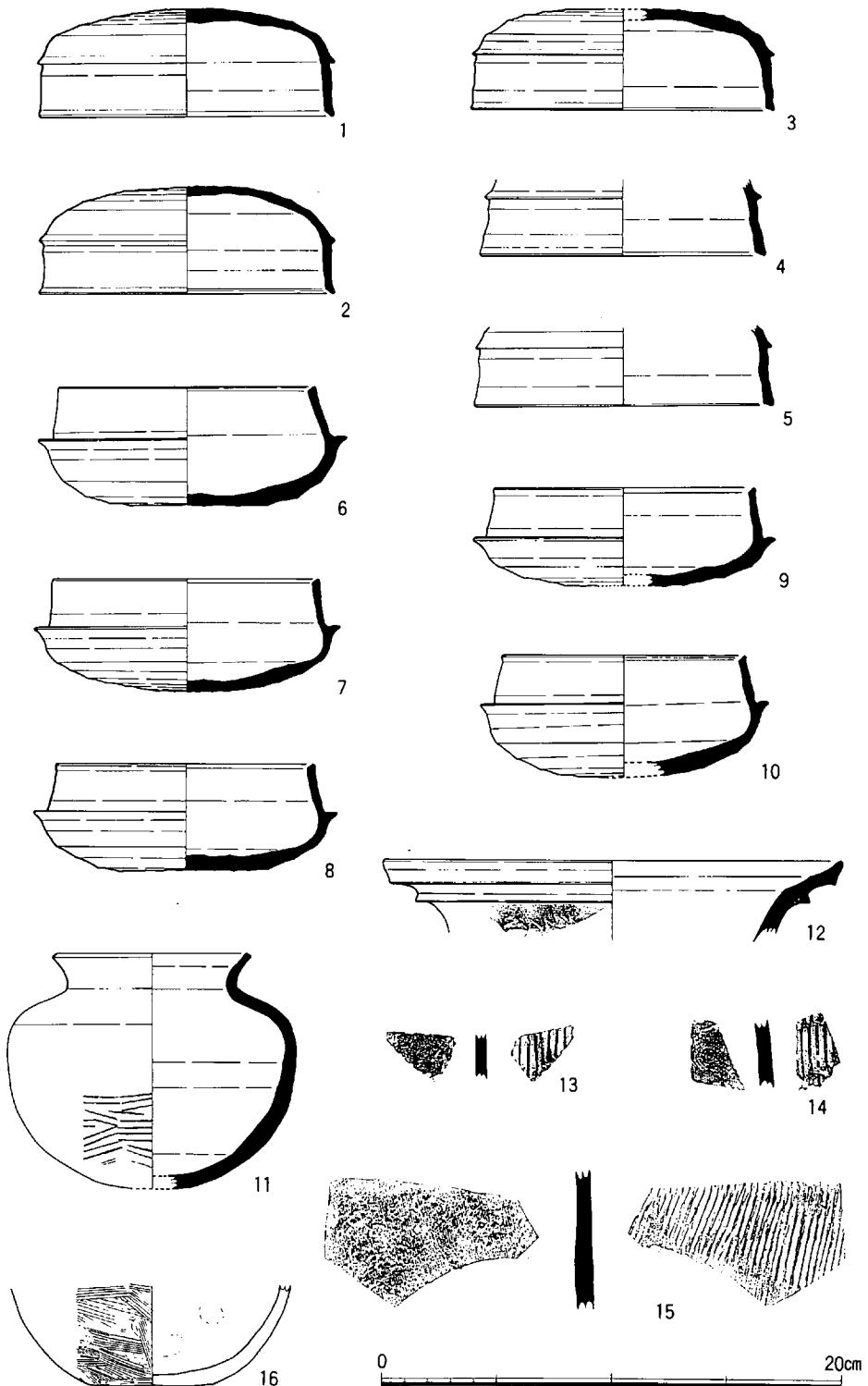
須恵器は、ほとんどが東側周溝内からの出土で、しかも溝底にまとまった状態にあった。また、埴輪は第1層の耕作土や擬墳丘内、あるいは古墳の西～南側を沿って続く山道（墓地へ向かう通路）の造成土内から出土している。



第24図 遺物出土状況図

須恵器・壺蓋（1～5） 図示することのできたのは5点であるが、ほかに数個体程度の破片がある。

1～3は、形態や手法の特徴、法量まで同じで、わずかに稜線の形状が違っているのみである。天井部は比較的平らに形成し、口縁部は直立させ、2.2～2.4cmとかなり高い。ヘラケズリはその間隔も狭く丁寧に行い、その範囲も天井部の2/3以上におよぶ。口径は12.7～13.1・最大径12.8～13.2・器高4.3～4.6cmとかなりの規格性がうかがえる。わずかに稜線の形状が異なるのみで、1がやや下がり気味、2・3がほぼ水平につまみ出している。器壁はやや薄く、口縁端部は内項する傾斜面となるようシャープにつくっている。ロクロの回転方向はいずれも逆時計まわりである。



第25図 雲上山11号墳 出土遺物 1

4・5は、非常に口縁部が高く、その端部や稜線もまたシャープなつくりである。小破片であることから口径の復元や傾きにやや不安が残るもの、稜線部の径より口径の方が大きいタイプとなろうか。このほか、図示できなかった破片の中には丁寧なヘラケズリを残す天井部片等がある。

壺身（6～10） 底部は平で、口縁部の立ち上がりは高く、口縁端部や受け部のつくりも非常にシャープであるものが多い。しかも底部のヘラケズリ調整はかなり丁寧に行われ、その範囲も2/3以上におよぶ。法量もまたほぼ一定している。6～8は、口径11.1～11.4・最大径13.1～13.4・器高4.6～5.3cm内におさまる。

ただし、10は口径10.5・最大径12.5・器高5.3cmとわずかに小ぶりで、底部もややまるみをもっているなど、若干新しい要素が認められる。ほかにも、体部が浅いもの（9）や、立ち上がりがやや内傾し、端部が外上方にのびて傾斜する面からわずかに段状へと指向するもの（6）もある。けれども、出土状態からは一括で埋没した資料として、その型式差は時期差や地域差とかんがえるよりも、個体差と考えてよいものである。

ロクロの回転方向はすべて逆時計まわりに観察された。

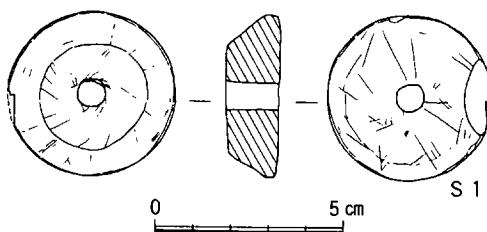
壺（11） 口径8.2・胴径12.6・器高10.3cmを測る小壺で、口縁は短く外反する。胴部下半の外面には平行タタキを施している。

甕（12～15） 12は、復元口径19.8cmを測る中形の甕である。口縁端部、あるいは稜のつくり方にわずかながらシャープさを欠いており、外面にはスパンの短い、かきなぐりの波状文がめぐる。

14・15は擬墳丘盛土内から出土した胴部片で、いずれも外面に平行タタキ、内面に同心円文タタキのちナデ消しを行っている。

土師器・塊（16） 胴部下半以下を残すのみで、深めの塊と考えられるが、小形の壺の可能性もある。外面には横や斜めのハケを施し、内外面に指頭圧痕がかなり残されている。

石製紡錘車（S 1） 東周溝内より出土。わずかに欠損しているものの、直径4.3・厚さ1.4cm、重量37.5gを測る。断面形は側辺に直立した面をもつ台形状で、上・下辺がわずか外側にふくらみ、中央には直径7mmの穴が開けかれている。調整は、全体が丁寧に磨かれ、上面と下面とには交差した線状のキズ、側辺の小さく直立させた面には円周に沿った擦りキズが多く残されている。断面を台形状に置いた状態でみて、その肩部にあたる側辺斜面上には、円周方向に沿ったキズはない。



第26図 出土遺物 2

番号	器形	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	残部	色調	備考
1	坏 蓋	口径 12.7 最大径12.9 器高 4.6	天井部は比較的平らで稜もシャープである	ヘラケズリ、ヨコナデともに丁寧である	3 / 4	淡青灰	逆時計まわり
2		口径 12.7 最大径12.8 器高 4.6			3 / 4	暗青灰	
3		口径 13.1 最大径13.2 器高 4.3			1 / 3	淡青灰	
4		口径 12.3 最大径 — 器高 —			1 / 8	暗灰色	
5		口径 12.9 最大径 — 器高 —			1 / 12		
6	坏 身	口径 11.1 最大径13.4 器高 5.1	底部は比較的平らで、立ち上がりはやや内傾する	ヘラケズリはややあまい	完形	淡青灰	逆時計まわり
7		口径 11.4 最大径13.3 器高 4.9			1 / 2		
8		口径 11.1 最大径13.2 器高 4.6			1 / 2	淡灰褐	
9		口径 11.3 最大径13.1 器高 4.2			1 / 8	灰色	
10		口径 10.5 最大径12.5 器高 5.3	底部はややまるくなり、立ち上がりはやや内傾する	ヘラケズリはあまい	1 / 2		逆時計まわり やや小型
11	短頸壺	口径 8.2 最大径12.6 器高 10.3	外反した短い口縁をもち、わずかに肩が張る	胴部下半は平行タタキを施す	1 / 2	淡黒灰	
12	甕	口径 19.8 器高 3.5 胴径 —	外面平行タタキ、内面同心円文のちナデ		小片	淡黒灰	
13		—			小片	淡青灰	
14		—			小片	灰色	
15		—			小片	暗灰色	

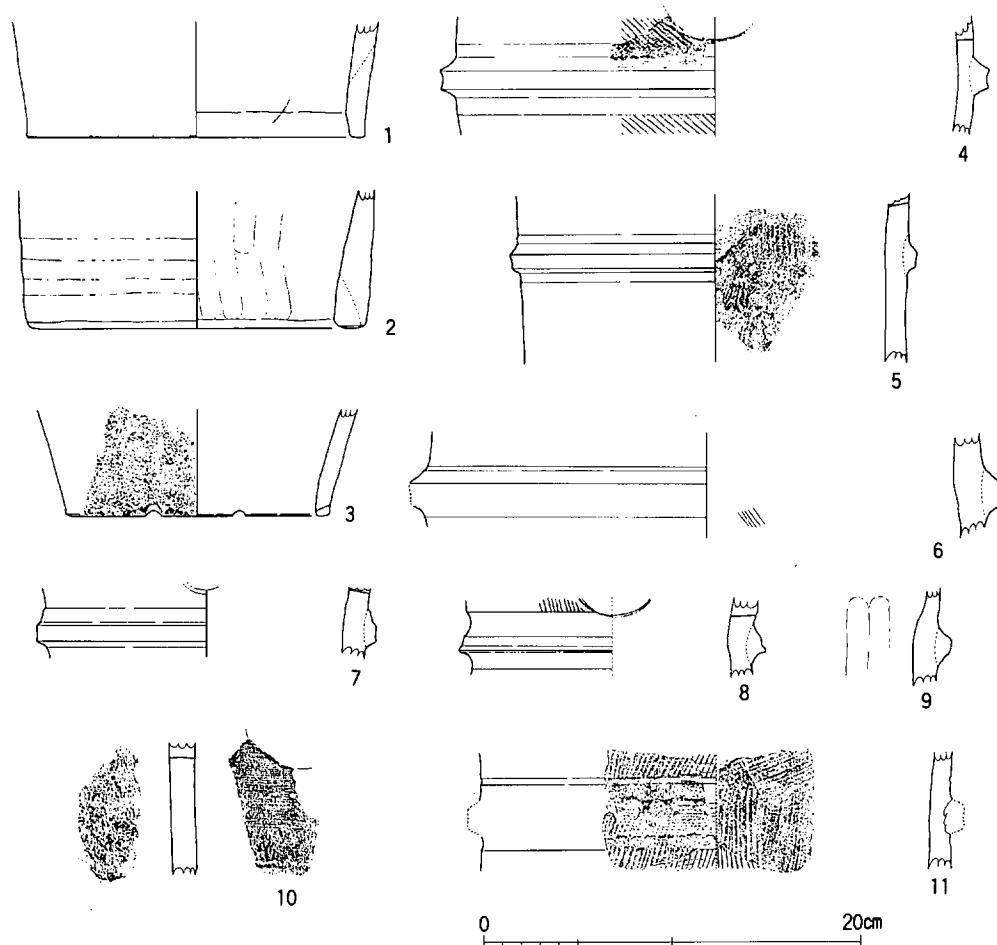
第4表 雲上山11号墳出土須恵器観察表

く、縦に細かく磨いた、暗文状を呈する多面体を形成している。

加工石材の材質は、玄武岩～安山岩質の凝灰岩である。

埴輪 円筒埴輪のみで、全体の形をうかがえるものはまったくない。しかも量的に少なく、図示できるものもほんのわずかである。

基部を残すものは3点あり、いずれも形態がやや異なっている。1は底部がやや外に向くタイプで、内面に押圧を施して粘土板を立ち上げている。粘土のつなぎ目痕跡からは、粘土板を重ねる接合は内傾、粘土板を輪にする接合は真上からみて左回りに行っている。2は底部がかなり厚く、内側に粘土の輪を作り、外傾させて粘土板を接合している。底面には棒状の押圧痕が残されており、成型上の何らかのアタリであろうか。⁽⁵⁾ 3は口縁に向かって開くタイプで、器壁がかなり薄いもの。2同様に底面には成型上のアタリが残る。いずれも内外面の調整はナデによるものとみられ、外面のハケ調整は確認されない。4の内面には明瞭に指ナデの圧痕が残



第27図 雲上山11号墳 出土遺物 3

されている。

タガは、断面形態が台形を呈しているものがほとんどであり、しかも台形の上辺にあたる部分を強くヨコナデ、「M」字状に凹ませるものが多い。しかし、やや台形の崩れたものもみられ(7・8)、やや低いタガもみられる(5)が、概ね下辺が2cm、上辺が0.9cm、高さ0.8cmと高いものである。

タガとタガの間の段の部分には、円形のスカシを穿っている(4・7~10)。スカシの直径は、4が3.1cm、8が4.2cm、10が5.7cmを測る。段全体を残す破片がないため、その数は不明であるが、タガのすぐ上にあけられるものが多い。外面の調整は、4・8がタテハケ、10がヨコハケである。前者はタガ貼り付け前の1次調整。後者はタガ貼り付け後の2次調整でわずかに静止線がのこされており、B種ヨコハケと考えられる。ハケの密度は前者が4~5本/1cm、後者が8本/1cmとなる。ハケ状工具は後者で幅5cm以上のものと推定される。内面の調整は、ナデが多いが、一部にタテハケの残るものもある(5・6)。なお、雲上山11号墳の埴輪とは確定できないが、本墳南側の1段下がった畠地に設定した確認調査トレンチより、11が出土している。タガ貼り付け前に、その位置を決めかつ接合が強固になるよう荒いヨコハケ、さらに右上がりにハケを施したあと、タガを貼り付けている。内面はタテハケと右上がりのハケが明瞭である。ハケの密度は5本/1cmで、その工具幅は4cm程度と推定される。

小片のために確実な黒斑は認められない。しかし、褐色~淡赤褐色を呈する野焼による焼成と考えられるもの(3・8ほか)と、灰褐色や黄褐色を呈する窯窯による焼成と考えられるも

番号	部位	残部	法量 *1 (cm)	調整	外面 内面	(ハケ密度 *2)	タガの 形状	色調	備考
1	基部	1/5	底径17.8	— —				褐色	
2	基部	1/8	底径17.8	— ユビナデ				褐色	
3	基部	1/8	底径13.8	ナデ ナデ				暗褐色	
4	タガ部	1/10	タガ径29.4 タガ1.0・2.0・0.9	ナナメハケ(5) ナデ	M形	灰褐色	硬質		
5	タガ部	1/10	タガ径21.4 タガ(0.8)・1.5・0.5	— タテハケ(4~5)→ナデ	M形	淡赤褐色			
6	タガ部	1/10	タガ径31.6 タガー・2.7・0.9	— タテハケ(6)→ヨコナデ	M形	褐色			
7	タガ部	1/12	タガ径(18.0) タガ0.9・2.0・0.5	— ナデ?	M台形	明黄褐色			
8	タガ部	1/12	タガ径(16.4) タガ0.8・2.2・0.8	タテハケ(5) ナデ	台形	淡赤褐色	スカシ径4.2		
9	タガ部	小片	タガ0.8・2.1・0.7	ナデ? ユビナデ?	台形	明褐色			
10	段部	小片		ヨコハケ(8) ナデ?			淡黄褐色	スカシ径5.7	
11	タガ部	1/12	段径(24.8)	タテハケ(4~5) タテハケ(5)	—	灰褐色	H2年度確認		

第5表 雲上山11号墳出土埴輪観察表

*1 タガは上辺・下辺・高さの順

*2 ハケの密度は1cmでの本数

の（4・7・10・11）とがある。胎土は砂粒を多く含むものがほとんどで、花崗岩の構成岩石が風化したクサリ礫もみられる（7）。

（3）小 結

調査当初は、古墳とするのに消極的にならざるを得なかったが、結果的には検出された遺構・遺物よりみて古墳と考えてよいだろう。

雲上山11号墳は、墳丘端が開墾により大きく削り取られているものの、土層断面の観察や周溝の存在からは、一辺8.64mを測る方墳であることが確認できた。現況では1mもの高まりが残されているが、その多くは後世の盛土によるもので、墳丘の盛土はわずかに40cm程度にすぎなかった。また主体部も検出できなかった。後世の盛土以前にかなりの削平を受けているものと考えられる。

遺物は、須恵器・土師器・石製紡錘車が周溝内から埴輪が後世の盛土内や現山道の造成土内から出土している。

須恵器は、蓋坏が多く出土している。いずれも口縁部が高く、その端部は内傾する面にとどまり、段を指向したものはみられない。また稜線もシャープである。ヘラケズリはかなり丁寧に、しかも広い範囲にわたって行われている。ロクロの回転方向はいずれも逆時計まわりに観察される。これらの状況から、かなり古い段階の須恵器と考えられ、日本的な須恵器が生産されたTK208型式の時期か、それよりわずかに下る程度のものと思われる。TK208型式の蓋坏で普遍的なタイプは、坏身は立ち上がりがわずかに内傾して、受け部が水平か外上方へ直線的にのびるもの、坏蓋は口縁部が外へひらき、しかも比較的高く、端部が坏身のそれと同様となるものである。いずれも天井部や底部の大部分がヘラケズリされ、かなり平坦である。つづくTK23型式の蓋坏は、天井や底部が全体にまるく仕上げられ、しかも小型化している。口縁端部はすべて内傾した面をもち、ヘラケズリの範囲もせばまっている。この陶邑編年に雲上山11号墳出土の須恵器群を併行させると、TK208型式よりやや後出し、TK23型式よりわずかに先行する、この中間に位置するものとみられる^[6]。

埴輪は小破片が少量出土したのみで、その出土状況からも原位置にあるものはない。しかも雲上山11号墳に樹立していた埴輪かどうかも確定できない。須恵器が一群となって周溝底より出土したのに対し、埴輪は周溝底より出土しておらず、いずれも後世の盛土内や耕作土内からの出土である。折敷山古墳がすぐ東側にあるため、そこからの流れ込みとも考えられる。しかし、折敷山古墳周濠の外堤上に埴輪が樹立されていた痕跡は、わずかな調査であるが確認されておらず、折敷山古墳の埴輪が流れ込んだものとも確定できない。出土した埴輪は円筒埴輪のみである。タガ部の直径で30cm前後となる大型のものと、同じく直径18cm前後となる小型のも

のとが認められる。タガの形状は台形で、「M」字状となるものが多い。大型品のタガ突出度は40.1、小型品のタガ突出度は33.6である。調整は、1次調整のタテハケにおわるものと、2次調整のB種ヨコハケを施すものとがある。小片のため黒斑は確認できないが川西編⁽⁷⁾年でⅢ期とされるものと、須恵質まではいかないものの硬質のIV期と考えられるものとがある。時期的にはⅢ期とIV期の併行期間が指摘されていることから出土した埴輪はIV期になり、須恵器の時期と矛盾しないことから、本墳に樹立された埴輪と考えてもおかしくない。

なお、本墳は、法蓮古墳群のように群集した形態をとらず、独立的に立地しているものである。同一尾根上には大方墳である折敷山古墳が隣接していることからも、その陪塚的な性格をうかがえるものと推定される。

- 註1 岡山県教育委員会「岡山県遺跡地図」第3分冊、1975
- 2 総社市教育委員会「法蓮古墳群」(『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』2、1985)
総社市教育委員会「法蓮40号墳」(『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』4、1987)
- 3 緑山古墳群調査団「緑山古墳」1987
『吉備郡史』巻上、1937
- 4 現地調査においては、第15層の堆積面を周溝と推定し、第14層を開墾に伴う造成土（周溝埋土を削平したもの）と断定していた。
- 5 基部全体を残すものがいたため、その数・位置等は不明で、的確な用途を推し量ることができない。埴輪の成型・運搬・乾燥段階などで用いられたものか。
- 立命館大学文学部『立命館大学文学部学芸員課程研究報告』第1・2冊、1987・89
- 6 田辺昭三「須恵器大成」1981
平安学園考古学クラブ『陶邑古窯址群I』1966
- 7 川西宏幸「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』第64巻2号、1978)

5. ま と め

このたびの調査では、折敷山遺跡のほぼ全域と、用地内所在の古墳4基のうちの1基（雲上山11号墳）について発掘調査を実施した。加えて、現状保存とした雲上山38号墳と、活用保存として公園地化した折敷山古墳については、それぞれ基礎データを計測している。

折敷山遺跡は、比高差約24mを測る丘陵の尾根線上に立地した集落跡で、住居跡1軒、段状遺構3、土坑、鍛冶炉ほかの遺構が検出されている。出土した遺物からは弥生時代中期おわりに営まれた、ごく短期間の小集落である。

雲上山11号墳は、内部主体が削平されて消滅したものの、山側に「コ」の字状にめぐる周溝の存在や、墳丘盛土等の土層観察からみて、一辺8.6mを測る方墳と推定される。古墳築造の時期は、周溝底から出土した須恵器蓋坏などよりみて、5世紀中ごろであろう。また同墳出土の埴輪についても、折敷山古墳からの流れ込みとも考えられるが、時期的には須恵器とほぼ同時期のものと考えておかしくない。

折敷山古墳と雲上山38号墳は保存対象とされ、とくに折敷山古墳については墳端を確認するためのトレンチ調査を実施している（付載1で報告）。その結果、古墳の東側と西側には周濠が存在し、墳丘規模は東西方向で一辺44.5m、墳丘の高さは西側周濠底より3.9m、東側周濠底より5.3mとなる大方墳であることが判明した。出土遺物は円筒埴輪片が大部分であるものの、三角板革綴短甲等の形象埴輪も数点みられる。この短甲形埴輪のモデルとなる革綴短甲の時期や川西編年Ⅲ期となる円筒埴輪などからみて、5世紀前半ごろの築造と推定される。

付 載

1 折敷山古墳の調査	47
2 小造山古墳の埴輪について	58
3 周辺古墳出土の埴輪について	66

挿図目次

第28図	折敷山古墳墳丘測量図 (S = 1 / 500)	48
第29図	折敷山古墳土層断面図 (S = 1 / 100)	50
第30図	折敷山古墳出土遺物 1 (S = 1 / 4)	51
第31図	折敷山古墳出土遺物 2 (S = 1 / 4)	52
第32図	折敷山古墳出土遺物 3 (S = 1 / 4)	53
第33図	折敷山古墳出土遺物 4 (S = 1 / 4)	54
第34図	小造山古墳墳丘復元図 (S = 1 / 1000)	59
第35図	小造山古墳出土埴輪 (S = 1 / 4)	61
第36図	法蓮22号墳出土埴輪 (S = 1 / 4)	67
第37図	法蓮23・40号墳出土埴輪 (S = 1 / 4)	68
第38図	作山古墳墳丘測量図 (S = 1 / 4000)	71
第39図	作山古墳採集埴輪 1 (S = 1 / 4)	73
第40図	作山古墳採集埴輪 2 (S = 1 / 4)	74
第41図	作山古墳採集埴輪 3 (S = 1 / 4)	75
第42図	作山古墳採集埴輪 4 (S = 1 / 4)	76
第43図	作山古墳採集埴輪 5 (S = 1 / 4)	77
第44図	作山古墳採集埴輪 6 (S = 1 / 4)	78
第45図	宿寺山古墳採集埴輪 1 (S = 1 / 4)	85
第46図	宿寺山古墳採集埴輪 2 (S = 1 / 4)	86
第47図	宿寺山古墳採集埴輪 3 (S = 1 / 4)	87

表 目 次

第6表	折敷古墳埴輪觀察表	56	第10表	作山古墳埴丘規模表	71
第7表	小造山古墳埴丘規模表	58	第11表	作山古墳採集埴輪觀察表	81~83
第8表	小造山古墳出土埴輪觀察表	63	第12表	宿寺山古墳採集埴輪觀察表	88
第9表	法蓮古墳群出土埴輪觀察表	69・70				

圖 版 目 次

図版16	折敷山古墳全景ほか	106	図版25	作山古墳採集埴輪3	115
図版17	墳丘トレンチの土層断面	107	図版26	作山古墳採集埴輪4	116
図版18	折敷山古墳出土埴輪1	108	図版27	作山古墳採集埴輪5	117
図版19	折敷山古墳出土埴輪2	109	図版28	作山古墳採集埴輪6	118
図版20	折敷山古墳出土埴輪3	110	図版29	作山古墳採集埴輪7	119
図版21	小造山古墳出土埴輪	111	図版30	作山古墳採集埴輪8	120
図版22	小造山古墳、法蓮古墳群出土埴輪	112	図版31	宿寺山古墳採集埴輪1	121
図版23	法蓮古墳群、作山古墳採集埴輪1	113	図版32	宿寺山古墳採集埴輪2	122
図版24	作山古墳採集埴輪2	114	図版33	宿寺山古墳採集埴輪3	123

付載 1. 折敷山古墳の調査

(1) 古墳の位置と環境

折敷山古墳は、総社市赤浜字折敷山南に所在する。

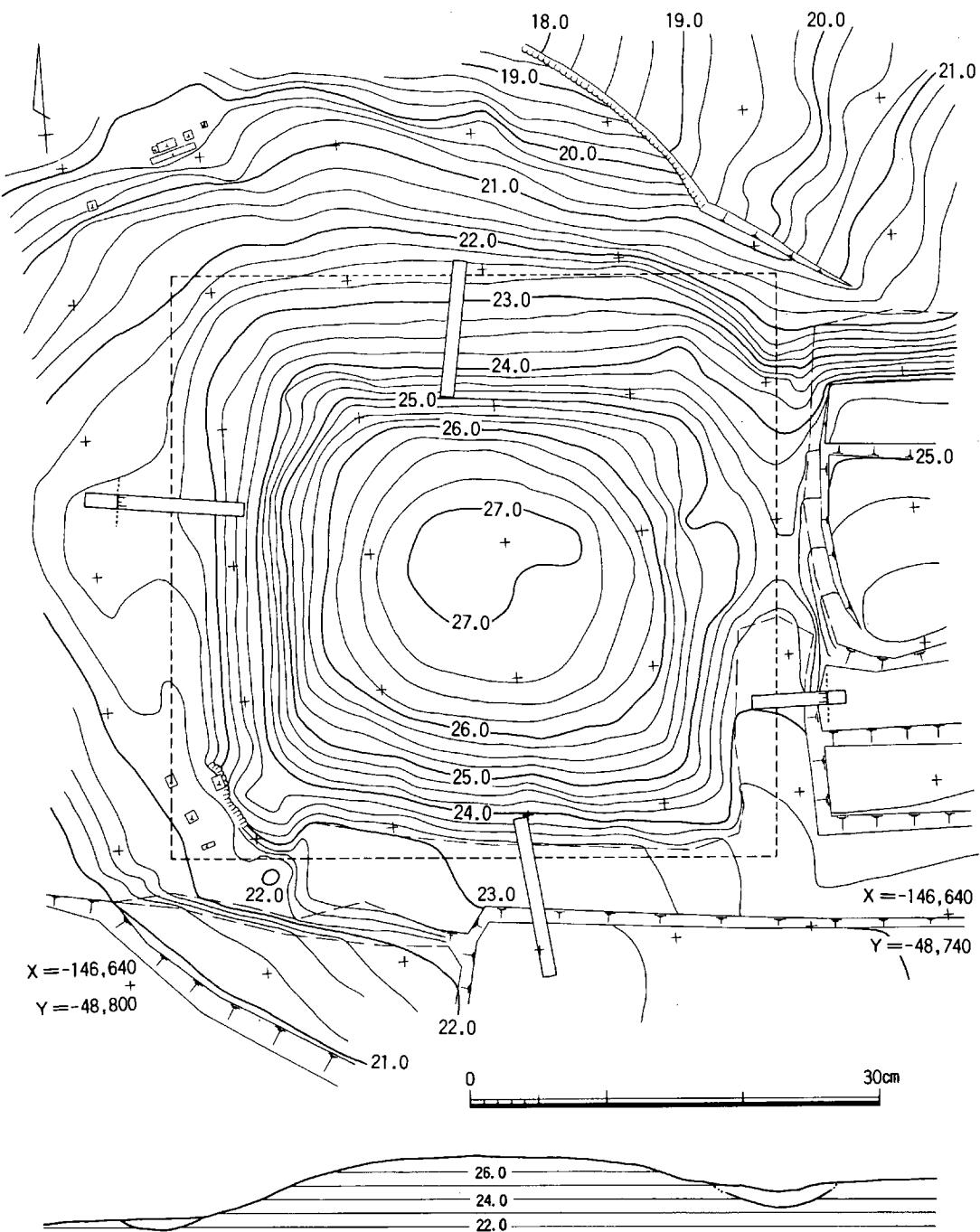
開発予定地の中央部には、東から西に向かってのびる丘陵があり、その突端の頂部に本墳は築かれている。この頂部よりさらに約25m西の緩斜面上には今回発掘調査を実施した雲上山11号墳が位置し、また谷を隔てた南側の丘陵上には岡山県下第8位となる小造山古墳が立地している。

これまで本墳は、一辺約40mの、県下第1位か2位となる規模の方墳と推定されていたが、埴輪・葺石などが検出されていなかったことから断定はさけられていた古墳である。⁽¹⁾しかしながら、吉備南部における大形方墳の分布とその築造時期が、県下最大の前方後円墳である造山古墳との関わりにおいて理解できるものとされ、この視点から折敷山古墳も吉備政権の構造を把握するうえで重要な位置にあるものと予想される。図版2・3にみられるように、本墳は吉備の大首長墳である造山古墳に近接して築かれており、さらに作山古墳、宿寺山古墳へと推移したであろう大首長墳や、それらを支えたであろう有力首長墳も多数付近に築かれている。

本墳の南約0.8kmには造山古墳（全長約360mの前方後円墳）、南西約3kmには作山古墳（全長約286mの前方後円墳）、南南西約2kmには宿寺山古墳（全長約120mの前方後円墳）と吉備の大首長墳が、また南約0.1kmには小造山古墳（全長約142mの前方後円墳）、南西約0.3kmには夫婦塚古墳（全長約45mの帆立貝式古墳）、同約0.6kmには銭瓶塚古墳（全長約50mの帆立貝式古墳）と有力首長墳がそれぞれ位置している。さらには先にふれた吉備南部の大型方墳のうち、県下最大級と推定されている角力取山古墳（一辺36×38m）や赤坂竜塚古墳（一辺約22～23m）も本墳の南西約3.4km前後の距離となる（第3図）。

(2) 遺構と遺物

本墳は、保存対象の古墳として、その保存範囲を確定するためのトレンチ調査を実施したにとどまる。墳頂部にトレンチを設定できなかったため、主体部の状況は不明であるが、これまで埴輪等の遺物がまったく採集されておらず、古墳と確定するには慎重にならざるを得なかつたことを考えると、今回の調査により埴輪や葺石、周濠も存在することが確実となり、古墳の墳形や規模等も明らかとなるなどかなりの成果が得られている。



第28図 折敷山古墳 墳丘測量図

墳丘

本墳は、昭和58年に測量調査を実施しているものの、航空写真による測量であることから改めて地形測量を行った。⁽³⁾



古墳の東側では、丘陵を切断した、現状で幅7m、深さ75cmを測る周壕が明瞭に残されているほか、小さな張り出し状の突出がみとめられる。これは墳丘の崩れたものと考えられる。同じく西側にも張り出し状の突出がみられる。これについては墓地によりかなり改変されているものの周壕状にまわる等高線を確認できることから造り出しあとは考えられない。ただし南西隅の短く突出した張り出し状のものについては、この上の等高線に乱れがないことから崩れ落ちたものとは考えられず、南側の開墾によって削り取られていないのが不自然であるけれども、築造当初よりあった可能性がある。北側と南側については、開墾などにより現状では周壕などを確認することができない。これらのことから南西隅に造り出しが付くかは明確にできないが、方形を呈していることはこれまで通りである。

調査は、東西南北に4本のトレント、それも周壕部分に限って設定したものである。本墳が自然緑地となるため、墳丘上にある樹木の伐採をしないままに調査を行っており、各トレントが正十字には設定できていない。

トレント調査の結果からは、東と西側で明瞭な周壕が確認され、その土層断面図は第29図に示すとおりである。

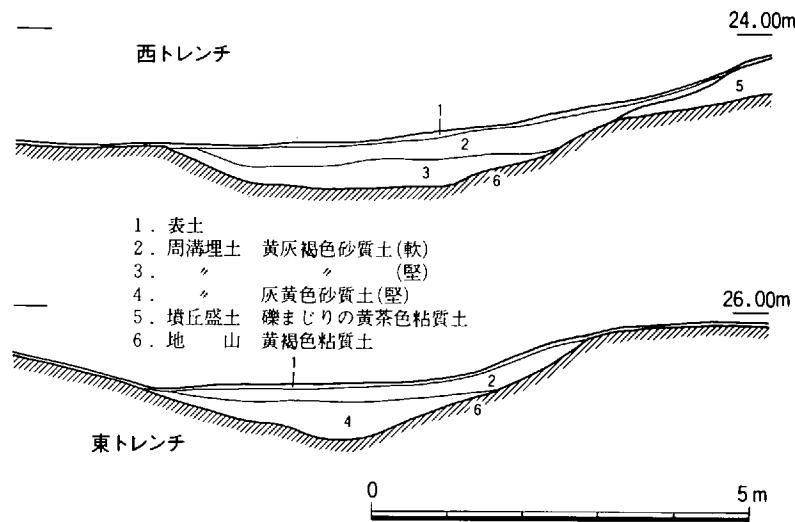
東トレントでは、現状でも丘陵を切断したままの周壕が残されているが、70cmほど埋っており、周壕の深さは外側で1.5mを測る。埋土は2層に分層され、上層が黄灰褐色砂質土で軟らかく、下層が灰黄色砂質土で堅く堆積されていた。遺物は下層の、しかも周壕底よりまとまって出土している。

西トレントは、現状で西に突出した張り出しがあり、造り出しあとも考えられることからトレントを設定した。トレントの南側には等高線が周壕状に入っている、調査の結果でも、外堤側からの深さで約60cmを測る周壕が検出された。埋土は2層で、どちらも黄灰褐色砂質土であるが、上層が軟らかく、下層が堅くしまっている。遺物は東トレント同様に周壕底より多数出土している。また、墳丘盛土は礫を含んだ黄茶色粘質土である。

北トレントでは現状からも、調査の結果からも周壕の痕跡は認められなかった。このため墳端を明確に示すことができない。なお、葺石状の円・角礫の集中したところが認められている。

南トレントも、北トレントと同様、周壕は認められなかった。開墾によって消滅したというより、地形的な条件に起因するものと推定され、もともと周壕が掘られなかつたものか。

これらの状況から墳丘の規模を推定すると、東西トレンチで明瞭に確認された周壕から一辺が44.5m、墳丘の高さが東周壕底より3.9m、西周壕底より5.3mとなる。南北方向では墳端をはっきり押さえることができないので、



第29図 土層断面図

辺の規模は不明である。あえて葺石状の検出位置や東西の墳端の位置より復元するならば約42.6mと推定される。したがって折敷山古墳は、東西辺44.5m、南北辺約42.6mのやや東西に長い方墳で、墳高4.6mを測り、東西に周壕をもつ古墳となる。

主体部

主体部の状況は、トレンチを墳頂部に設定していないので不明であるが、墳頂平坦面に石質石材がみられないことから粘土櫛の可能性が高い。しかし、墳頂部がまったく窪んでおらず、未盗掘とも推定されることから、石材の有無だけで埋葬部の構造を粘土櫛と考えるのは危険であろう。将来の遺跡整備等に伴う調査で確認をする必要がある。

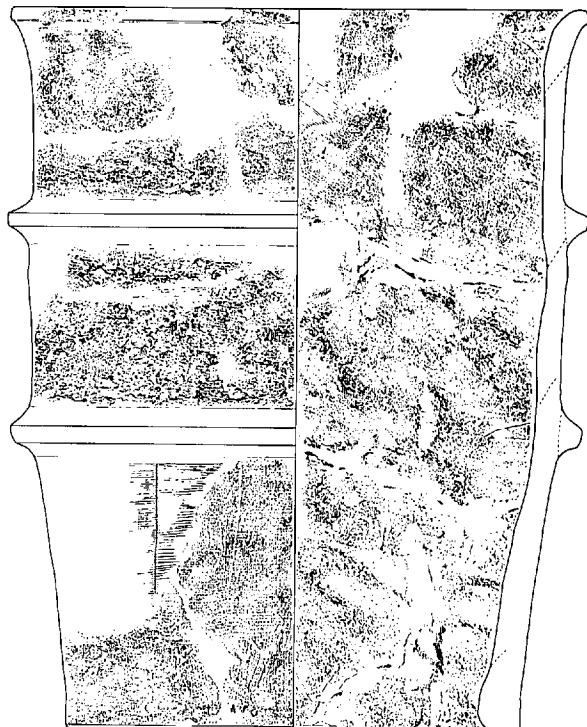
さらに、本墳は一辺40mを超す規模であるものの、墳丘測量図からは段築を確認することができない。墳頂部が何らかの理由で削り落とされて段築がみられないとも考えられているが、墳高4.6mさらに1段築くとすると非常に不均衡な古墳となるであろう。しかも、折敷山古墳と同規模と推定されている角力取山古墳⁽⁴⁾に認められる段築は、墳丘北側に残るわずかなテラスや同南側の小道からおよそ高さ1.5mのあたりに取り付けられているものと推定でき、折敷山古墳にも段築があるとすれば墳丘の低い部分に築かれているものであろうか。しかし、角取力山古墳の墳丘高は約5.8mとなおも高く、墳頂部平坦面の比較でも角取山古墳が約120m²、折敷山古墳が約200m²と倍の規模にもなることから、折敷山古墳の墳頂部が削平されているという可能性も残されている。

出土遺物（第30～32図、図版18～20）

埴輪はおもに西・東トレンチの周壕底より出土している。このほかに須恵器が東トレンチ等より出土するが、混入の可能性が高い。

埴輪（1～22） 円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪が出土している。全体の形をうかがえるのは1の円筒埴輪のみであり、そのほかはいずれも破片にすぎない。

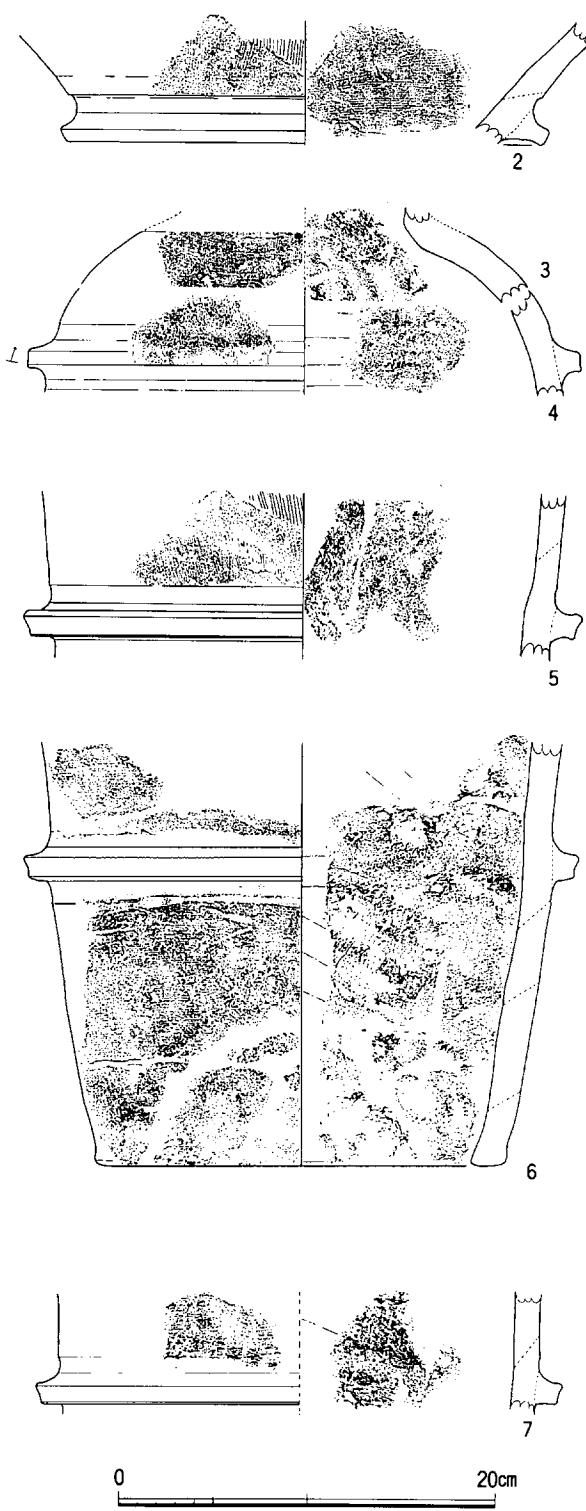
1は口径30.3・底径24.0・器高38.1 cmを測る。口縁部は短く外反し、底部は内側にやや厚い。タガは2条で、断面台形状である。平均して上辺0.8・下辺2.5・高さ1.1cmで、突出度44となる。段は3段で、2段目にスカシを施すものと思われるが、残部1/4のために確認できない。成形は幅4～8 cmほどの粘土帯を真上からみて右回りに接合させて輪とし、それらを内傾させて積んでいる。底面には棒状の圧痕が2カ所認められる。調整は、外面が1次調整のタテハケを基部に多く残し、部分的に2・3段目にも確認できる。2次調整のヨコハケは、1段目に静止線を明瞭に残しており、いわゆるB種ヨコハケである。2・3段目のヨコハケは摩滅によりあまり残されていないが1段目同様であろう。1次調整のタテハケ、2次調整のヨコハケともに1 cmに9本を数えるが、その工具幅は大きく異なり、タテハケが幅3 cm、ヨコ



1



第30図 出土遺物 1



第31図 出土遺物 2

ハケが幅8cmである。2・3段の段幅は8cm程であり、ヨコハケは一回の動作で充分調整できる。内面の調整は下段から中段までがユビナデ、とくに下段で顕著。上段は左上がりのハケで部分的にナデが施されている。このハケ工具は2次調整に用いたものを使用している。

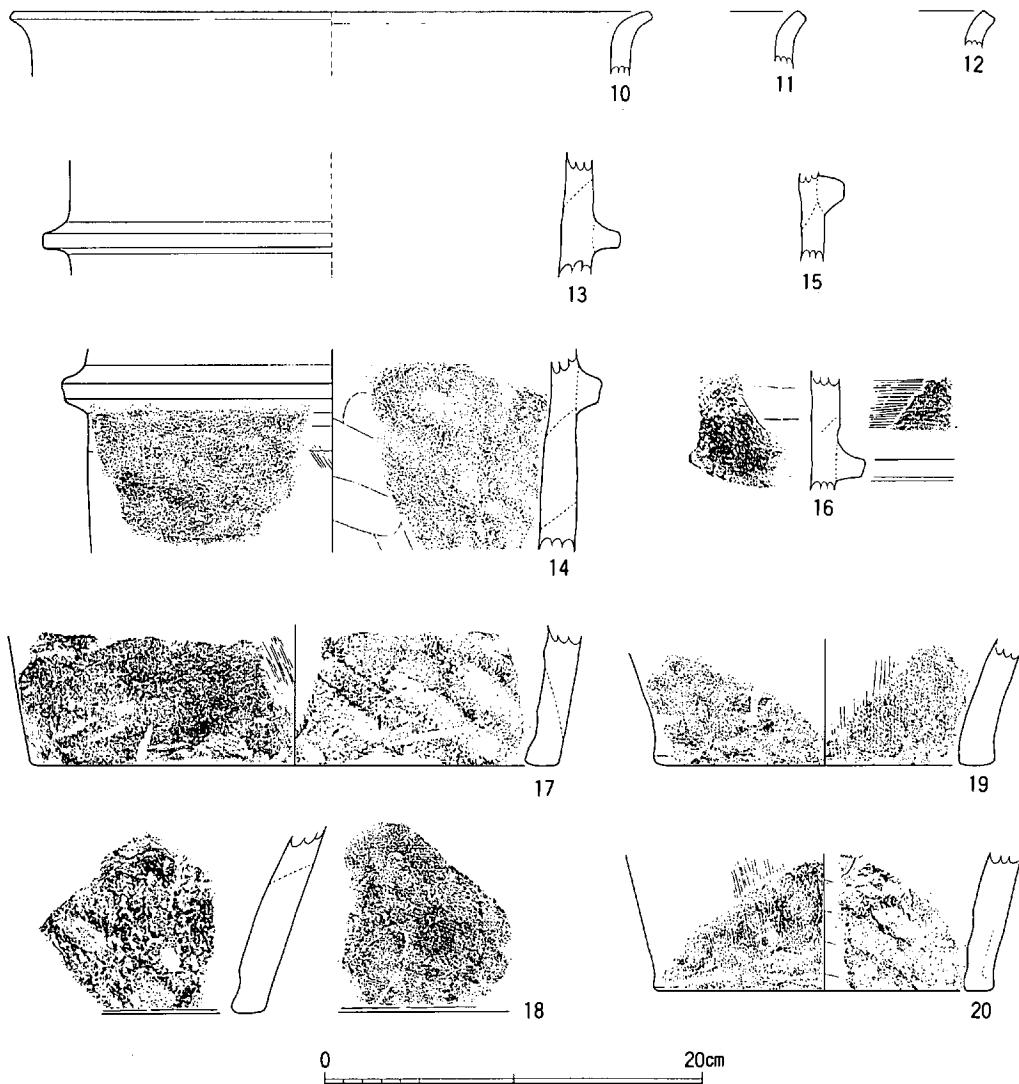
焼成は良好で、花崗岩を構成する岩石の風化した礫を含んだ胎土で、褐色を呈する。なお、基部外面には黒斑が認められる。

2～9は、朝顔形埴輪と考えられる。なかでも2～6はすべて西トレント出土、復元径もほぼ同規模、胎土・焼成などもかなり近いことから、いずれも接合しないものの同一個体と考えられる。全体の段数を確定することはできないが、1の円筒埴輪の上に壺の肩部と大きく外反する口縁部をのせるものと推定して、図上で復元した。器高はおよそ60cmとなるか。タガは台形もしくは方形で、推定5条。その突出度はかなり高く、上辺0.8・下辺1.8・高さ1.2cmを平均とする。スカシは、残部1/4以下の破片のみであることからまったく確認されない。成形は、基部が幅4～5cmの粘土帯を積んでおり、2段目以上も同様と思われる。調整は、外面が第1次調整のタテハケを基部の下段と口縁部に残すほか、基部か

ら3段までをヨコハケ、肩部をヨコナデとする。内面は体部をナデ、とくに下段の指ナデが顕著である。

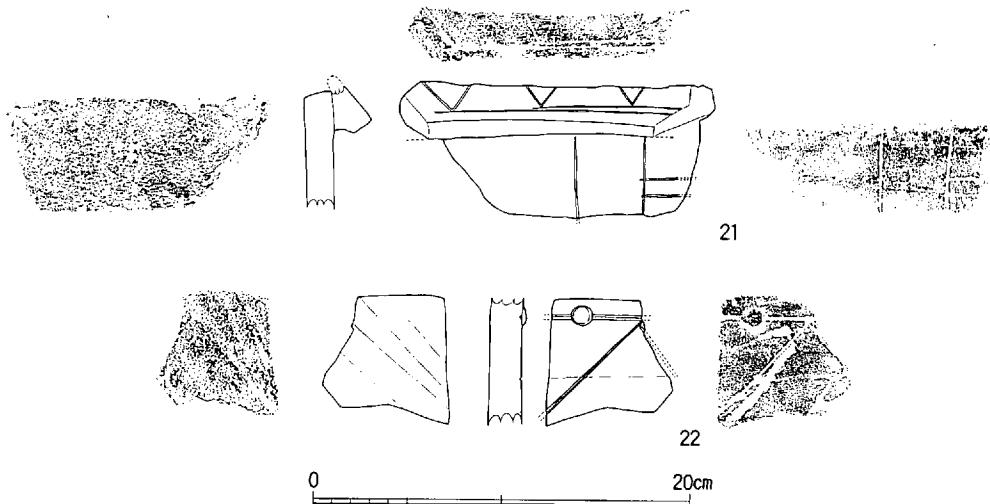
第1タガの上面から口縁部までは、タガを含めて朱が一面に塗られている。8・9も同様であることから朝顔形埴輪片と判断した。基部については最下段に朱塗りをするものがないことから、6以外では、円筒埴輪の基部と区別することが困難である。

10～20は円筒埴輪であるが、朝顔形埴輪の基部が含まれているかもしれない。口縁部はいずれも短く外反しており、その端部は10のように丸くおさめるものとやや面取りしておさめる11・12がある。基部はわずか外に広がる17と、端部で外側に踏ん張る19・20とがあり、前者が大



第32図 折敷山古墳 出土遺物 3

型、後者が小型となる傾向を確認できる。タガは台形や「M」形が多く、平均で上辺0.8・下辺2.1・高さ1.1cmを測るほかに、わずかであるがやや長方形に近くて高さが1.4cmとかなり高いものもある。外面の調整は、基部がタテハケないし横方向のハケ、段部がわずかにタテハケを残しているが丁寧なヨコハケである。内面の調整は、とくに下段に明瞭な指ナデを残すが、タテハケも19にみられる。



第33図 折敷山古墳 出土遺物4

21・22は、形象埴輪である。いずれも小破片であることから何を模しているものか不明。

21は、平板に扁状の粘土を貼り付けており、そこにはヘラ状工具による線刻が施されている。小片のため、何を模しているのか不明だが、家形埴輪となるものか。

22は、水平に引かれた1条の沈線上に、径1cmほどの円形浮文が貼り付けられており、その下にも大きく山形となる沈線が施されている。表面は丁寧にナデられており、裏面は斜め方向の指ナデが認められる。小片ではあるけれども、三角板の短甲を模しているものと推定できる。ただし、この三角板の短甲が革綴であるか、鉢留であるかははっきりとしない。浮文が沈線の上に貼り付けられていることから、革綴短甲の可能性が高いものの、その表現が鉢のようにまるいことがやや気にかかる。県内で革綴短甲形埴輪が出土しているのは、金蔵山古墳と月の輪古墳である。⁽⁵⁾ 金蔵山2例はどちらも「線上に半球形の突起」となる粘土を貼り付けており、月の輪⁽⁶⁾ 3例も線上に長方形の粘土を貼り付けており、ともに革綴の表現と報告している。このほかの例をみても、線上に円形浮文で表現するものと、線上に長方形浮文で表現するものとがほぼ半々で認められる。革綴短甲を忠実に模したとするならば、線上に長方形で表現されるものであり、しかも鉄板の重ねた幅を綴じることから、線上より上方に偏って貼り付けられるはずである。しかし、実際は線上に円形の浮文で表現される例も少なくないことから、忠実に表現

されないものも多い。本例は鉢とともに円形の浮文で表現しているものの、線上に貼り付けている点を重視して、三角板革綴短甲形埴輪と考えている。ただし、金蔵山古墳例をはじめとして、線上に円形の浮文を貼り付けている短甲形埴輪が確実に革綴を模したものであると判断した場合である。ここで鉢留を表現している浮文貼り付けの埴輪例が少ないとから、⁽⁷⁾ 線上に円形の浮文をもつものの中で鉢留を模したものが含まれている可能性もある。鉢留短甲形埴輪の場合は、鉄板を重ねたその中心部分に鉢が打ち込まれることから、その埴輪的表現は線上の上か下に若干間をあけて貼り付けられるものである。大阪府玉手山遺跡出土例でみると円形の浮文を線に沿って貼り付けるのが基本である。けれども、鳥取県長瀬高浜遺跡出土例をはじめとして鉢留の表現（革綴であるものもある）を省略させたものも少なくない。また、特異な革綴例として江田船山古墳出土の短甲がある。⁽⁸⁾ これを埴輪で模したならば鉢留のように線に沿った円形の浮文で表現されるであろう。このように折敷山古墳出土例を一概に革綴と確定することはできないものの、鉢留を模した埴輪は鉢の表現を省略する傾向にあるとみられることから、円形浮文を線上に貼り付けている表現は革綴と推定して間違いないであろう。

須恵器（図版20） 東トレンチより1点、表採で1点出土しているが、本墳に伴うものではなくて混入であろう。23は内外面を丁寧にヨコナデするが、内面には同心円文のタタキが認められる。胎土は砂粒をほとんど含まず、灰白色の色調を呈し、外面には自然釉がかかる。短頸壺の肩部となるものか。24は坏蓋の天井部片で、やや荒いヘラケズリが認められる。6世紀代のものと推定される。

（3）小結

調査は、わずかに4本のトレンチを周壕部分に限って行ったのみであるが、これまで不明であった埴輪や葺石状の存在が確認された。東西に残る周壕から、一辺44.5・墳高4.6mを測り、岡山県下で1、2位を誇る大方墳となることが確定的となった。これまでに知られている吉備最大の方墳である角力取山古墳は、発掘調査がなされていないために、その規模は確定していないものの、およそ一辺36×38m、高さ4～5mと推定されており、このどちらかが県下第1位の方墳となるのは間違いない。角力取山古墳は、内部主体が粘土槅ないし木棺直葬と推定され、出土する円筒埴輪などより前Ⅲ期前半に比定されている。⁽⁹⁾

折敷山古墳の築造時期は、出土した埴輪から推定すると、黒斑を残す円筒埴輪の存在などにより川西編年Ⅲ期に比定され、しかもヨコハケ工具の幅が広いことからB種ヨコハケのなかでも後出するものである。また、三角板革綴短甲形埴輪からはそのモデルとなる同短甲の時期が5世紀前半とされ、しかも革綴から鉢留への移行は5世紀の30～40年代である。これらから折敷山古墳の築造年代は5世紀前半、それも第2四半期ごろであろうか。

番号	部位	残 部	法 量 (cm)	調 整	外 面 内 面 [ハケ密度 1cmでの本数]	タガの 形 状	色 調	備 考
1	口縁 ～基部	1 / 4	口径30.0 底部23.5 器高38.1 タガ0.8・2.5・1.1		タテハケ(9)→ヨコハケ(9) ユビナデ +ナナメハケ(9)→ナデ	台形	褐 色	黒 斑 東トレンチ
2	頸 部	1 / 4	タガ径25.8 タガ0.8・2.1・1.5		タテハケ(8) ヨコハケ(10)	方形	黄褐色	西トレンチ
3	頸 部	小片			ヨコハケ?→ヨコナデ ユビナデ	—	黄褐色	朱 塗 西トレンチ
4	肩 部	1 / 10	タガ径29.4 タガ0.7・2.1・1.2		ナデ? ユビ	方形	黄褐色	朱 塗 西トレンチ
5	タガ部	1 / 6	タガ径29.6 タガ1.1・1.9・1.4		タテハケ(9) ナデ	方形	色	朱 塗 西トレンチ
6	基 部	1 / 4	底径21.4 タガ径29.4 タガ1.0・1.8・1.2 基部-タガ15.3		タテハケ(?)→ヨコハケ(9) ユビナデ?	方形	淡黄褐色	第1タガより 上を朱塗 西トレンチ
7	タガ部	1 / 12	タガ径(28.0) タガ0.9・1.7・1.2		ヨコハケ? ユビナデ	方形	黄褐色	朱 塗 西トレンチ
8	頸 部	1 / 8	タガ径 タガ0.9・2.6・1.3		— ナデ?	方形	黄褐色	朱 塗 西トレンチ
9	タガ部	1 / 8	タガ径30.4 タガ0.9・2.4・1.2		ナデ?	M形	黄褐色	朱 塗
10	口縁部	1 / 20	口径33.5	— —			黄褐色	西トレンチ
11	口縁部	小片			ヨコナデ —		褐 色	西トレンチ
12	口縁部	小片			ヨコナデ ヨコナデ		黄褐色	西トレンチ
13	タガ部	1 / 12	タガ径(30.6) タガ(0.8)・1.7・0.8	— ナデ?		方形	黄褐色	南トレンチ
14	タガ部	1 / 6	タガ径28.6 タガ0.8・2.5・1.2		ナナメハケ→? ユビナデ	M形	黄褐色	
15	タガ部	小片	タガ0.9・2.2・1.2	— —		台形	淡赤橙色	南トレンチ
16	タガ部	小片	タガ0.9・2.1・1.4 タガ1.1・1.9・1.4		ヨコハケ(5~6) ユビナデ	方形	黄褐色	東トレンチ
17	底 部	1 / 6	底径27.6		タテハケ(?)→ナデ? ユビナデ		黄褐色	西トレンチ
18	底 部	小片			タテハケ(?)→ヨコハケ(8) ユビナデ		黄褐色	東トレンチ
19	底 部	1 / 6	底径17.8		ナデ? タテハケ(6)		淡黄褐色	北トレンチ
20	底 部	1 / 5	底径17.7		タテハケ(8)+ナデ ユビナデ		黄褐色	西トレンチ
21	家形?	小片			ナデ→沈線 ナデ		黄褐色	東トレンチ
22	短甲形	小片			ナデ→沈線 ユビナデ		黄褐色	径1.1の円形 浮文貼り付け 西トレンチ

第6表 折敷山古墳出土埴輪観察表

なお、古墳は自然公園としてその周壕も含めて現状保存としている。けれども、地盤が軟弱であったために工事途中において法面（南・西側）が3度にわたって崩落し、とくに西側では周壕外堤にまでその影響がおよんでいる。そのため当初の計画であった芝付けからコンクリート積みや同枠積み法面としたため、若干景観を損なうこととなっている。

- 註1 西川 宏「岡山県造山古墳とその周辺の前半期古墳」（『古代学研究』第60号、1971）
葛原克人「古墳時代前期」（『岡山県の考古学』1987）
- 2 葛原克人「大古墳」（『吉備の考古学』1987）
- 3 總社市史編さん事務局『総社市史』考古資料編 1987
- 4 角取力山古墳については発掘調査がなされていないばかりか、詳細な墳丘測量図もこれまで作成されなかった。しかし、最近山手村教育委員会により測量調査がなされたようであり、その結果の公表が望まれる。今回もこれまで同様、現地での観察より墳丘の規模を推定している。古墳の南側と東側では畠地の開墾により、西側では道路の取り付けにより大きく墳端が削り込まれている。北側においては丘陵を切断した濠の痕跡であろう凹地が明瞭に残される。簡易測距器によると東西37・南北39.5、高さ5.5～6.5、墳頂部平坦面東西10・南北12mを測る。段築は北側にわずかなテラスと南側に残る小道をテラス痕跡と推定すれば、高さ2m以下で1段目が築かれる。北側の周濠は中央で幅約5・東西両端で約1mと墳丘の周囲をめぐらす濠ではなく、丘尾切斷的な濠として復元できようか。
- 5 西谷真治・鎌木義昌「金蔵山古墳」1959
- 6 近藤義郎「月の輪古墳」1960
- 7 埋蔵文化財研究会『形象埴輪の出土状況<資料>』第17回埋蔵文化財研究会、1985
- 8 通常の革綴のように重ね合わせた鉄板にまたがってつないでいくのではなく、表面に2箇所の穴を穿ち2枚と一緒に結ぶものである。
革綴と鋲留による鉄板の結合方法は、註10参照（P144）。
江田船山古墳出土革綴短甲：『増補日本上代の甲冑』
- 9 註1と同じ
- 10 川西宏幸「円筒埴輪総論」（『考古学雑誌』第64巻第2号、1978）
- 11 一瀬和雄「古市古墳群における大型古墳埴輪基成」（『大水川改修とともにう发掘調査概要』V、1988）
- 12 小林謙一「歩兵と騎兵」（『古代史復元』7、1990）

付載2. 小造山古墳の埴輪について

(1) 墓輪出土の経緯

小造山古墳は、協同組合テクノパーク総社による工業団地の、その用地南端に接し、古墳の外堤付近が境界となっている（第1図）。したがって現状保存として開発計画より除外されたものの、工事法面の掘削範囲は古墳外堤数m地点にまで接近しており、事前に工事掘削位置を変更していただいたほか、試掘トレンチを設定して外堤外側の状況を確認することとした。調査の結果では、遺構・遺物ともまったく検出されなかった。

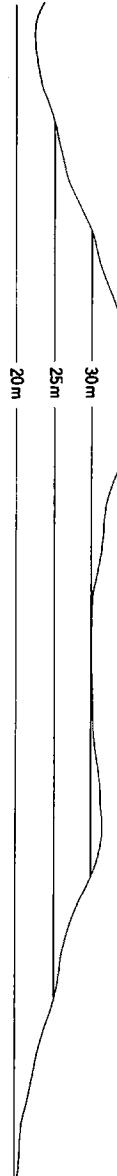
しかし不幸にも、工事途中の1991年7月4日、数日来の長雨と、折敷山古墳同様に地盤が軟弱であったこととかさなり、法面が崩落するという事態を招いた。崩落の範囲は小造山古墳の周濠にまでおよぶものであり、用地境となる後円部北側の外堤部分はほとんど崩れ落ちてしまった。現状保存であり、しかも用地外であったことから、詳細な墳丘測量調査等は実施しておらず、外堤部分の状況については『総社市史考古資料編』掲載の航空写真による測量図を残すのみとなった。ただし、このアクシデントによりこれまでその詳細についてまったく不明であった埴輪を採集することができたのは、不幸中の幸いであろう。

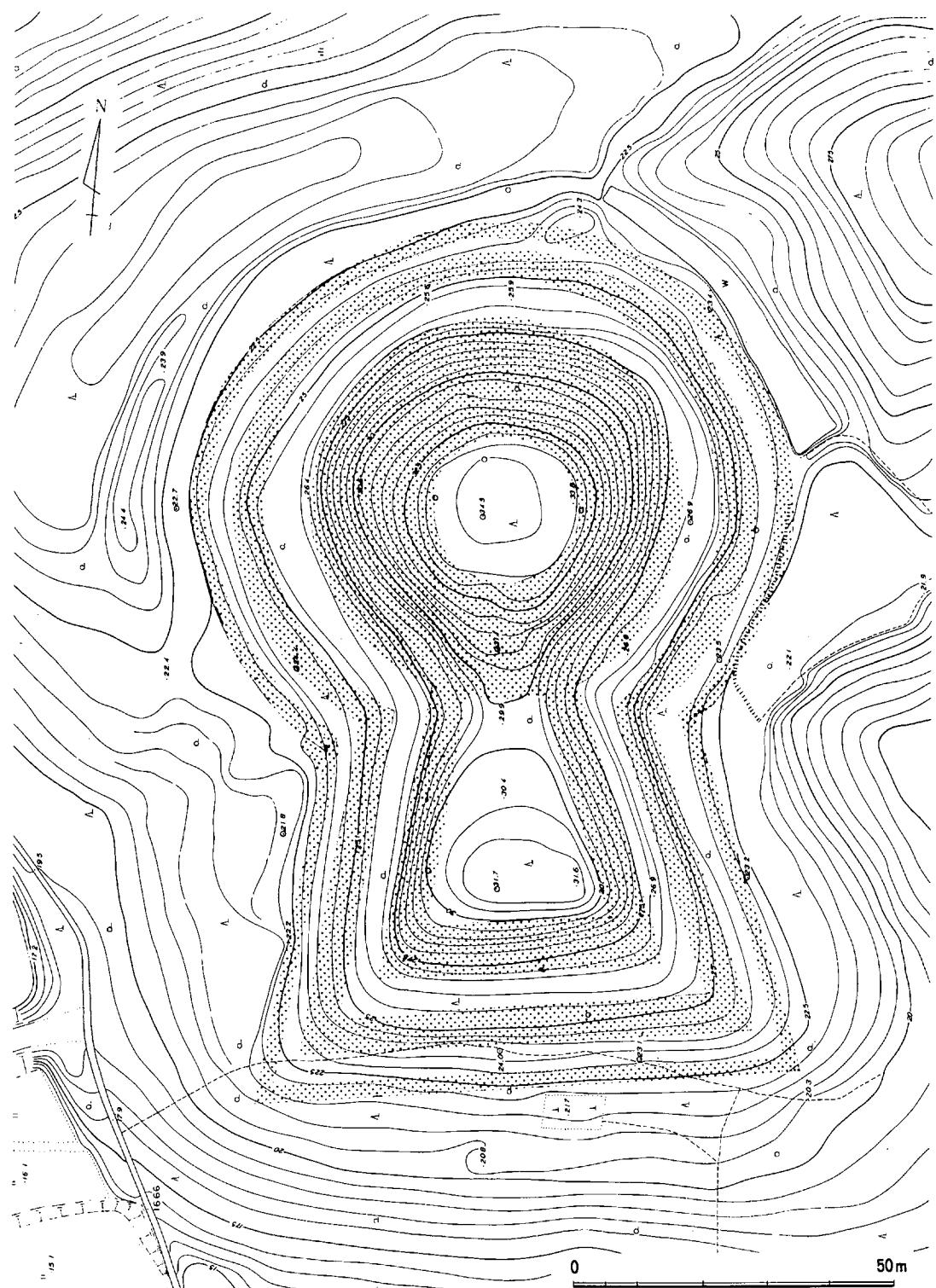
埴輪はすべて崩落土内より採集されたものである。その採集状況は外堤および外堤外からのものではなく、周濠埋土と推定される土砂中に含まれていたものと考えられる。このことから外堤上に埴輪列が存在しなかったという推定ができるようか。

	全長	後円部径・高	前方部幅・長・高	比高差	埴輪	時期
西川 ⁽²⁾ 1971	142	85・10.5	72・-・7.7	2.5		
「総社市史」 ⁽³⁾	約142	約85・約12	約72・-・-	約3		
葛原1987 ⁽⁴⁾	約138	91.5・12	約90・-・10.2	2		前Ⅲ期後半
「前方後円墳集成」 ⁽⁵⁾	約142	約85・約12	72・-・9	2.7	Ⅲ式?	
「岡山県史」 ⁽⁶⁾	136	88・-		2.8		

第7表 小造山古墳墳丘規模表

* 単位m





第34図 小造山古墳 墳丘復元図

(2) 墳丘と埴輪

墳丘 古墳は、全長約142mを測る前方後円墳で、岡山県下第8位の規模とされる。⁽¹⁾しかし、これまでに提示されたその規模や時期等についてまとめてみると（第7表）、若干の相違を認めることができる。今回、新たに埴輪が採集されたことで古墳の築造時期がより限定できることから、墳丘の復元についても再検討しておきたい。基本となる墳丘測量図には、総社市史の編さん事業とともに航空測量されたもの⁽⁷⁾を使用する。これに現地での観察を加えて墳丘の復元を試みよう。

古墳の現状は山林で、それもかなり雑木・下草等が繁っている。後円部に限っては、工業団地の開発にともなう地形測量用に一部の伐開が行われたが、このほかでは踏査することさえできないような状況にある。このことから、表にまとめた各文献を大いに参考として、墳丘の復元や採集された埴輪の時期を求めよう。しかし、いずれの墳丘計測値や築造時期等についても、将来の測量調査あるいは発掘調査を待たなければならないものである。⁽⁸⁾

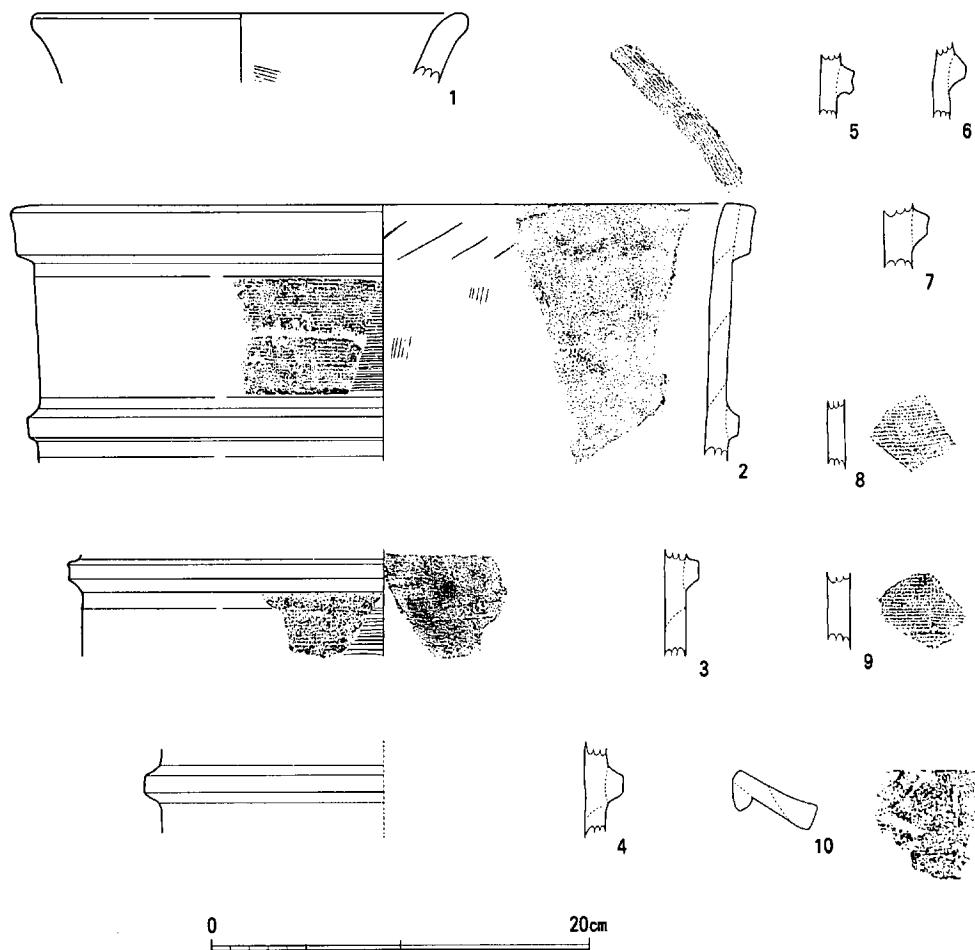
まず、これまで古墳は2段築成によるものと考えられていたが、「三段築成の最下の段はおおむね50センチと低いため一見したかぎり二段築成と見まちがいやすい」⁽⁴⁾というように、3段の築成となることは肯定できよう。しかし、後円部においては明瞭に確認される各段も、前方部に向かうほど不明瞭となる。これは、各段のテラスを中心として果樹園の造成が行われたことによるものであろう。

後円部については、後世に一部改変されたものの幅約10mの周濠がめぐらされている。しかし、前方部においてはさきの造成により大きく改変されており、その存在すら不明である。けれども現在墓地のある位置が周濠内となる可能性もあり、例えばかつての土葬埋葬にともなう墓壙の掘削において硬いマサ土がどの深さから検出されるのか、あるいは開墾によってどの位置より埴輪が出土したなどを地元の古老から聞き取りすることが必要となろう。⁽⁹⁾

墓地の北側には小道が東西に通じており、あたかも前方部先端を示しているようである。この小道の北にも南側にも広い平坦面がみられないことから、墳丘斜面の開墾により造成された（削り出しまだ埋め出しの）平坦面に取り付けられた小道とする可能性は低く、おそらく前方部先端、あるいは墳丘のテラス端に残された小道と考えられる。墓地のあたりを周濠と推定するならば、この小道は中段と最下段のテラスあるいは基底のテラス（前方部先端）に相当するものであろう。中段と最下段のテラスと考えると、最下段の墳丘斜面が非常に緩やかでかつ広いものとなってしまうことや墳端東隅にあたる小道の北5m付近に高さ60cmほどの段差が残されていることなどから、小道を基底のテラスと考えるのが妥当であろうか。墳端西隅にあたる小道のやや南に折れて下る位置、小道と同レベルで鋭角に後円部方向に曲がる地割りが存在

し、かつ50cmほどの段差がこの地割り境の東側に残されている。この地点が前方部西側のコーナーに相当するものであろう。このように考えると前方部の墳裾を小道付近とするのが一番よさそうである。明瞭な周濠を残す後円部背面の墳端（現状の周濠南端）から墓地までは約137m、小道までは約130～137mを測り、小道北側に段差があることから、今回の再検討では全長を約135mと推定しておきたい。¹⁰

後円部径は明瞭に残された周濠や段築の状況から直径約92m、その高さ約12mとなる。前方部は高さが約9m、先端部幅が約86mを測り、後円部と前方部の比高差は2.8mとかなり前方部が低くなっている。しかし、前面幅が後円部径にかなり近似しており、またくびれ部から先端に向かっても大きく開いていく形状から、前方部が低いという古い形態を残しながらも、前方部が開くという新しい形態を確認することができる。



第35図 小造山古墳 出土埴輪

なお、後円部背面に造り出しをもつと報告されているが、周濠を後世に再掘削して溜め池とすることから、その土砂を置いた可能性も考えられ、積極的に造り出しとの判断はできない。また、西くびれ部のわずか北にも造り出し状の高まりが報告されているが、これについてはほぼくびれ部の位置で認められるようである。東側については開墾により不明。

埴輪 円筒埴輪と形象埴輪が出土しているが、その量はほんのわずかにすぎない。

口縁部の形態には2種あり、口縁端部外面にタガ状の粘土帯を貼り付けている2と、わずかに端部を外側に開かせてまるくおさめる1がある。2は、口径36.6・口縁突帯径39.4・タガ径37.6cmと、1の口径23.0cmに比べ、かなり大型である。同様にタガ部においても、タガ径(25.4)cmの4とタガ径33.4cmの3の、2タイプがある。基部については採集されていないが、当然大・小の2タイプが存在するものと考えられる。

タガは、やや低い台形で、上辺を「M」状に凹ませるものは少ない。大型品のタガは、上辺0.9・下辺1.7・高さ0.6cmで、小型品のタガは上辺0.9・下辺1.9・高さ0.8cm、径の不明なタガは平均で上辺0.8・下辺1.9・高さ0.8cmとなる。突出度はそれぞれ32.4・42.1・38.8となり、小型品の方が相対的に高いタガを貼り付けている。

調整は、外面をヨコハケとする。ヨコハケの密度は2・3・5・8・9、いずれも1cmに6ないし7本で、9のはかは1次調整のタテハケをまったく残していない。ヨコハケが重なる8や休止線を残す9より、川西B種⁽¹¹⁾であろう。しかも、2のように段部を一度の回転動作でハケ調整できるよう工具幅は段幅とほぼ同じ8cmにもなる。内面の調整は、1・2でハケを残さないようにヨコナデやナデが行われるが、その痕跡からハケ密度を1が8本、2が5本/1cm程度と観察され、またそれらをナデ消している布状痕なども残されている。とくに2の内面には、口縁端部の突帯貼り付けによる指頭圧痕が顕著であり、ほかに右上がりの工具當て痕跡も認められ、口縁端面には7本/1cmのハケ調整を施す。

スカシを残す破片はまったくない。

焼成はやや脆弱なものもあるが、概ねしっかりとしたものである。とくに大型品は淡赤橙色で均一に焼成されており、また7は須恵質により近いものであることから、いずれの埴輪も窯窓で焼成されたものと推定される。野焼の痕跡である黒斑はまったく認められない。

10は、形象埴輪と考えられるが、何を模しているのかは不明である。三角状の粘土が貼り付けられており、これが補強材として図示した傾きとなるならば人物埴輪の裾や家形埴輪の廂状部分になろうか。しかし、市内出土の家形埴輪の粘土補強部分を観察したところではきれいに三角形状に残るものはなかったため、ほかの部位となることも考えられる。

番号	部位	残部	法量 *1 (cm)	調整	外面 対面(ハケの密度 *2)	タガの 形状	色調	備考
1	口縁部	1/10	口経 23.0		ヨコナデ ヨコハケ(8) → ヨコナデ		茶褐色	
2	口縁 ～段部	1/10	口経 36.6 口縁突帯径 39.4 突帶 2.2・3.0・0.9 タガ径 37.8 タガ 1.1・1.7・0.5 口縁-タガ 11.2		ヨコハケ(6)、ヨコナデ タテハケ(5) → ヨコナデ 口縁端面ハケ(7)	低台形	淡赤橙色	
3	タガ部	1/10	タガ径 33.4 タガ 0.8・1.7・0.6		ヨコハケ(6)、ヨコナデ ヨコナデ	M形	淡赤橙色	
4	タガ部	1/15	タガ径(25.4) タガ 0.9・1.9・0.8	— ヨコナデ		M形	褐色	
5	タガ	小片	タガ 0.9・1.8・0.7		ヨコハケ(7)、ヨコナデ ナデ	M形	橙色	
6	タガ	小片	タガ 0.6・2.0・0.8		ヨコナデ ナデ?	M形	淡赤橙色	
7	タガ	小片	タガ 1.0・2.0・0.8		ヨコナデ ヨコナデ	M形	淡灰色	
8	段部	小片			ヨコハケ(6) ヨコナデ		橙褐色	
9	段部	小片			タテハケ? → ヨコハケ(7) ヨコ方向ナデ		明黄褐色	
10	?	小片			ナデ ナデ		淡茶褐色	

*1 タガは上辺・下辺・高さの順

*2 ハケの密度は 1 cm での本数

第8表 小造山古墳出土埴輪観察表

(3) 小結

小造山古墳は、「前方部の低くて長く先端が広がらない柄鏡形」を呈していることから「造山古墳に先行」し、「4世紀後半にまでさかのぼりうるかもしれない」と考えられていた⁽²⁾。しかし、その墳形は「かなり古い様相を示すが、前方部の長さは相対的に短く、特に墳裾は前方部にむかうにつれ徐々に、開きを増す」ものであり、さらに出土している円筒埴輪のタガは低くないものの、その径が小ぶりであることから新しい要素ととらえ、「造山古墳より後出的で前Ⅲ期後半」と位置付けられる⁽³⁾にいたっている。今回、外堤から周濠の一部にわたって崩落するというアクシデントに見舞われたものの、その反面新たに埴輪が採集され、結果として造山古墳より後出する古墳であることは確定的となった。

復元される墳丘の規模は、全長約135・後円部径約92・前方部幅約86・前方部長約54・後円部高約12・前方部高約 9 m となる。前方部が低いという形態からは古式の様相を呈しているが、

前方部がその先端に向かって開き、前方部幅が後円部径にかなり近づくものであることや、また県内において例の少ない周濠を明らかに後円部においてめぐらしていることなど、新しい要素も確認される。それに決定的なのは埴輪の時期である。有黒斑の埴輪はまったくなく、須恵質により近いものが認められる。そして口縁端部に貼り付けの突帯をもつ埴輪が出土しており、このタイプが川西編年Ⅱ～V期前半に認められ、その中心時期がIV期とされていること。さらに2次調整のヨコハケが段幅と同じくらい幅広の工具で行われていること。タガはやや低い台形であることなどから、出土した埴輪は川西編年IV期に比定できる。

出土した埴輪の中で口縁端部貼り付け突帯の埴輪は、岡山県内においてほとんど出土例がない。⁽¹²⁾ その多くが近畿地方に分布していることから、畿内系の円筒埴輪として畿内の埴輪製作技術を色濃く受けたものと考えられる。おそらく小造山古墳に樹立させる埴輪の製作にあたっては、畿内から工人あるいは技術者が導入・派遣されていたものであろうか。

また、本墳に周濠が掘られていることからも畿内の技術を受けていたことが裏付けられよう。⁽¹³⁾ 吉備の大首長墓である造山・作山古墳においては墳丘の周囲をめぐる濠は掘られていない。⁽¹⁴⁾ しかし、この時期畿内の大王墓においては幾重にもめぐる濠が掘られ、大首長墓や首長墓においても同様である。吉備ではじめて本格的な周濠を整えた古墳は、両宮山古墳であり、畿内の大王墓を強く指向したものと評価されている。⁽⁶⁾ 両宮山古墳は、宿寺山古墳とともに作山古墳につづく吉備の大首長墓と考えられ、あたかも備前・備中に2分された状況をうかがうことができる。しかも、両宮山古墳のみならず宿寺山古墳においても盾形の濠をめぐらすものである。このことから両宮山・宿寺山段階において本格的な周濠を築くことになったものと推定できよう。この段階に周濠をめぐらすという畿内の様相が導入されたものであり、この点で両宮山・宿寺山古墳は畿内的な古墳であるといえる。小造山古墳も同様に周濠を築いている。しかし、前方部に確実にめぐらされていたかは確定できないことから本格的な周濠ではなかったものだろうか。後円部にめぐる周濠は高い外堤を備えたものであるのに、前方部では外堤となる高まりがあるものとは思われない。周濠が前方部にめぐらされていないとするならば明らかに両宮山・宿寺山古墳より形態的に先行するものであり、周濠が全周するとしても埴輪の比較において、宿寺山古墳からは確実な須恵質埴輪が出土しており、小造山古墳の築造が先行するものである。さらに造山古墳より確実に後出する小造山古墳は、作山古墳が有黒斑の埴輪を樹立していたことや周濠をもたないことなどから、作山古墳よりも後出するものと推定される。

このように墳丘の形態にはやや古い要素も残されているが、埴輪からは小造山古墳の築造時期が5世紀中頃～後半と推定され、造山古墳はもとより、作山古墳よりもわずかにおくれて築かれたものではなかろうか。作山古墳が岡山県下で第2位の規模を有していることから古代吉備の大首長墓であったのは確実で、小造山古墳はその規模やその立地から大首長につぐ、総社

平野近辺の首長墓であっただろうか。しかも、周濠をめぐらす畿内的古墳であり、口縁端部に突帯を貼り付ける畿内系埴輪をもつなど、その背後に畿内勢力の影をもっている被葬者像がうかがえる。

- 註 1 総社市教育委員会『総社市の歴史と文化財』1990
- 2 西川 宏「岡山県造山古墳とその周辺の前半期古墳」(『古代学研究』第60号, 1971)
- 3 総社市史編さん事務局『総社市史』考古資料編 1987
- 4 葛原克人「古墳時代前期」(『岡山県の考古学』1987)
- 5 近藤義郎『前方後円墳集成』中国・四国編, 1991
- 6 葛原克人「巨墳の造営」(『岡山県史』第2巻 原始・古代I, 1991)
- 7 測量図は註 3 に掲載 (pl23)
- 8 小造山古墳は、総社市と岡山市との境界線上に立地しているため、本市のみで調査を実施することはできない。しかもその保存・活用についても同様である。岡山県が推し進めている吉備路風土記の丘構想のなかで、県・2市が共通したビジョンをもって史跡の保存・活用をしなければならないであろう。
- 9 わずかであるが聞き取り調査を行ったものの、詳細は不明のままである。
- 10 測量図にある小道と墓地との間隔は、現地での観察とやや異なっている。小道がやや北に寄り過ぎているものであり、現状ではほぼ小道を墳端と考えているが、図面上では墓地より逆算して復元している。なお、後円部墳端の位置も現状の周濠の墳丘側端を押さえていることから、あと数mプラスする必要がある。
- 11 川西宏幸「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』第64巻第2号, 1978)
- 12 大阪府津堂城山・応神陵(菅田御廟山)・仲哀陵(岡ミサンザイ)古墳、奈良県ウワナベ古墳から出土している。
- 13 口縁端部に突帯を貼り付けている埴輪は、県内において金蔵山古墳等に類似例があり、その時期は畿内と同じく川西Ⅱ期となる。しかも、突帯は特殊器台形埴輪の口縁形態に系譜があるものと考えられることから、Ⅱ期からすべてを畿内系とするわけにもいかないが、県内で出土例がほとんどないことやその分布の中心が畿内にあることから典型的な突帯の埴輪を畿内系として考えてよいようと思われる。宿寺山古墳例が金蔵山古墳の系譜に通じるものであろうか。
- 14 造山古墳築造にかかる工事試算(『学習漫画岡山の歴史2吉備の大王』1989)においては濠にかこまれていたものとする。

付載 3. 周辺古墳出土の埴輪について

(1) 法蓮古墳群

位置 古墳群は三須丘陵の東部に位置し（第2図），今回調査を行った折敷山遺跡や雲上山11号墳からは南東約800mの地点になる。昭和60・62年には，工業団地の造成に伴って発掘調査が実施されており，総数6基の古墳が調査された。⁽¹⁾

埴輪 ここでは観察表の作成を主として再整理を行っている。

22号墳では，報告の円筒埴輪5，朝顔形埴輪1のほかに，コンテナ1箱分ほどの埴輪片があるが，その大半は報告された埴輪と同一個体片となる。

口縁部はいずれも短く外反し，端部をまるくつまみ出す1・7と，面取り状におさめる3とがある。口径はいずれも30cm以上で，口縁端からタガの中央までは19.5cmである。調整は，外面をタテハケとする1，ヨコハケとする3があり，ハケ密度は1・3が12～13本/1cmとやや細かい。3のB種ヨコハケは，ハケ工具幅5.5cm，静止線3.5cmスパンであり，やや時期の下るものであろう。内面の調整はナデで，3には一部ハケが残されている。

基部片はまったくみられない。これは埴輪が壊れて流失する時間的な差によるものと考えられ，しかも1・2を円筒埴輪棺と推定して，22号墳に樹立されていた埴輪はわずかに数本と報告している。この円筒埴輪棺は，基部のほかに2の口縁部も欠き，1・2を組み合わせ一棺とすることから，本墳に樹立していた埴輪か別の古墳の埴輪を転用したものであろう。

段部は，5が段幅11.1cmを測る以外，すべて小破片である。外面の調整はいずれもヨコハケで，その密度14本/1cmとかなり細かい19もあるが，8～10本のものが多い。内面調整には，タテハケ・ヨコハケ・ナデがみられるが，ヨコハケがやや多いという傾向がとらえられる。

タガは，上辺を「M」に凹ませた低台形が多い。ほかに台形や長方形などもあり，その突出度は低台形33.1・台形63.2・長方形61.2となる。タガ径のわかる個体からは，口縁部同様，直徑30cm前後となり，大小の規格はみられない。

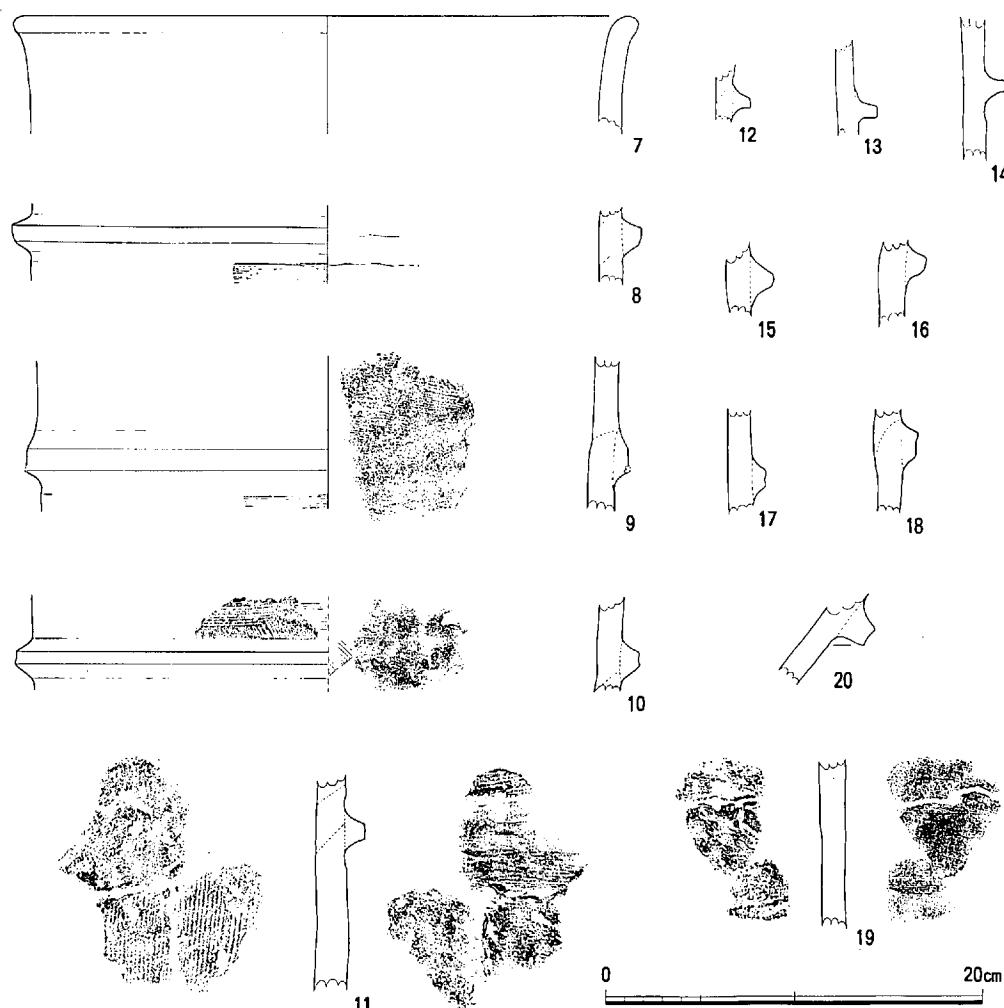
朝顔形埴輪には，6の頸部片，20の肩部片がある。20のタガは方形で，その突出度56。おそらく朝顔形埴輪においては，タガの形状から推定すると円筒埴輪に比べてタイプ（範型）的に崩れる傾向が遅いと考えられる。

法蓮23号墳は，ごく小量の埴輪片が出土しているだけで，しかも径のわかるものはなく，本墳に伴うものかどうか定かでない。

21・22の口縁部は直立し、わずかに外反させる端部はヨコナデを強く施すため内外面とも凹み、端面も同様である。調整は内外面とも左上がりのナナメハケで、ハケ密度は9本/1cmである。23・24の基部も同様に直立し、調整は外面にわずかハケが残されるほかは内外面ともナデもしくはユビナデにおわる。25の段部は、外面に11本/1cmのヨコハケを施し、ハケの重複する休止線が認められる。スカンは直径10cmの円形と推定される。タガは、26～29いずれも低台形で、上辺を「M」に凹ませ、上辺0.9・下辺2.3・高さ0.6cmを平均とする。突出度は31.6となる。

法蓮40号墳では、5点の埴輪片が報告されており、今回再整理したところいずれも報告された埴輪と同一個体片ばかりであった。

30・40-1の口縁部は、やや外に開くタイプで、その端部は強くヨコナデされ、内外面と端面



第36図 法蓮22号墳 出土埴輪

が凹む。調整は内外面とも左上がりのハケを施すが、内面では大きくナデ消している。ハケの密度は9本/1cmで、その工具幅2.5cm程度に観察される。口縁端部からタガの中央までは14.3cmを測り、4段であれば器高60cmほどになろうか。

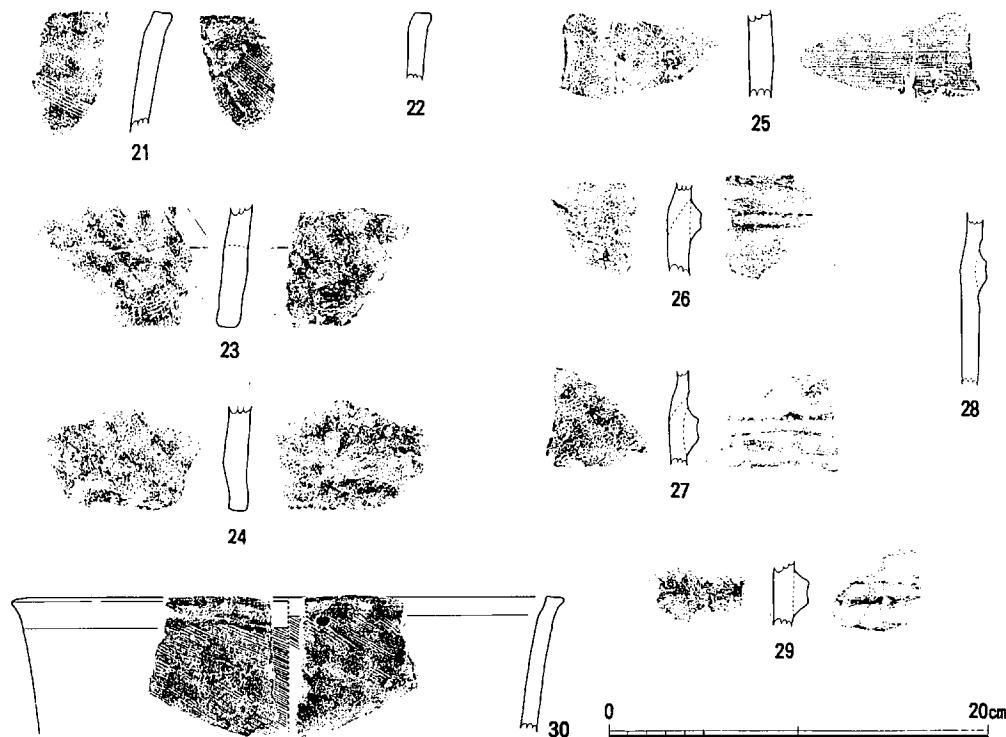
段部は、口縁部と同様左上がりのハケ調整を施している40-3と、ヨコハケ調整を施している40-2とが出土している。40-2はハケの密度9本/1cm、その工具幅4cm以上となる。ヨコハケは休止線を介して重複しており、川西A種と思われる。

基部は、外に開く40-4と直立する40-5がある。どちらも外面はナナメハケであるが、右上がりと左上がりとがある。基部を下にしてハケ調整を行っていると仮定すれば、左上がりが右利き、右上りが左利きの製作による製品と推定できる。それぞれのハケの密度はともに9本ないし10本/1cmで、その工具幅も2.5cm程度である。内面は指ナデが顕著に残る。

タガは、やや低めの台形で、上辺0.9・下辺2.2・高さ0.7cmを平均とする。径は約27cm。

スカシは、40-2と40-3に認められ、円形であろうか。その位置と数は段違いに2個所ずつ穿たれていたと推定される(40-3)。

小結 法蓮22号墳の埴輪には、全体をうかがえるものもなく、口縁部もわずかで、基部にいたってはまったく出土していない。それに円筒埴輪棺とされるものもあるなど、本墳に確実に



第37図 法蓮23・40号墳 出土埴輪

伴うものかどうかはやや問題が生じよう。埴輪は、外面調整にヨコハケを多用しているものの、タテハケにおわるものもあり、タガの形状でも方形となるものがあるなど若干時期的な差が認められる。しかし、川西編年IV期の範疇になろう。共伴した遺物には、陶邑編年でTK208期の壺があり、埴輪との時期差はほとんど認められない。

法蓮23号墳の埴輪は、すべて小破片で、その量もごくわずかであることから、本墳に確実に伴うものとはいえないが、23号墳に近接する37号墳の可能性もある。37号墳からは家形埴輪が出土しており、円筒埴輪が伴っていた可能性が高いのではないか。いずれにせよ、埴輪はB種ヨコハケで、タガの突出度が低いなど、川西IV期後半に相当するものと考えられる。共伴した遺物には陶邑編年でTK216期の甕があり、埴輪が若干新しい時期のものとなる。また、37号墳出土の須恵器は23号墳出土の須恵器よりも古く、TK73期と推定されていることから、37号墳に伴う埴輪とも考えにくいくこととなり、ほかに消滅した古墳が存在するのであろうか。

法蓮40号墳の埴輪は、外面調整にタテハケを多用している傾向にあることから、わずか1点のヨコハケの埴輪片にのみ若干の型式差を認めることができよう。しかし、タガはすべて低い台形で、上辺を「M」状に凹ませている。報告では40-3と40-4が同一個体とされ、今回さらに30・40-1も同一個体になるものと推定でき、復元すると4段で、スカシが2・3段目に段違いに2個ずつ穿たれる。外面の調整はすべてナナメ（タテ）ハケである。これらの状況から、埴輪はタテハケが川西V期、ヨコハケが同IV期と推定される。共伴した遺物には、須恵器坏身片と横矧板鉢留短甲等がある。坏身は口径10.8cmと小型で、端部をまるくおさめるが、それほど低いとはいえない立ち上がりを有す。陶邑編年では立ち上がりの形態等からTK10期、法量からTK23期前後と、直接的な比較はできない。県内でこの時期の窯は報告されていないもの地元で、それも地元タイプで焼かれているものと推定される。須恵器は6世紀前半を下らず、5世紀後半に出現する横矧板鉢留短甲を共伴することから、古墳築造の時期は6世紀前後に限定でき、いずれも埴輪の編年とくいちがうものではない。

	番号	部 位	残 部	法 墓 (cm) *1	調 整	外 面 内 面 (ハケ密度) *2	タガの 形 状	色 調	備 考
法	1	口縁部	小片	口径 -		タテハケ(11) + ヨコナデ ヨコナデ?		赤褐色	報告第28図-1
	"	タガ部	1/12	タガ径(30.5) タガ 0.6・2.0・1.1		タテハケ(13) → ヨコハケ(13) ナデ	山 形	赤褐色	報告第28図-1
	2	タガ部	1/10	タガ径 30.8 タガ 1.1・2.6・0.9		タテハケ(10) → ヨコハケ(10) ヨコハケ(10) + ナデ	M 形	橙褐色	報告第28図-2
蓮	3	口 縁 ～段部	1/3	口径 タガ径 37.4 タガ 0.9・2.2・1.0 口縁-タガ 19.5		タテハケ(12) → ヨコハケ(12) + ヨコナデ ヨコナデ + ナデ	M 形	黄褐色	報告第28図-3 スカン径 5.0 静止線 3.5
	4	タガ部	1/6	タガ径 33.8 タガ 0.5・1.7・0.9		タテハケ(7) → ヨコハケ(7) ナナメハケ(7) + ナデ	山 形	黄褐色	報告第28図-4
	5	タ ガ ～段部	1/6	タガ径 32.4 タガ 0.6・1.4・1.3 段幅 11.1		タテハケ(9) → ヨコハケ(10) ナナメハケ(9) + ナデ	方 形	黄褐色	報告第29図-5 休止線約4
	6	頭 部	1/6	頭径 21.2 タガ 0.1・1.7・1.0		タテハケ(7) ヨコハケ(7) + ナデ	三角形	黄褐色	報告第29図-6 朝顔形

	7	口縁部	1/5	口径 31.6	ヨコナデ —		淡褐色	
	8	タガ部	1/8	タガ径 33.4 タガ 0.9・2.0・1.1	ヨコハケ (11) ナデ	台形	赤褐色	
	9	タガ部	1/4	タガ径 32.2 タガ (1.1)・2.7・(0.7)	ヨコハケ (9) ヨコハケ (12) + ナデ	M形	黄褐色	
22 号	10	タガ部	1/14	タガ径 (33) タガ 0.6・2.0・0.9	ヨコハケ (7) → ヨコハケ (7) ナメハケ (8) → ナデ	M形	黄褐色	
	11	タガ部	小片	タガ径 — タガ (0.7)・2.1・1.1	ヨコハケ (6) タテハケ (5)	台形	黄褐色	スカシ径 7.0
	12	タガ	小片	タガ 0.5・1.6・0.9		方形	黄褐色	埴輪棺
	13	タガ	小片	タガ 0.5・1.2・0.9	ナデ	方形	明橙褐色	
	14	タガ部	小片	タガ径 — タガ 0.6・1.7・1.0	ヨコハケ (8) ヨコハケ (6) → ナデ	方形	黄褐色	
	15	タガ	小片	タガ 0.6・1.7・0.9		山形	淡赤褐色	埴輪棺
	16	タガ	小片	タガ 0.6・1.7・0.9	ヨコハケ (12) ナデ	台形	赤褐色	埴輪棺
	17	タガ部	小片	タガ径 — タガ 0.8・2.3・0.6	ヨコハケ (12) ヨコハケ (11) → ナデ	M形	明黄褐色	埴輪棺
	18	タガ部	小片	タガ径 — タガ 1.2・2.6・0.7	ヨコハケ (9) ヨコハケ (12) → ナデ	M形	明黄褐色	埴輪棺
	19	段部	小片		タテハケ → ヨコハケ (14)		赤褐色	
	20	頸部	1/5	タガ径 (33.4) タガ 0.9・2.5・1.4	ナデ ナデ	方形	褐色	
法蓮 號	21	口縁部	小片		ナメハケ (左・9) ナメハケ (左・9)		明黄褐色	
	22	口縁部	小片		—		明黄褐色	
	23	基部	小片		ハケ (6) → ナデ? ユビナデ		黄褐色	
	24	基部	小片		ナデ ナデ		黄褐色	
	25	段部	小片		タテハケ → ヨコハケ (11) ナデ		明黄褐色	スカシ径 10.0
	26	タガ部	小片	タガ 0.7・2.2・0.6	ヨコナデ ナデ	M形	明黄褐色	
	27	タガ部	小片	タガ 1.0・2.5・0.6	ヨコナデ ナデ	M形	黄褐色	
	28	タガ部	小片	タガ 0.9・1.9・0.4	— ナデ	M形	黄褐色	
	29	タガ部	小片	タガ 1.0・2.5・0.8	ヨコナデ ナデ	M形	黄褐色	
法蓮 號	30	口縁部	1/14	口径 (29.0)	ナメハケ (左・9) ナメハケ (左・9) → ナデ		淡黄色	
	40-1	口縁部	1/14	タガ径 (26.0) 口縁-タガ 14.3 タガ 1.0・2.1・0.6	ナメハケ (左・9~10) ナメハケ (左・8) → ナデ			報告第6図1 スカシ径 12
	40-2	タガ部	1/4	タガ径 28.2 タガ 0.9・2.1・0.8	ヨコハケ (9) ユビナデ → ヨコナデ			報告第6図2
	40-3	タガ部	1/8	タガ径 28.0	ナメハケ (左・8~10)			報告第6図3
	40-4	基部	1/8	底径 23.4	ナメハケ (左・10) ユビナデ			報告第6図4
	40-5	基部	2/3	底径 24.2	ナメハケ (左・9) ユビナデ			報告第6図5

* 1 タガは上辺・下辺・高さの順

* 2 ハケの密度は 1cm²での本数

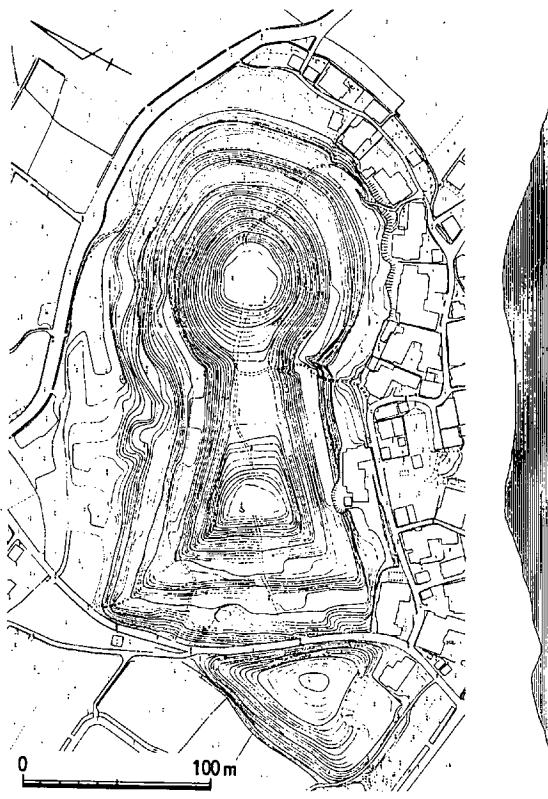
第9表 法蓮古墳群出土埴輪観察表

(2) 作山古墳

位置 作山古墳は、岡山県下第2位の規模を有し、全国でも第9位となる巨大前方後円墳である。古墳は三須丘陵西端の、独立した丘陵を利用して築かれている。

墳丘 古墳は三段築成で、全長約286mを測る。巨大であるため、その段や斜面の構造も大規模で、西側くびれ部のやや前方部よりには造り出しがある。同時期の大王墓などでは幾重にもめぐらされた周濠が築かれているが、作山古墳では後円部に作山段とよばれる周庭帯があるほかは、前方部とくびれ部南東側に残丘が大きく残っている。作山古墳の規模については積極的に再検討できる資料をもたないことから、ここではこれまでに発表された墳丘規模の数値等を表にまとめておくこととし（第10表）、総社市教育委員会で採集した埴輪、葛原克人・高杉鋭一氏によって採集された埴輪について報告することとした。

埴輪 教育委員会で保管している埴輪はコンテナで約4箱程度であり、小破片が多いもののその径 $\frac{1}{2}$ 以上を残す基部片もいくつかある。良好な状況で採集された8・17などは後円部の南側の2段目テラスにて、その間隔5cmをあける程度で立て並べられていたものである。埴輪列の状況については「径35センチメートルの埴輪が15センチメートルの間隔をおいて樹てられた」という報告や、密接した埴輪列の状況を示す写真があり、今回の状況は後者の例に当たる。



第38図 墳丘測量図（『岡山県史』抜粋）

	全長	後円部径・高	前方部幅・長・高	比高差	埴輪	時期
西川 1970 ⁽²⁾	270	—・16				5世紀前半
「岡山県史」 ⁽³⁾	286	174・—	174・112・—	1		前III期後半～前IV期前半
「総社市史」 ⁽⁴⁾	286	174・約24	174・110・—	約1		
春成 1983 ⁽⁵⁾	約285	約175・26	160・約110・19	5	IV期	450～460年頃
「前方後円墳集成」 ⁽⁶⁾	286	174・約24	174・1103・約23	1	III・IV期	
葛原 1987 ⁽⁷⁾	約286	174・23	174・—・22			前III期後半～前IV期前半

第10表 作山古墳墳丘規模表

* 単位m

全体の大きさのわかる埴輪はまったくない。器種としては円筒・朝顔形埴輪があり、ほかに形象埴輪が数点認められている。

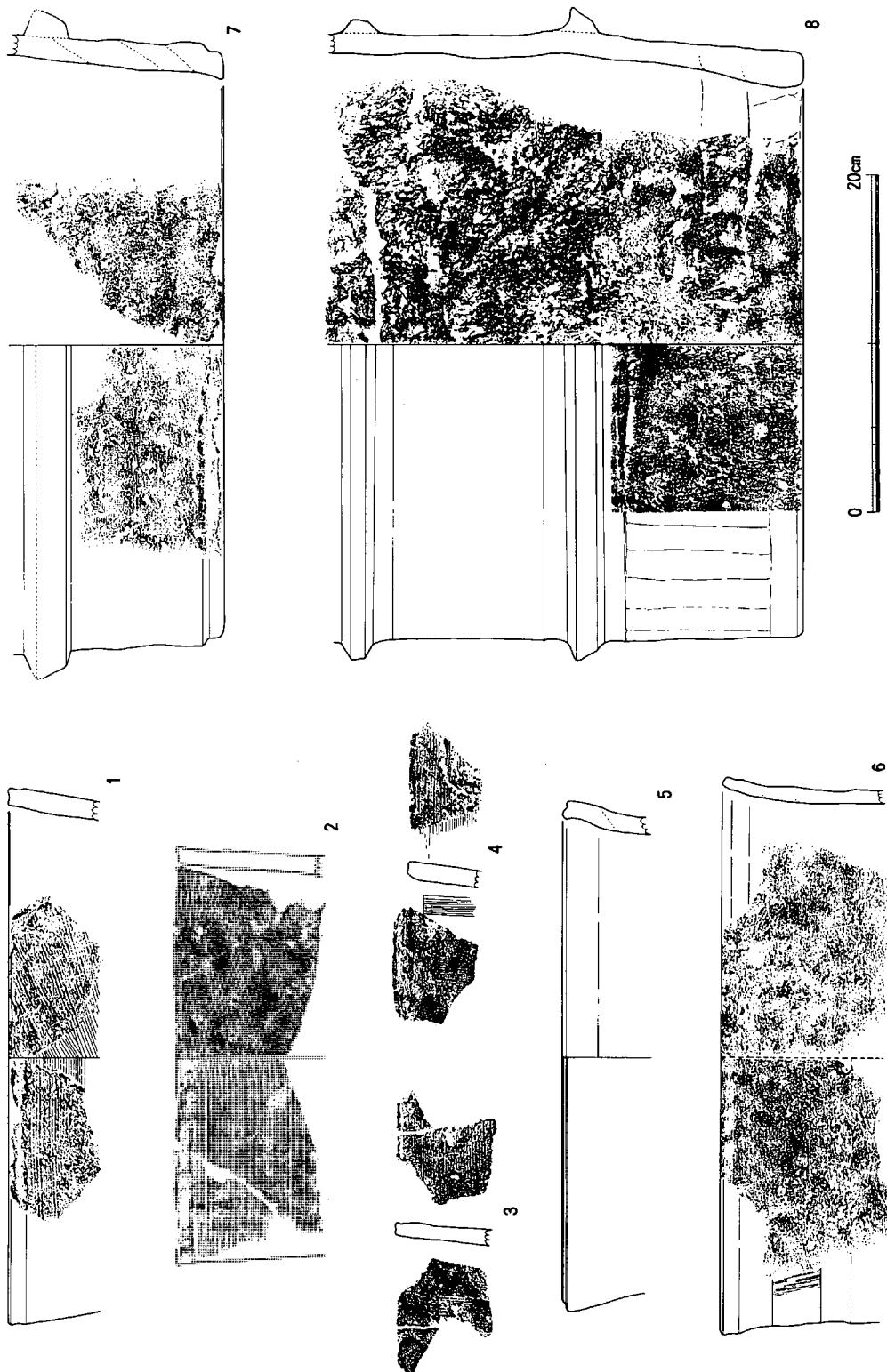
円筒埴輪の口縁部は、いずれも直立、ないしわずか外に傾く程度で、端部において内湾する5や外反する6もあるが、端部の内外面もしくは外面、それに端面も強くヨコナデて凹まし、あるいはわずかにつまみ出している1～4が多く認められる。調整は、外面をヨコハケ・内面をナナメハケとする1などと、外面をヨコハケ・内面をタテハケとする3などがある。それぞれのハケ密度は、1・2が粗く5～7本/1cm、3・4がやや細かく9本/1cmで、外面と内面とでは同じ工具をそれぞれ用いている。2のヨコハケは5～6cm幅の工具で、明瞭な静止線を残さないように丁寧に施されている。口径を推定できる破片でみると、口径25cmを境にして、1・5・6の大型と2の小型とに分けられるようである。

円筒埴輪の基部片は、出土点数が多い。しかし、8をのぞいてはいずれも第1タガまでを残すのみである。基部は直立するものとやや外傾するものとに区別され、さらにそれぞれ端部が外反する9・13が認められるほか、段をもつ7がある。7については規格を均一にするために使用したタガ等の痕跡であろうか。このほか、成形に用いたと推定される棒状の圧痕を接地面に残している9の例が多く認められる。

基部が完存している8・15からは、8の底径33.4～33.6cm、15の底径23.2～27cmと真円でなく楕円形を呈しており、残存の大きい破片でもその傾向がうかがえる。7のようにほぼ円形となるような埴輪の製作法と、底部を2ないし3枚の粘土帶の接合で成形するという埴輪の製作法とがあり、後者、とくに3枚の粘土帶接合の場合に楕円形となる頻度が高い。底径を推定できる破片でみると、33～35cm程度の大型と25～28cm程度の小型とがあり、ほぼ半々の出土量である。また、第1タガまでの高さについても10cm程度のものと16cm程度のものとがあり、大型が低く、小型が高いという傾向がうかがえる。調整は外面をタテハケで終わらせているものと、2次調整のヨコハケを行っているものとがあるほか、板状工具等による縦方向のナデをする8・11などがある。14のタテハケは工具幅4cm・密度5本/1cm、21のヨコハケは工具幅6cm・密度7～9本/1cm。静止線スパン2.5～3.5cmである。内面調整はその多くがユビナデ痕を残し、さらにタテハケを行っている13・15・21などがある。タテハケは、15の工具幅2cmと21の工具幅4cm以上とがあるが、いずれも7～9本/1cm程度のハケ密度である。

段部が完全に残っているのは8と32のみで、8が第2段目までのはかは、何段目に当たるのか不明の破片ばかりである。径を推定できるものからは、底径同様に大型と小型とがあり、大型が多い傾向がうかがえ、28の径46cmとさらに大きいものがある。ただし、28と31については外面に朱が塗られていることから朝顔形埴輪の可能性が高い。8の第1～2タガ間の高さは13.5cm、32のタガ間の高さは10.5cmを測る。調整は、外面をタテハケのちヨコハケを施すものが

第39圖 作山古墳採集埴輪



第40図 作山古墳採集埴輪2

20cm

13

0

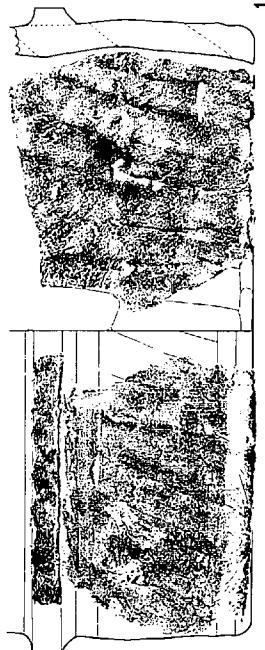
10



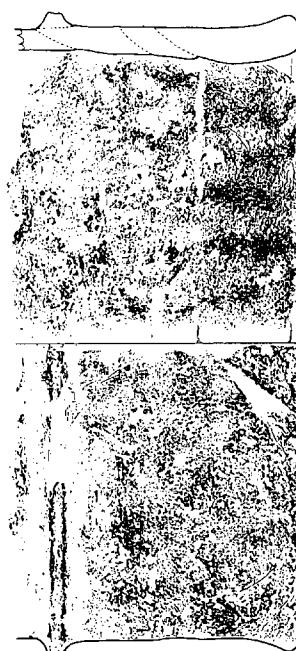
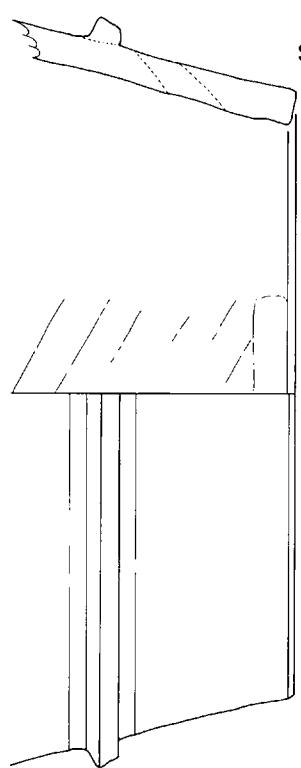
12



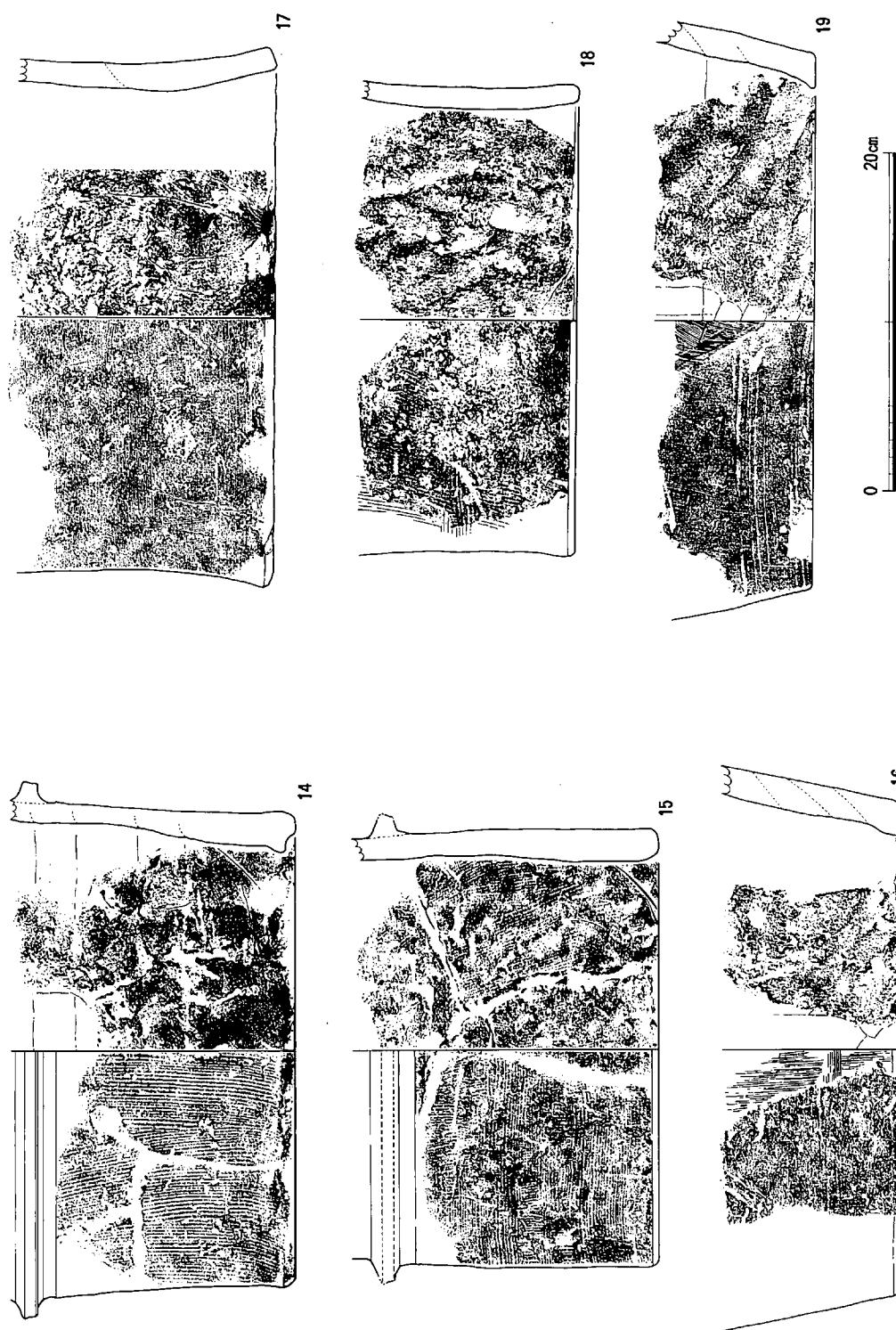
11



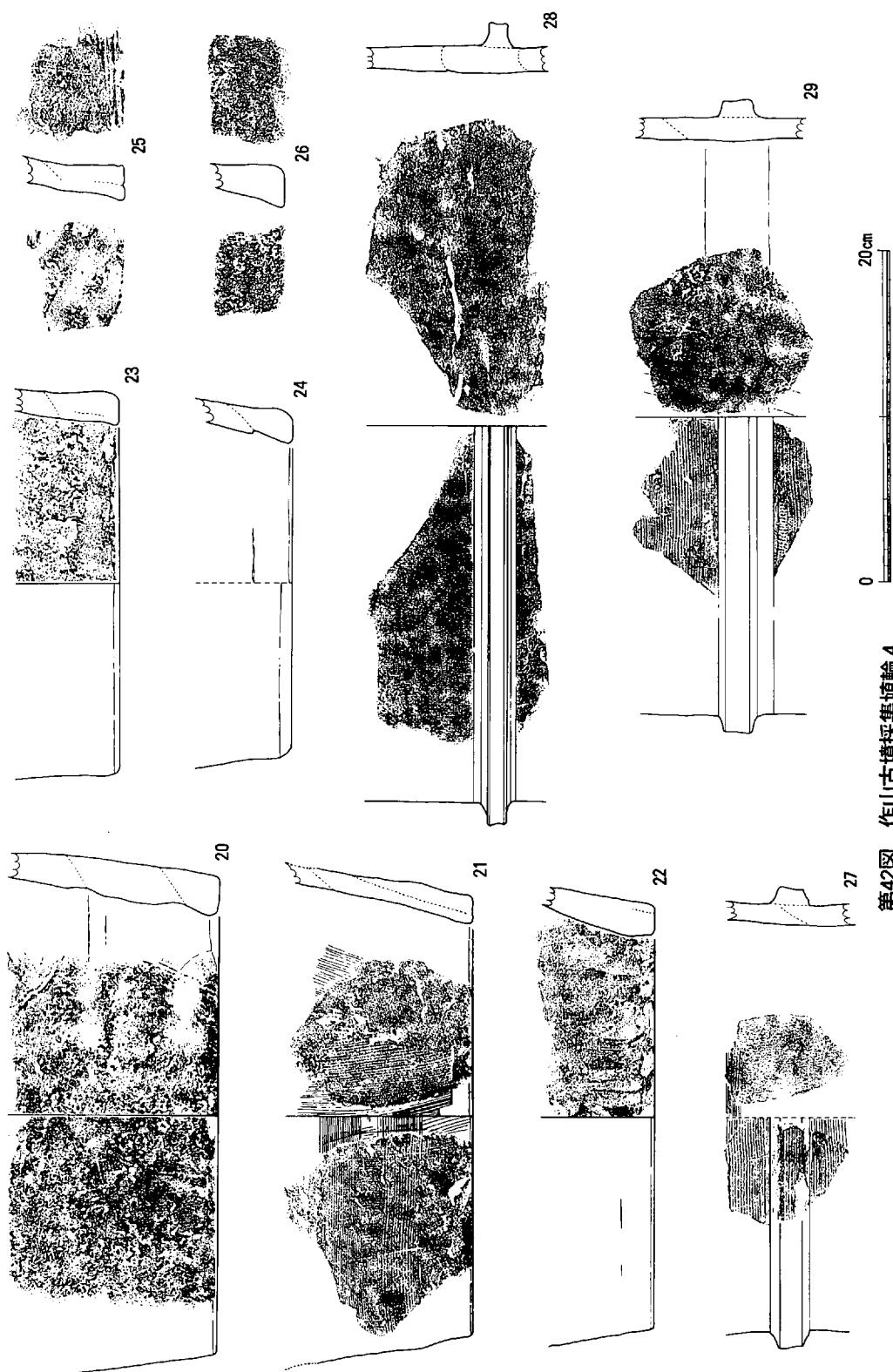
9



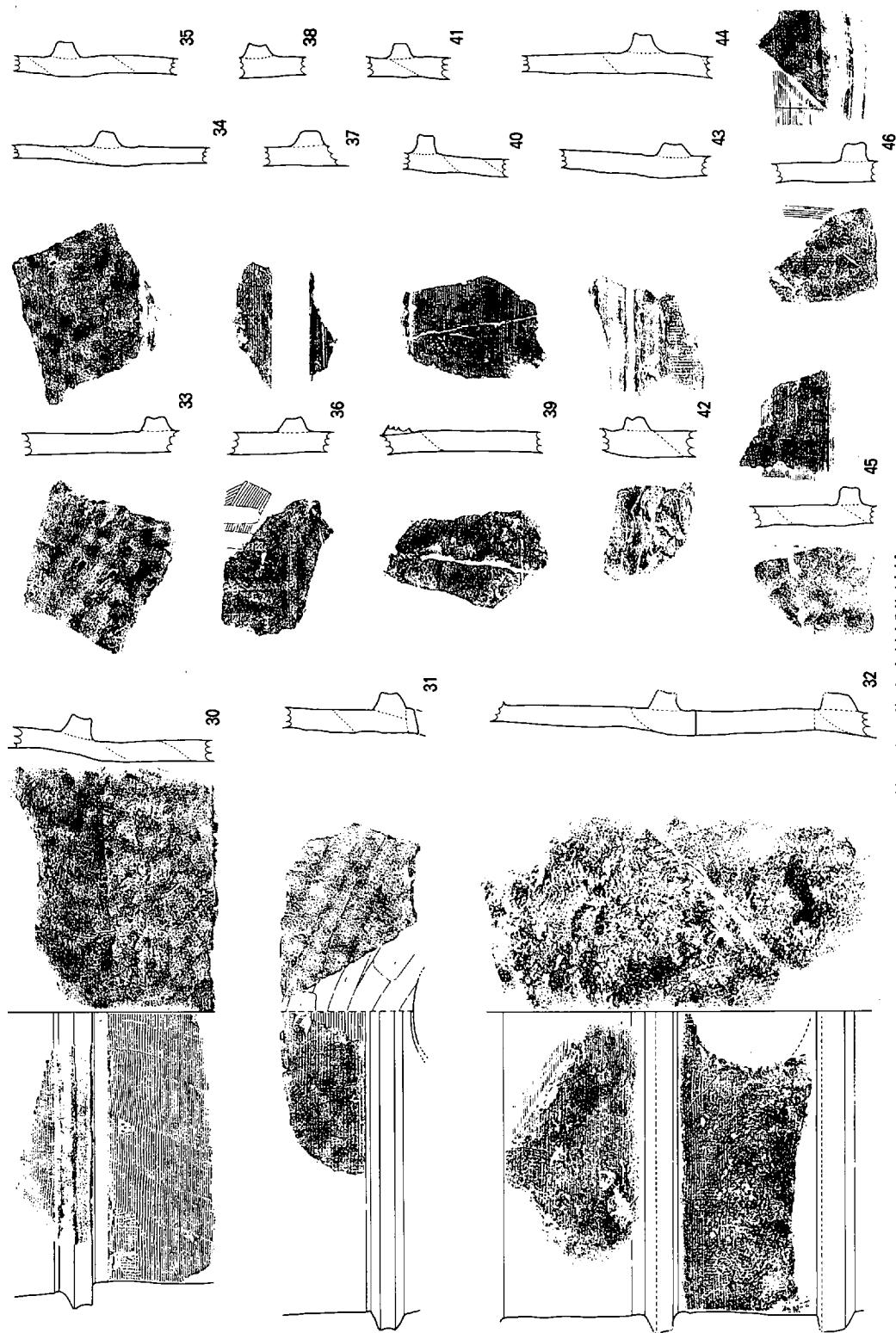
第41図 作山古墳採集埴輪3



第42図 作山古墳採集埴輪4



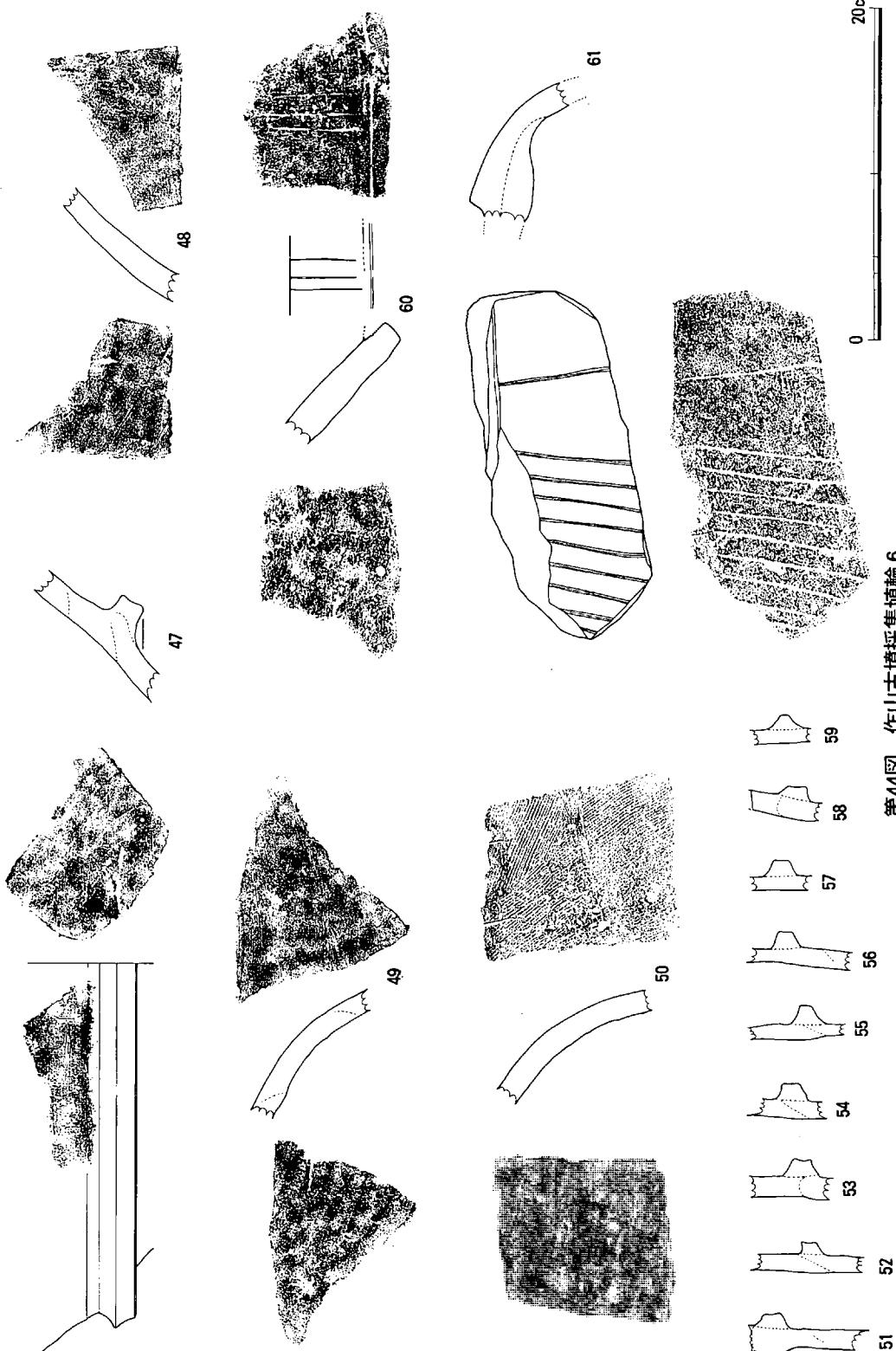
第43図 作山古墳採集埴輪5



第44図 作山古墳採集埴輪6

20cm

0



通常で、42のタテハケに終わるのは例外的である。外面のハケ密度は、28が18～19本・45が15本/1cmと細かいが、このほかはすべて10本以下と粗い。また、32の工具幅は段幅いっぱいの8cmでかなりひろい静止線スパンをとるが、30の工具幅は6.5cmで静止線スパン2.5～3.5cmと小刻みなものもある。内面の調整は、ユビナデないしナデが多く、タテハケもわずかに認められる。内面のタテハケ密度も外面のヨコハケ同様に10本/1cm以下と粗く、同じ工具によるものと思われる。

タガは、方形と台形を主とし、上辺を「M」に凹ましているものが多い。突出度は方形が72.2～52.4、台形が60～38.1となり、50～60で重なってくることから中間形態を抽出する必要があろう。上辺をヨコナデて「M」にする調整が多い中、27のヨコハケや11の板ナデによる調整がわずかながらに認められる。

スカシは31・32・58に残されており、32が直径7.3cmの円形となるものの、1段に穿たれる数やその位置等は不明である。8は2段目まで残るがスカシをもたないことから3段目以上に穿たれたものか。

焼成は、明らかに須恵質となるものはないが、かなり硬質のものがある。また、17などには黒斑が認められる。

47～50は朝顔形埴輪である。47はタガ径44.8cmで、タガの上辺1.2・下辺2.6・高さ1.7cm・突出度65.4を測る。調整は、内外面ともヨコナデで、さらに朱を乱雑にハケ塗りする。48もタガを残さないものの47と同じ部位であり朱を表面に塗っていないばかりか、外面をタテ、内面をナナメとするハケ調整を行っている。そのハケ密度は18本/1cmとかなり細かいものである。49・50は肩部になる。どちらも外面にハケ調整を行うが、50の8本に対して49は倍の15本/1cmである。内面はどちらもユビナデ痕が顕著に認められる。

60・61は形象埴輪。60は蓋の笠部分と推定される。外面に横2条の沈線を引き、その間に縦3本の沈線と縁に何らかの貼り付けを行っている。小片のため、その装飾単位は不明。外面には朱を塗る。62は肩鎧と推定される。縦に多くの沈線がひかれており、帯状の鉄板を内湾させて何段にも重ねたその合わせ目を表現したものか。また、1条間隔の開いた沈線については頸鎧との重なり表現であろうか。

小結 これまで作山古墳の埴輪資料については、春成秀爾氏の論考⁽⁵⁾にまとめた点数が掲載されたのみで、岡山県史などもその性格上掲載される点数がすくないことなどから、詳細の不明な部分があったであろう。しかも、埴輪のより厳密な検討を進めていくには、できるだけ多くの資料を必要とする。そこで今回、教育委員会と個人とで所蔵している埴輪について報告し、より精緻な検討が今後なされることを望む。しかし、報告した埴輪はいずれも小片ばかりであり、径1/2以上のものも採集されてはいるが、その大部分は基部を残すのみで、全体の形を

うかがうこととはかなわない。以下に、春成氏の報告もふまえて、若干のまとめをしたい。

円筒埴輪の口縁部は、ほぼ水平に仕上げられており、その端部の（内）外面と端面をヨコナデて凹ますものが圧倒的に多い（1・2・春成1）。口径は、25cmを境に大・小を考えたが、春成2が37cmとやや大きくなることから、30cmあたりにその境を修正すべきであろうか。調整は、外面をヨコハケとするのがほとんどで、タテハケにおわるものはほとんどない（6・春成1）。内面は、タテ（ナナメ）ハケのほか、ナデ、ヨコハケ（春成3）とバラエティーに富む。

段部は、ほぼ垂直になるものと上に開いていくものとがあるが、今回の報告資料には後者の例はない（ただし、10と、外に開いていく基部が後者の例となるものか）。径は、25.4～37.4の平均32.9cmとなるが、36.5・30・26cmの各前後に集中している。調整は、外面が2次調整のヨコハケ、内面がナデとなるものを基本とするが、例外的に外面を1次調整のタテハケにおわらさせているものがある（42）。この42は第1タガ以下の破片になる可能性もあり、2段より上の外面をタテハケでおわらせるものが確実に存在することは確定できないが、灰褐色を呈した硬質の埴輪であることから、多くの黄褐色系の埴輪とは実に対照的である。

基部は、段部と同様に2形態ある。傾向としてはほぼ垂直となるものがやや多い。「底部から第1突帯の中心までの距離は、9.6～9.2センチメートルのaグループ（6例）と14.5～13.3センチメートルのbグループ（3例）とに分かれれる」⁽⁵⁾ように、今回の報告でも底部－第1タガ間の平均10.6cmのaグループ（10.5～10.9cmの3例）と平均14.3cm（13～16cmの4例）のbグループとが認められる。さらに、新たにcグループとして、第1タガを残さないが現存15cm以上となるもの（13・17）があり、おそらく18cm前後に復元が可能か。外面調整は、タテハケのものとヨコハケのものとがあり、ややヨコハケの例が多い。ほかに、板状工具によるナデ上げのもの（8・11）やナデのものもあるが、量的には少ない。ハケ状工具の幅は、4～5cmの例が多く、aグループの8cm前後で1回の調整といわれる状況は、工具幅6cmを測るもの（21）以外、不明である。また、bグループの4～5cm前後で1～2回の調整については、今回新たに分けたcグループも同様にその状況がうかがえる。そして工具幅の広いものが、その調整単位のスパンも短いようである（19・30）。内面の調整は、ナデ、ユビナデ、タテハケとバラエティーである。

タガは、上辺0.9前後・下辺2.1前後・高さ0.9cm前後の台形が多いが、突出度の高い方形タガもある（14・15・春成9・春成15）。また、第1タガの上辺を板ナデするものも今回1点（11）であるが採集されている。

スカシは、いずれも円形となろうが、どの段の穿孔かは2段目に残る1例（春成14）以外、不明である。

焼成は、明瞭な黒斑をもつものは少なく（20・春成23）、黄褐色を呈するものが多い。

円筒埴輪以外については、今回の資料を含めて蓋が3点、肩鎧が1点である。蓋は、造山古墳と比較してやや装飾性に欠けるもの。また、肩鎧自体は、頸鎧などとともに短甲の附属品で、短甲の生産組織が確立し量産化を可能とした長方板革綴短甲の出現によってもたらされたものとされているから、この肩鎧にともなった短甲がどの形式で、かつ革綴なのかあるいは鉢留なのか、非常に多くの問題を残している資料となる。今後、短甲部分の形象埴輪片が採集されることを大いに願う。

以上報告した埴輪については、その時期をはじめこれまでの評価と何ら変わるものではなく、肩鎧も短甲形埴輪の存在を示すのみで、より限定的な埴輪の時期を推定することにはならなかつた。また、墳丘の規模等について、発掘調査が当分なされない現状であるから新たな見解を示すこともできなかつた。

番号	部位	残部	法量 * 1 (cm)	調整	外 面 内 面 (ハケ密度 * 2)	タガの 形 状	色 調	備 考
1	口縁部	1/10	口径 31.8		タテハケ (?) → ヨコハケ (7) + ヨコナデ ナナメハケ (右・7) + ヨコナデ		明黄褐色	
2	口縁部	1/6	口径 24.6		タテハケ (?) → ヨコハケ (5) + ヨコナデ ナナメハケ (5)		赤橙色	「岡山県史」 図 351-1
3	口縁部	小片			ヨコハケ (9) + ヨコナデ タテハケ (9) + ヨコナデ		黄褐色	
4	口縁部	小片			ヨコハケ (8) + ヨコナデ タテハケ (9) + ヨコナデ		黄褐色	
5	口縁部	1/10	口径 29		— —		褐色	
6	口縁部	1/12	口径 (32.4)		ナナメハケ (左・7) ヨコナデ ナデ?		暗褐色	
7	底～ 段部	1/6	底径 34.2 タガ径 (39.8) タガ (1.9)・2.7・(1.5) 底-タガ 10.5		ヨコ方向ナデ ナデ	台形	黄褐色	「岡山県史」 図 352-5
8	底～ 段部	完存	底径 33.4～34.6 第 1 タガ径 38～39.2 第 2 タガ径 37.3～38.5 第 1 タガ 1.5・2.3・1.3 第 2 タガ 1.0・2.3・0.8 底-タガ 13		底-板ナデ、ヨコナデ ユビナデ 第 1 段 — ナデ	台形 偏台形	黄褐色	
9	底～ 段部	1/2	底径 33.4 タガ径 33 タガ 0.7・2.0・0.8 底-タガ 12.8		ヨコハケ?、ヨコナデ? ユビナデ	台形	淡黄褐色	
10	底～ 段部	1/3	底径 31.8 タガ径 39.6 タガ 1.1・1.7・1.1 底-タガ 10.5		ヨコハケ? (10) ユビナデ	台形	黄褐色	
11	底～ 段部	1/8	底径 30.8 タガ径 33.8 タガ 1.5・2.2・0.9 底-タガ 10.9		板ナデ + ヨコナデ ユビナデ	台形	暗褐色	「岡山県史」 図 352-6
12	底 部	1/6			タテハケ (7) ナデ		暗褐色	工具幅 3.5
13	底 径	1/4	底径 39.6		タテハケ (10) → ヨコハケ (12) ユビナデ + タテハケ (8)		褐色	
14	底～ 段部	4/5	底径 26.6 タガ径 31～32.6 タガ 0.7・1.6・1.0 底-タガ 15.7		タテハケ (5)、ヨコナデ ユビナデ、ナデ	M台形		
15	底～ 段部	完存	底径 23.2～27 タガ径 (27.8) タガ (0.8)・1.8・(1.2) 底-タガ 16		ヨコハケ (7) → ヨコハケ (7)、ヨコナデ	台形		工具幅 5.4ス パン 4.5

16	底 部	1/10	底径 28.4	タテハケ(10)→ヨコハケ(10) ユビナデ		褐 色	
17	底 部	1/4	底径 30.0	タテハケ(11)→ヨコハケ(12) ユビナデ + ナデ		褐 色	工具幅5
18	底 部	1/8	底径 27.5	タテハケ(5)→ヨコハケ(5) ユビナデ		暗褐色	
19	底 部	1/8	底径 31.2	タテハケ(13)→ヨコハケ(?) ユビナデ		褐 色	「岡山県史」図352-2 工具幅4.5
20	底 部	1/3	底径 28.6	タテハケ(10)→ヨコハケ(?) ユビナデ + ナデ		淡橙褐色	黒斑
21	底 部	1/8	底径 26.4	タテハケ(7)→ヨコハケ(7~9) タテハケ(7)		黄 褐 色	「岡山県史」図352-3 工具幅6・スパン3
22	底 部	1/8	底径 25.6	? タテハケ(8)+ユビナデ		淡黄褐色	
23	底 部	1/4	底径 22.2	? ユビナデ		褐 色	
24	底 部	1/12	底径(19.9)	? ナデ		褐 色	
25	底 部	小片		タテハケ(13) ヘラナデ		赤 橙 色	
26	底 部	小片		タテハケ(?) ナデ?		褐 色	
27	タガ部	1/12	タガ径(28.0) タガ1.3・2.4・1.0	ヨコハケ(7)、ヨコナデ ヨコハケ(7)+ナデ	M台形	暗褐色	
28	タガ部	1/6	タガ径 48.6 タガ0.9・1.8・1.3	タテハケ→ヨコハケ(18~19) ユビナデ	M台形	黄 褐 色	朱塗
29	タガ部	1/10	タガ径 38.2 タガ1.4・2.3・1.0	タテハケ(6)→ヨコハケ(8)、ヨコナデ ユビナデ	M台形	淡褐色	
30	タガ部	1/6	タガ径 36.4 タガ1.1・2.3・1.3	タテハケ(6)→ヨコハケ(8)、ヨコナデ ユビナデ+ヨコハケ?	M方形	暗褐色	工具幅6.5・スパン3
31	タガ部	1/15	タガ径(39.2) タガ1.0・2.0・1.2	タテハケ(6)→ヨコハケ(7)、ヨコナデ ヘラナデ	M台形	明橙褐色	朱塗 工具幅4.5以上
32	タガ部	1/3	上タガ径(39.6) タガ1.0・2.1・1.2 下タガ径39.4 タガ1.3・2.3・1.0 タガ間10.5	ヨコハケ(8)、ヨコナデ ナデ	M方形 M台形	黄 橙 色	工具幅8・スパン10 スカシ径7.3
33	タガ部	小片	タガ1.0・1.9・0.8	タテハケ(13)→ヨコハケ(13)、ヨコナデ ユビナデ	M台形	黄 褐 色	
34	タガ部	1/6	タガ径 34.6 タガ0.7・2.0・0.9	ヨコハケ(?)、ヨコナデ ユビナデ?	台 形	暗褐色	
35	タガ部	1/10	タガ径 31.0 タガ0.8・1.9・0.8	? ユビナデ	M台形	黄 褐 色	
36	タガ部	小片	タガ 0.8・1.9・0.8	ヨコハケ(8)、ヨコナデ ナメハケ(9)+ユビナデ、ヨコナデ	M台形	褐 色	
37	タガ部	小片	タガ 0.9・2.0・0.8	ヨコハケ(4~5)、ヨコナデ ナデ	台 形	黄 褐 色	
38	タガ部	小片	タガ 1.0・2.0・0.8	ヨコハケ(6)、ヨコナデ ユビナデ + ヨコナデ	M台形	黄 褐 色	硬質

39	タガ部	小片	タガー・1.9・-	タテハケ (?) → ヨコハケ (10) ユビナデ	-	褐色	硬質
40	タガ部	小片	タガ 0.8・1.7・1.1	ヨコハケ (13)、ヨコナデ ナデ	M方形	淡褐色	
41	タガ部	小片	タガ 0.7・1.4・0.8	? ナデ?	方 形	淡褐色	
42	タガ部	小片	タガ 1.0・1.7・0.8	タテハケ (6)、ヨコナデ ナデ	M台形	灰褐色	
43	タガ部	小片	タガ 1.1・2.1・0.8	ヨコハケ (6)、ヨコナデ ナナメハケ (7) + ヨコナデ	M台形	黄褐色	
44	タガ部	1/6	タガ径 30.0 タガ 0.9・2.1・1.1	? ?	M方形	褐色	
45	タガ部	小片	タガ 0.8・1.6・1.1	ヨコハケ (15)、ヨコナデ タテハケ (9) + ユビナデ	M方形	褐色	
46	タガ部	小片	タガ 0.9・1.7・1.1	ヨコハケ (8)、ヨコナデ タテハケ (9)	M方形	淡褐色	
47	壺 部	1/10	タガ径 44.8 タガ 1.2・2.6・1.7	ヨコナデ? ナデ?	M方形	黄褐色	朱塗
48	壺 部	小片		タテハケ (16) ヨコハケ (18)		褐色	
49	肩 部	小片		タテハケ (15) → ヨコハケ (15) ユビナデ		褐色	
50	肩 部	小片		ナナメハケ (左・7~8) ユビナデ		淡褐色	
51	タガ部	小片	タガ 0.9・2.1・0.8	? ユビナデ + ヨコナデ	M台形	淡赤褐色	
52	タガ部	小片	タガ 0.9・1.5・1.0	? ?	M方形	黄褐色	
53	タガ部	小片	タガ 0.9・2.2・1.1	ヨコハケ (10)、ヨコナデ ナデ?	M台形	淡褐色	
54	タガ部	小片	タガ 0.9・2.0・1.0	ヨコナデ タテハケ (7)	M方形	褐色	
55	タガ部	小片	タガ 0.6・2.2・1.1	? ナデ?	台 形	暗褐色	
56	タガ部	小片	タガ 0.8・1.9・1.1	ヨコナデ ナデ	M方形	黄褐色	
57	タガ部	小片	タガ 0.8・2.1・1.0	ヨコナデ? ナデ?	台 形	褐色	
58	タガ部	小片	タガ 1.0・2.1・0.8	ヨコハケ (5)、ヨコナデ ヨコナデ	M台形	黄褐色	
59	タガ部	小片	タガ 0.5・2.1・0.8	ヨコナデ ナデ?	台 形	褐色	
60	蓋 ?	小片		ナデ → 沈線 ナデ		黄褐色	朱塗
61	肩鑓 ?	小片		ナデ? ユビナデ			

* 1 タガは上辺・下辺・高さの順

* 2 ハケの密度は 1 cm での本数

第11表 作山古墳採集埴輪観察表

(3) 宿寺山古墳

位置 総社平野の南縁には近畿と九州とを結ぶ陸路の大動脈として、近世～古代の山陽道が通じていた。そして古代以前に遡る古道も同様なルートを通っていたであろう。この推定される古道に沿って、南側には宿寺山古墳が、北側には作山古墳が築かれ、ほかにも岡山県下最大級の方墳となる角力取山古墳もある。また、平野を違えてはいるが造山古墳等もこの古道に沿っていたものと推定でき（第3図）、時代は下るが国分僧・尼寺が建立されるようになり、かなり重要視されてきた地域なのであろう。

墳丘 古墳は、約118～120cmの前方後円墳で、墳丘の周囲には幅23～24mの盾形の濠を築いている。後円部径約64ないし^(5・7)75・高10m以上、前方部幅62・高8.5mを測り、2段築成の墳丘と北側に造り出しがあり、すべて土盛りによって築かれたものらしい。しかし、土取りや家の建替え等によりかなりの変形を受けており、さらには墳丘測量がこれまでまったく行われていないこともあり、積極的に墳丘の復元はできそうにない。本墳は山手村に所在するものの、葛原克人氏採集の埴輪があり、総社平野における埴輪の時期的变化をとらえるうえで重要な古墳となることからここに報告する。

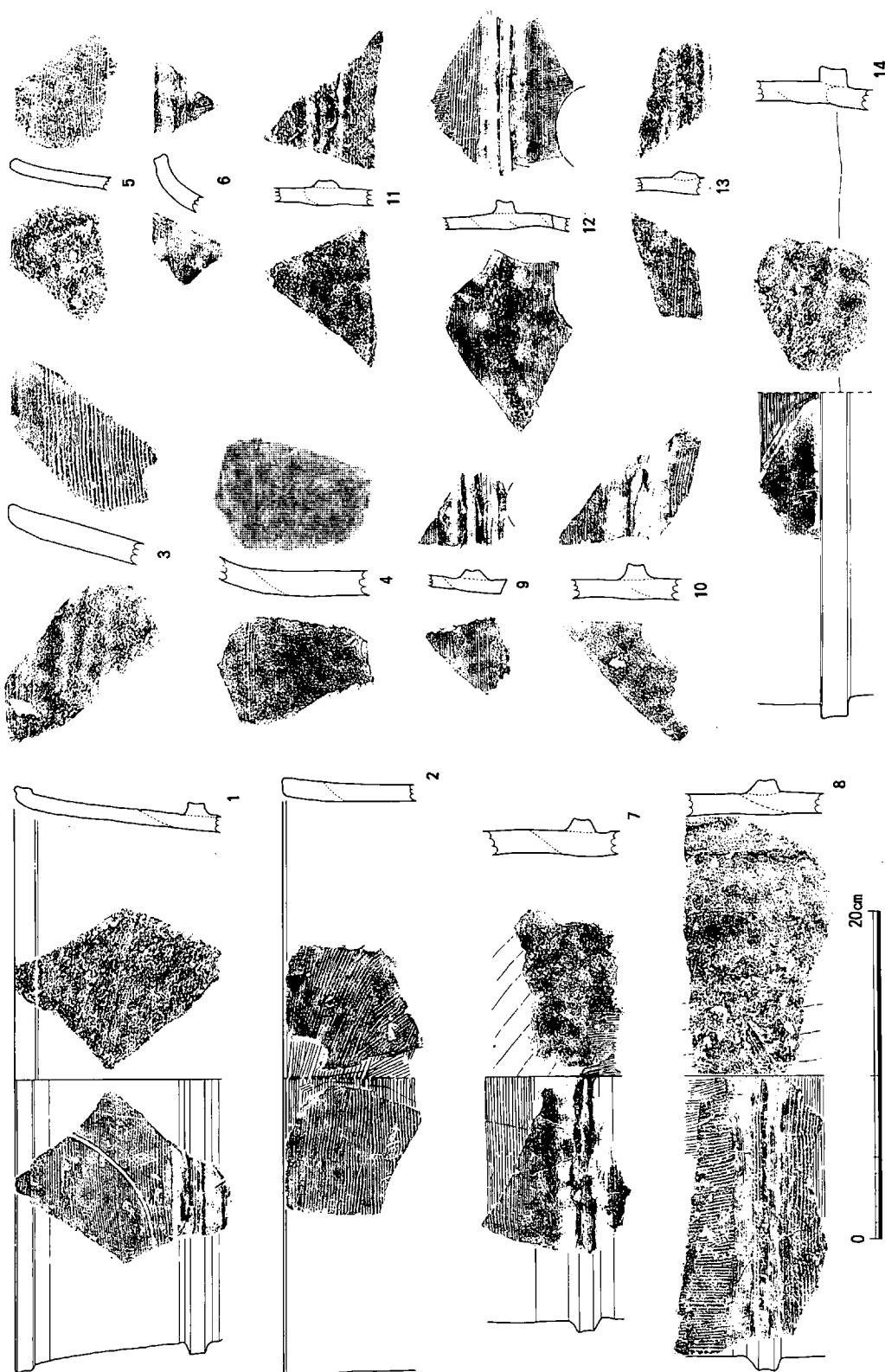
埴輪 円筒埴輪には、朝顔形もあるが、いずれも小破片である。ほかに形象埴輪が1点出土しているが、何を模しているのか不明。

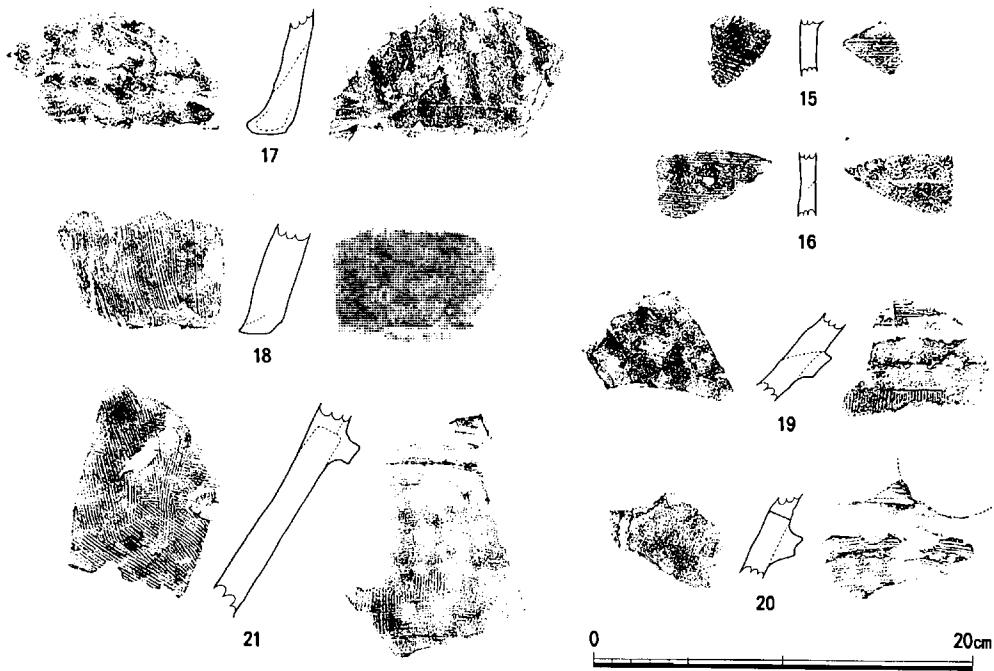
円筒埴輪の口縁部には、端部が直立する1、わずかに外反する4～6、大きく外反する3、拡張する2がある。このうち口径の復元できるものは1と2で、(35.4)・(36.4)cmを測る。点数的にとらえると、かるく外反するタイプが円筒埴輪の主流となるが、本墳に樹立された円筒埴輪を特微づけているのは2のタイプである。さきに本報告の付載2「小造山古墳の埴輪について」でもまとめているように、そのすべてではないだろうが、川西編年IV期を中心として口縁端部に貼り付けの突帯をもつ埴輪は畿内系円筒埴輪として、その製作には畿内の工人あるいは技術者が導入・派遣されていたものであろう。ただし、2が確実に粘土帯を貼り付けているものでなく口縁端部の拡張による突帯であると観察されることから、金蔵山古墳の系譜に通じる可能性もある。しかし、周濠を築くという畿内的な古墳であることより一応畿内系埴輪と考えておこう。

基部は、19・20とも径を復元できない小破片であるが、端部がともに内側へ短く折り曲げていることから、同タイプと推定される。底径は計測できないが、口径同様にその規格は一つであつただろうか。しかし、調整においては19が内外面ともユビナデ、20が内外面ともタテハケと、まったく異なっており、いくつかのサブタイプが作られている。

段部は、その99%が外面に2次調整のヨコハケを施している。1点、9のみがタテハケとヨ

第45圖 宿寺山古墳採集埴輪 1





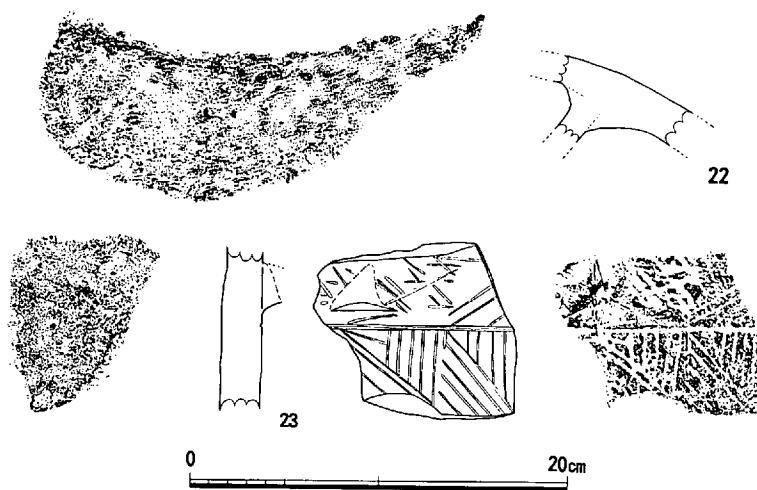
第46図 宿寺山古墳 採集埴輪2

コハケが混在しているけれども、タテハケが第1段（基部）、ヨコハケが第2段と推定されることから（作図は上下を反対にして報告しているが）、第2段目以上についてはすべてヨコハケ調整であったといえる。つまり、第1段（基部）では、2次調整のヨコハケはすべて省略されるものとなる。内面の調整については、ヨコハケ、ナデ、ユビナデなどがある。

タガは、断面方形のものもいくらかあるが、低い台形のものが明らかに多い。しかも、上辺はヨコナデで「M」状に凹ませているものばかりである。この傾向は方形のタガも同じである。タガの突出度は、M方形が48.6、M低台形が28.8である。タガ径は、7が31.4・8が(19.8)・9が36cmを測り、9のタガは方形であることから朝顔形の可能性があり、結果として径30cm前後の大型と20cm前後の小型と、2種類の円筒埴輪が作られたものだろうか。

色調は、黄褐色ないし赤褐色となるものが多いが、12のみ淡灰色を呈しており、焼成も須恵器そのものである。また、黒斑を呈すものはまったくみられない。

15・16・21は朝顔形埴輪として報告しているが、15についてはタガが低台形であること、16についてはタガのほかにスカシが開けられていることから、朝顔形ではなく通常の円筒埴輪とも考えられる。小片のために作図において傾きを間違えているものであろうか。21は、タガの突出度52.6と高く、断面も方形となることから、古いタガ形態を残存させることの多い朝顔形で間違いないであろう。しかし、内外面ともハケ調整が施され、とくに外面ではタテハケの



第47図 宿寺山古墳 採集埴輪 3

ちヨコハケと、まったくナデ調整がなされておらず、調整の省略がうかがえる。ハケ密度はタテハケ8本・ヨコハケ14本/1cmと工具は異なるものである。

22は、蓋の笠部と筒部の結合部片である。小破片であるため、装飾はまったく確認されないが、もともと省略されていたものであろうか。

23は、形象埴輪であるが、何を模しているのか不明である。家形埴輪片であろうか。外面には、貼り付け突帯の一部とその接合強化のためのヘラによる線彫り以外に、横1条の沈線とその下に5条ごとで方向の互い違いとなる斜線が彫られており、かすかに貼り付け突帯の横にも同様な横沈線と斜線が残されていることから、かなり装飾的な形象埴輪であったものと推定される。

小結 作山古墳同様に、宿寺山古墳についてもまとまった埴輪の報告は春成秀爾氏によるもの⁽⁵⁾以外にはない。ここでもそれをふまえて若干のまとめをしたい。

円筒埴輪の口縁部には、端部を拡張しているもの（2・春成1）や、大きく外反するもの（3）があるが、直立ないしやや外反するもの（1・5）が主流であろう。口径の測定できるものからは35~36cm前後ののみとなるが、後述するように25cm前後のものが存在するはずである。

段部は径20cm前後のもの（7）と30cm前後のもの（9）の大・小2種類を確認しており、この大型よりさらに大きいもの（8）についてはタガの形状から朝顔形埴輪片になるものと推定した。春成氏も段部の径については大・小の存在を報告し、かつ大型には形象埴輪片が含んでいることを示唆している。点数的には小型が少ないようにみうけられる。

基部は、底径の不明な小片がわずかに2点であるが、口縁・段部同様に大・小の存在が予想でき、春成氏が報告している通りであろう。点数的には大・小の差は認められないようである。

調整は、基部（第1段）の外面はすべて1次調整のタテハケにおわり、ヨコハケを認めるものはない。第2段以上については、2次調整のヨコハケが必ず施されており、ハケ工具の幅はかなり広いものである。ただし、例外的に口縁部の外面でタテハケにおわるもの（春成2）がある。

タガは、低く、かつ上辺をヨコナデて「M」状にした台形のみである。一部に突出度の高い

番号	部位	残部	法量 * 1 (cm)	調整	外 面 内 面 (ハケ密度 * 2)	タガの 形 状	色 調	備 考
1	口縁部	1/12	口径(35.4) タガ径33.8 突帶径35.8 突帶-タガ10.7		ヨコハケ(9) ヨコハケ(8)		黄褐色	工具幅7 静止線5.5
2	口縁部	1/12	口径(36.4)		ヨコハケ(7) ナナメハケ(左・6)		黄褐色	
3	口縁部	小片			ヨコハケ(5) + ヨコナデ ユビナデ		赤橙色	
4	口縁部	小片			タテハケ(13) + ヨコナデ ナナメハケ(右・12) + ヨコナデ		淡赤褐色	
5	口縁部	小片			ヨコハケ(8) + ヨコナデ ナデ		褐色	
6	口縁部	小片			タテハケ(11) + ヨコナデ ヨコハケ(10) + ヨコナデ		灰橙色	
7	口縁部	1/8	タガ径(19.8)		タテハケ(9)→ヨコハケ(7) + ヨコナデ タテハケ(8)→ユビナデ	M台形	褐色	
8	タガ部	1/5	タガ径36.0		タテハケ(6)、ヨコハケ(6) ユビナデ	M台形	淡褐色	静止線6
9	タガ部	小片	タガ0.7・1.8・0.6		ヨコハケ(9) + ヨコナデ ヨコハケ(9) → ナデ	M台形	暗褐色	
10	タガ部	小片	タガ1.0・2.0・1.0		タテハケ(8)→ヨコハケ(8) + ヨコナデ ナデ	M方形	黄褐色	
11	タガ部	小片	タガ0.8・1.6・0.5		ヨコハケ(12)、ヨコナデ ヨコナデ	M台形	赤褐色	
12	タガ部	小片	タガ0.9・1.7・0.8		タテハケ(8)→ヨコハケ(8) + ヨコナデ ヨコハケ + ヨコナデ	M方形	淡灰色	静止線5 須恵質
13	タガ部	小片	タガ1.0・1.8・0.4		ナデ? ヨコハケ(8)	M台形	褐色	
14	タガ部	1/12	タガ径31.4		ヨコハケ(15)、ヨコナデ ハケ + ナデ	M方形	褐色	
15	段部	小片			ヨコハケ(9)、ヨコナデ ナナメハケ(6) + ナデ		淡褐色	
16	段部	小片			ヨコハケ(9) ナデ?		黄褐色	
17	基部	小片			ユビナデ + ナデ ユビナデ		黄褐色	
18	基部	小片			タテハケ(8) + 板ナデ タテハケ(11)		褐色	
19	タガ部	小片			ヨコハケ(9)、タテハケ(8) ユビナデ	M台形	褐色	
20	タガ部	小片	タガ1.0・2.3・0.9		ヨコハケ(7) ヨコナデ ナデ	M台形	赤褐色	スカシ径7.4
21	壇部	小片	タガ1.0・1.9・1.0		タテハケ(8) → ヨコハケ(14) ナナメハケ(8)	方形	黄褐色	
22	蓋	小片			ナデ ナデ		黄褐色	「岡山県史」 図97-2
23	家形	小片			ヘラガキ沈線 ユビナデ		淡赤褐色	「岡山県史」 図97-1

* 1 タガは上辺・下辺・高さの順

* 2 ハケの密度は1cmでの本数

第12表 宿寺山古墳採集埴輪観察表

方形のもの（8・21）がみられるが、おそらくタガの形状変化は朝顔形において遅れるものと推定されることから、8を朝顔形のタガ部と判断した。しかも21が方形であるのに、春成14・15のタガは低いM台形となっていることから、やや後出であろうか。

形象埴輪には、蓋のほかに、甲形や家形？が採集されている。詳細はまったく不明であるが、蓋の装飾は省略されているタイプのようにうかがえる。

焼成は、黒斑がまったく認められず、須恵質が確実に存在している（12）。

これらの状況から宿寺山古墳採集の埴輪は、川西編年IV期となる。

（4）まとめ

作山古墳は、岡山県下で第2位、全国的にみても第9位に並ぶ巨大前方後円墳で、県下第1位の造山古墳とともに、5世紀の吉備を物語るにはかかすことのできない遺跡である。これまで様々な論考に取り上げられてきたものの、発掘調査がまったくなされていないことや、詳細な測量図が作成されたのも近年であることなどから、第10表をはじめとしてその評価にもいくつかの違いが生じている。⁽⁹⁾ 墳丘各規模の数値については詳細測量図によりほぼ定まったと思われるが、前方部前端の剣菱形やくびれ部東側の造り出しなど、墳形論における見解は二分されたままである。同様に築造時期についても、資料的に恵まれなかった段階においては造山古墳と作山古墳とをほぼ同時期としたこともあったが、造山→作山の順序で築かれたことについては決定的であろう。しかし、それぞれの築造時期については、造山古墳を前Ⅲ期として広く押さえ、作山古墳を前Ⅲ期後半～前Ⅳ期前半とするような、⁽¹¹⁾ やや時期幅をもたせている論考が多い。これらのなかで葛原克人氏による積極的な築造時期の解明作業は、造山古墳を「前Ⅴ期およそ五世紀第1四半期」におさえて石津丘古墳と同時に、作山古墳を「前Ⅳ期ないし前Ⅶ期の初め、およそ五世紀の第2四半期ないし第3四半期の交わりのころ」とおさえて誉田御廟山古墳との平行関係を推定している。さらに、前方後円墳の消長に表現される前方後円墳時代、しかも「造山古墳とその時代」、「作山古墳とその時代」として積極的な評価を進め、あるいは畿内大王墓と造山・作山古墳との比較を通して、古墳規模の縮小化にある吉備と拡大化にある畿内の地域性から、造山古墳の時代が吉備の歴史の転換点とする評価もなされている。⁽¹²⁾⁽¹³⁾

いずれにせよ、造山・作山古墳の規模や築造時期、その時代背景を明らかにすることは、吉備の歴史そのものである。今回、墳丘の規模等に言及する新たな資料がないものの、春成秀爾氏の報告以降まとまっていなかった埴輪資料に関し、教育委員会や個人蔵の資料を報告することで、さらに精緻な埴輪の検討がなされ、さらにしばりこまれた築造時期や新たな歴史的解明を期待するものである。

また、宿寺山古墳は、県下第11位となる前方後円墳であり、墳丘の周囲には盾形を呈する幅

23～24mの濠をもつ。明治～大正時代に竪穴式石室3基が発掘され、鏡をはじめとして多くの副葬品が出土したと伝わる。⁽⁵⁾ 本墳が造山・作山古墳ではみられなかった周濠を有していることから、両宮山古墳とともに近畿の王陵をつよく指向した古墳として、また作山古墳に続く吉備の大首長墓として位置付けられてきた。それは造山古墳の時代が吉備の歴史の転換点として、それ以前の金蔵山古墳（備前）と佐古田堂山古墳（備中）とに表出される二つの勢力を統合し、その後墳丘の規模は縮小しつつも作山古墳の時代へと引き継がれたが、ふたたび両宮山古墳（備前）と宿寺山古墳（備中）とへ分極されたことを示しているものという。⁽¹¹⁾

墳形や埴輪の検討から、造山古墳→作山古墳への移行は定まったものであろうけれど、作山古墳→両宮山・宿寺山古墳への移行は両宮山古墳採集の埴輪がないことから築造時期がしばりきれておらず、従来どおり、両古墳とも前IV期前半～後半としてもその墳丘規模等の差は明瞭である。しかも、葛原氏により指摘された小造山古墳の築造時期は、⁽¹²⁾ 造山古墳より明らかに後出するもので、作山古墳と同時期か若干くだるころと示唆している。これについては付載2で検討したように、今回新たに採集された埴輪の時期などから小造山古墳は作山古墳よりわずかに後出するものと考えている。そうなると小造山古墳の墳丘規模は全長約135mであり、宿寺山古墳より15mも大きくなる。しかも、濠をめぐらせていることから宿寺山古墳同様に畿内的な古墳といえる。時期的には、埴輪や墳丘・周濠の比較検討から、小造山古墳→宿寺山古墳となり、両宮山古墳とも墳形などより小造山古墳が先行するものであろう。これまで両宮山・宿寺山古墳に表出される吉備の二極化や、造山・作山古墳両時代における総社市域の首長墓については再考すべき要因が今回の折敷山古墳、小造山古墳の調査で得られたものではないだろうか。

註1 総社市教育委員会『法蓮古墳群』総社市埋蔵文化財発掘調査報告2, 1985

” 『法蓮40号墳』総社市埋蔵文化財発掘調査報告4, 1987

2 西川 宏「吉備の王者とその舞台」(『古代の日本』第4巻, 中国・四国, 1970)

3 岡山県『岡山県史』考古資料, 1986

4 総社市史編さん事務局『総社市史』考古資料編, 1987

5 春成秀爾「造山・作山古墳とその周辺」(『岡山の歴史と文化』1983)

6 近藤義郎編『前方後円墳集成』中国・四国編, 1991

7 葛原克人「古墳時代前期」(『岡山県の考古学』1987)

8 葛原克人「大古墳」(『吉備の考古学－吉備世界の盛衰を追う－』1987)

9 第7表の小造山古墳墳丘規模表(P58)も同様に、詳細測量図が作成されたのはごく最近になってからである。それ以前においては、悪条件の中で墳丘の規模を測り、墳形を復元してきたもので、数値的なものはともかくとしてその認識において先駆的努力は大いに認められるべきものであろう。

10 註5・10に同じ

11 大橋雅也「山陽」(『古墳時代の研究』第10巻, 地域の古墳I, 西日本, 1990)

12 葛原克人「巨墳の造営」(『岡山県史』第2巻, 原始・古代I, 1991)

13 新納 泉「巨大墳から巨石墳へ」(『新版古代の日本』第4巻, 中国・四国, 1992)

図版 1



開発予定地全景（南西より）



開発地全景（西より）

図版 2

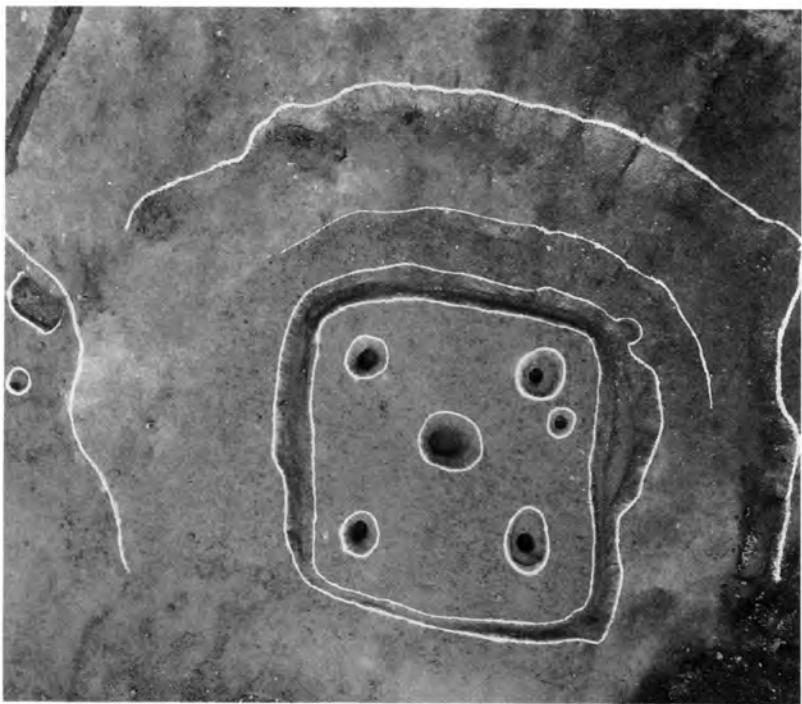


調査地全景（北西より）



折敷山遺跡全景

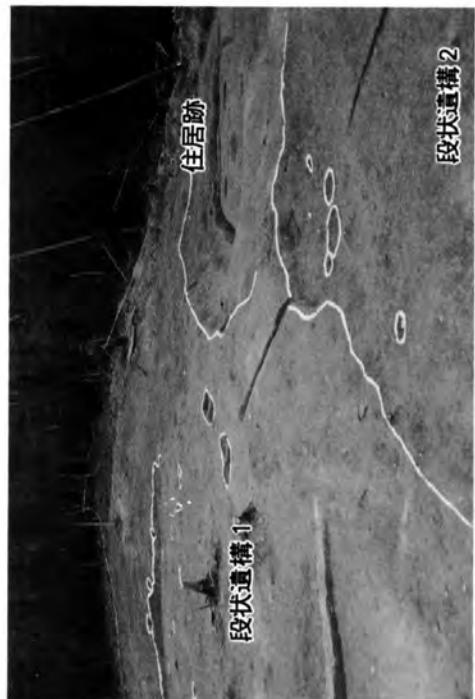
図版 3



住居跡全景

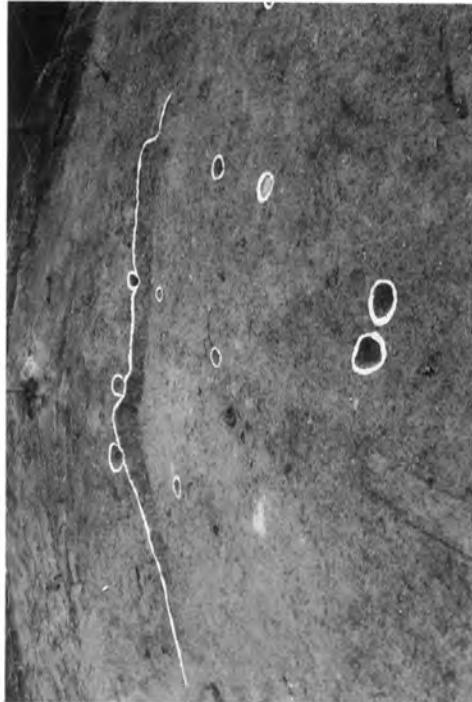


住居跡土層断面（西より）

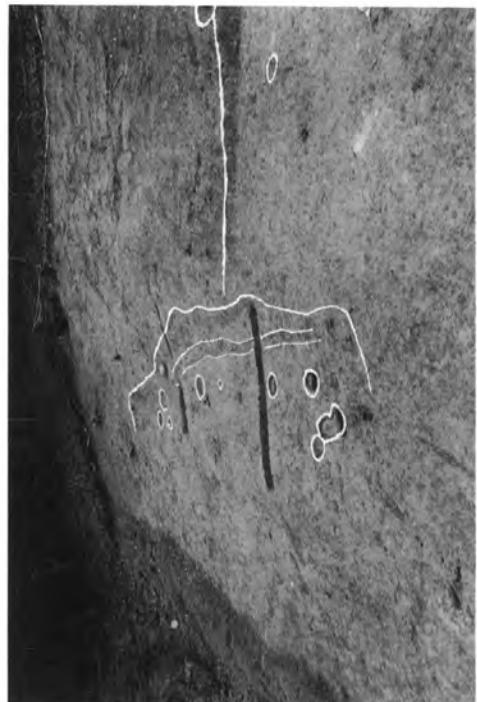


段状遺構と住居跡（西より）

図版 4



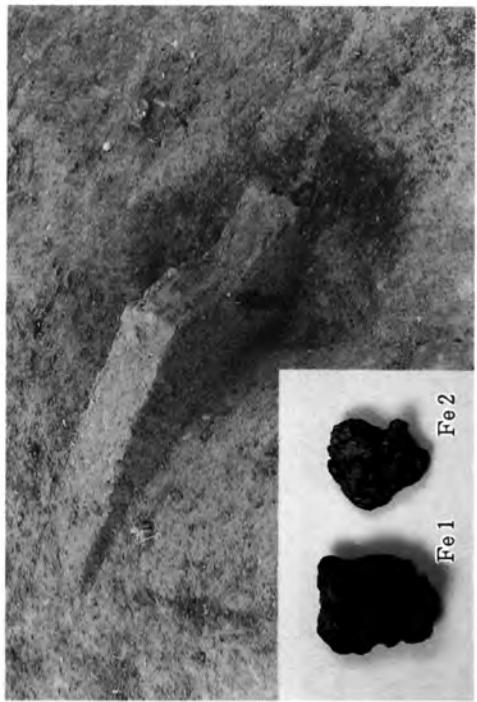
段状遺構 1（西より）



段状遺構 2（西より）



段状遺構 3（西より）

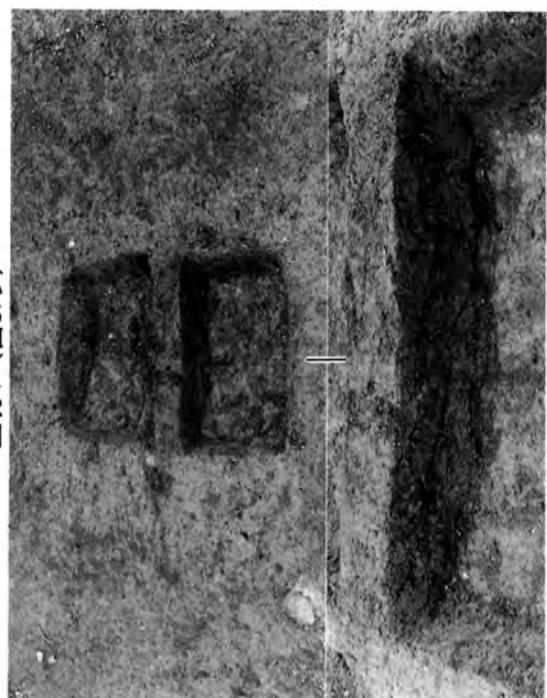


鍛冶炉（西より）

図版 5



土坑 1 (西より)



土坑 2

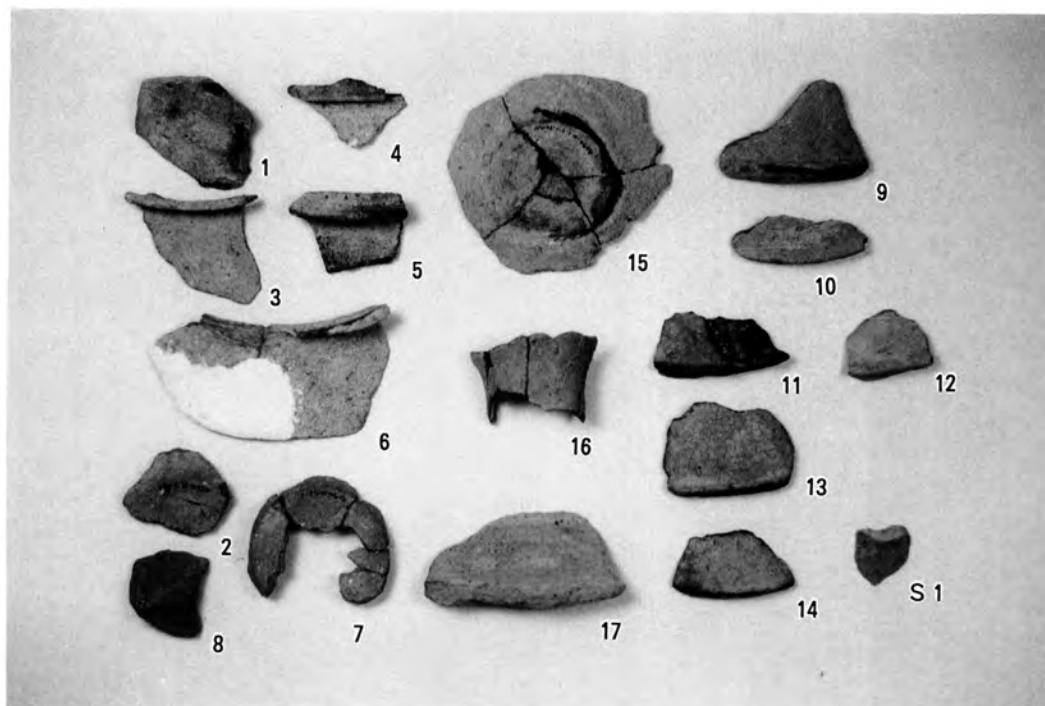


火葬墓 (西より)

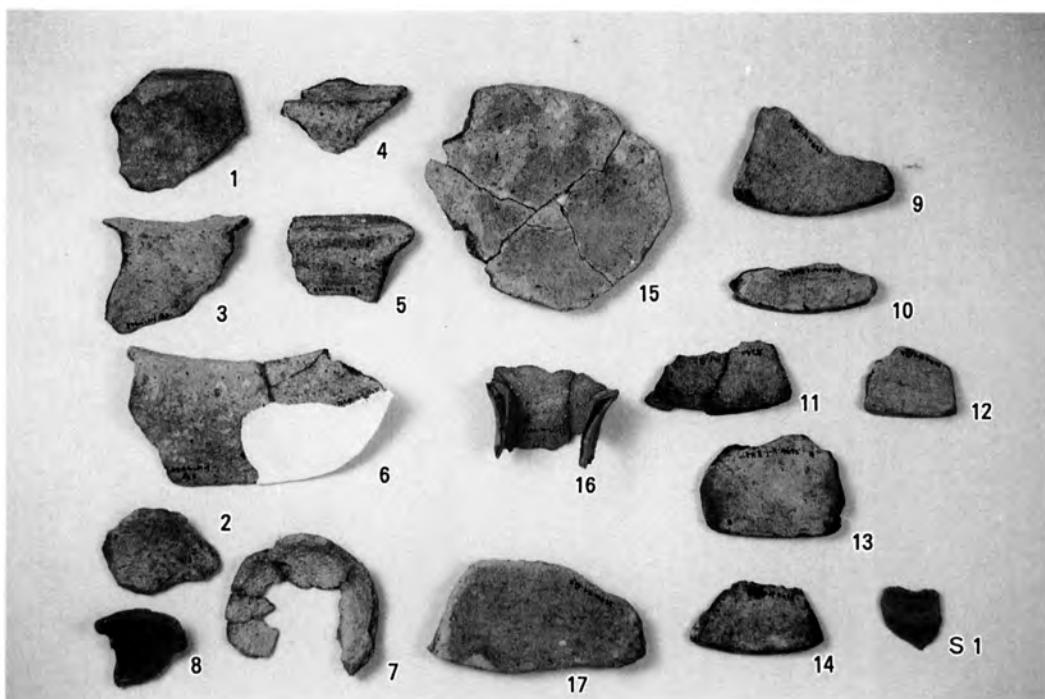


溝 (西より)

図版 6

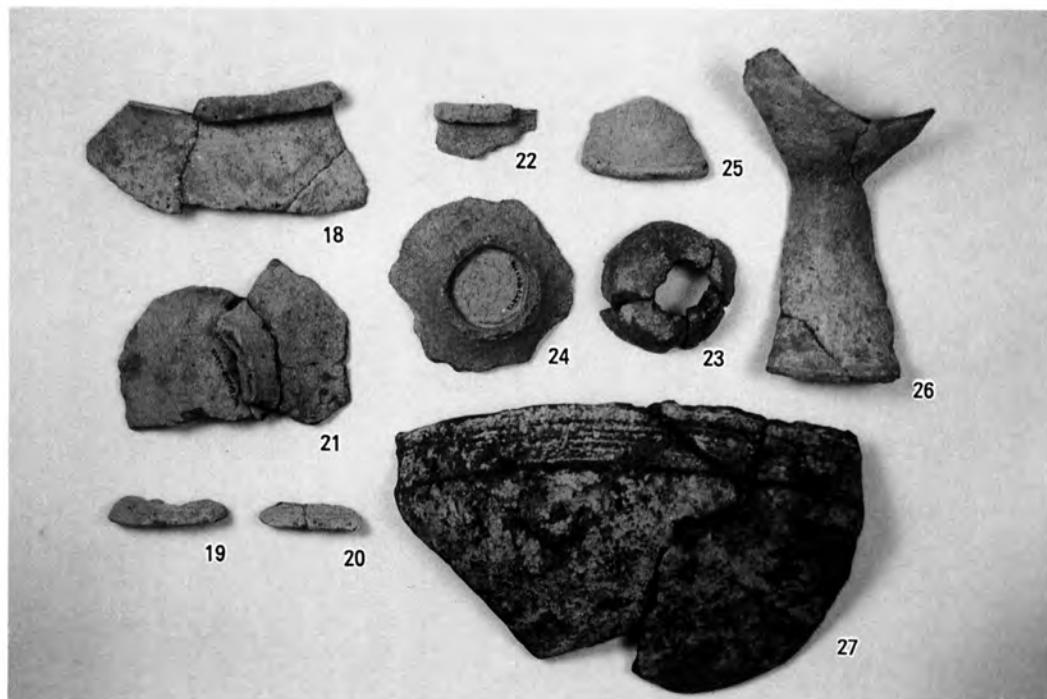


住居跡出土遺物（表）

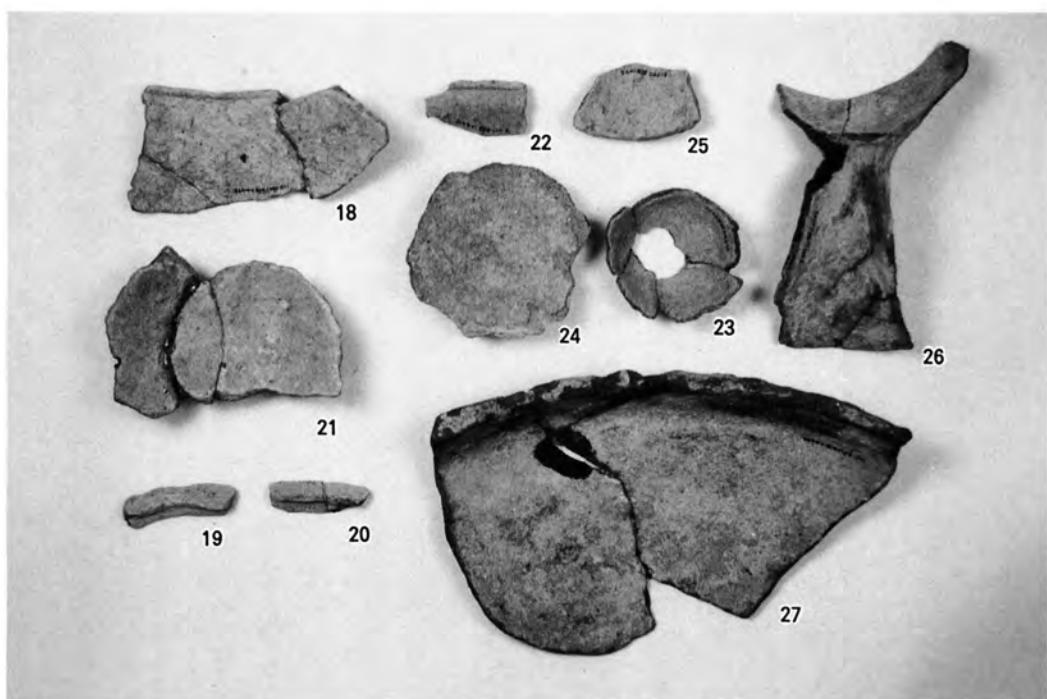


住居跡出土遺物（裏）

図版 7

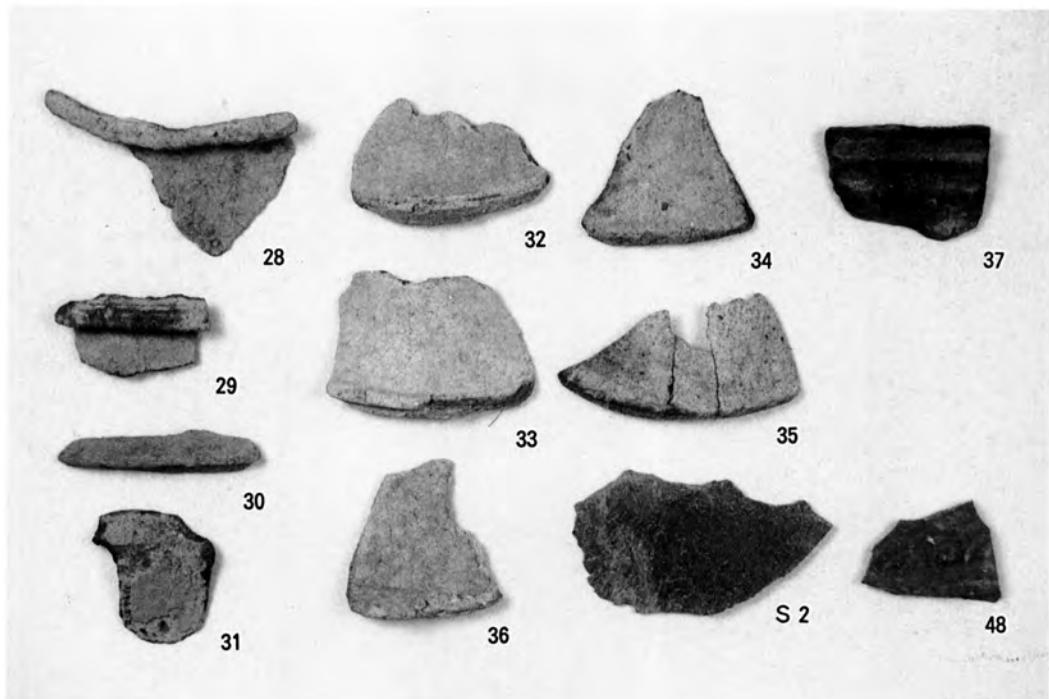


段状遺構 1・2 出土遺物（表）

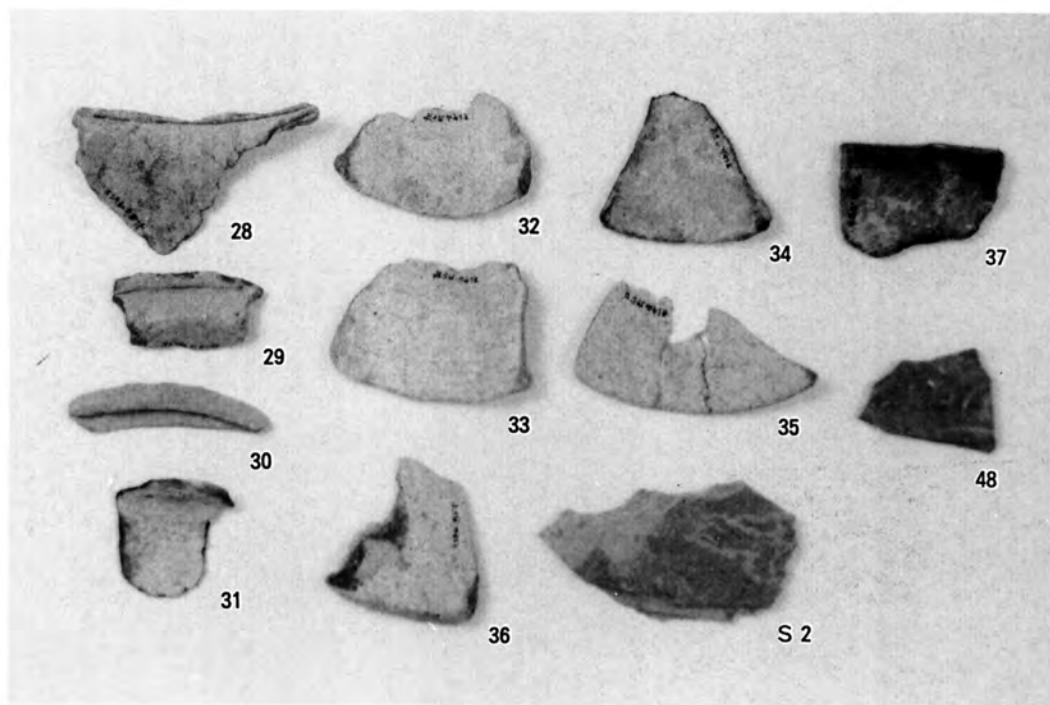


段状遺構 1・2 出土遺物（裏）

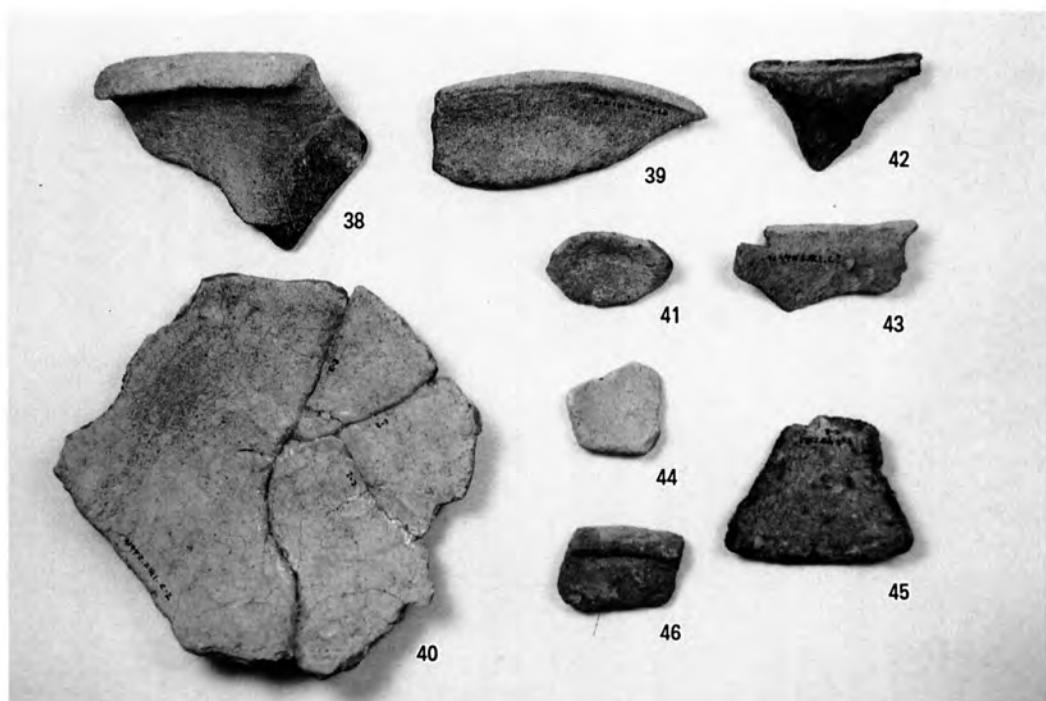
図版 8



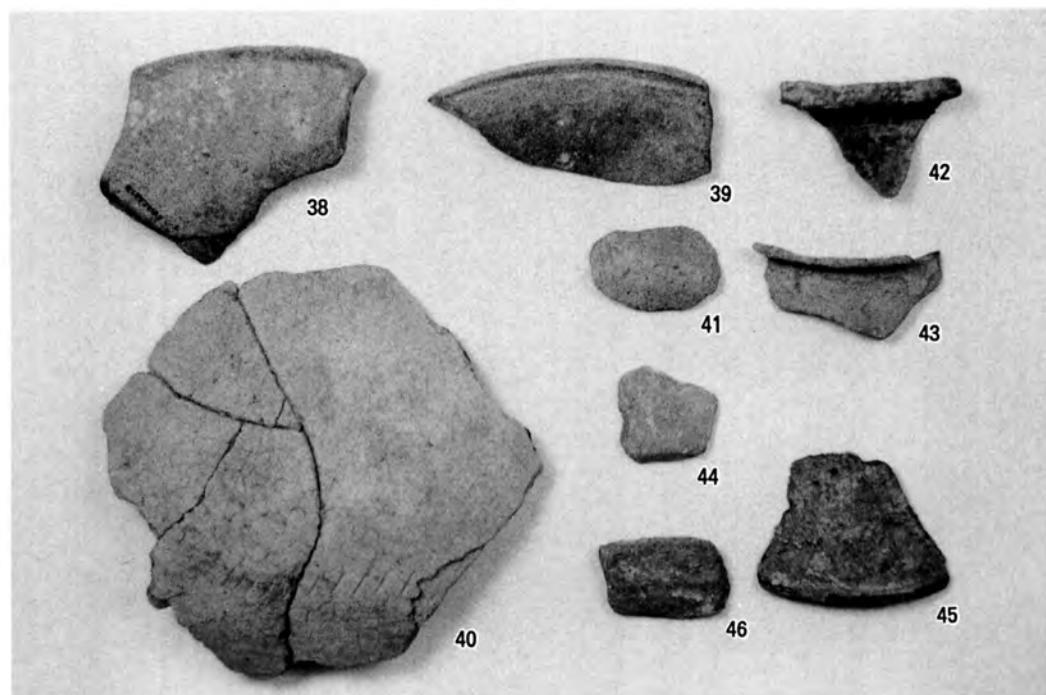
段状遺構 3 出土遺物（表）



段状遺構 3 出土遺物（裏）

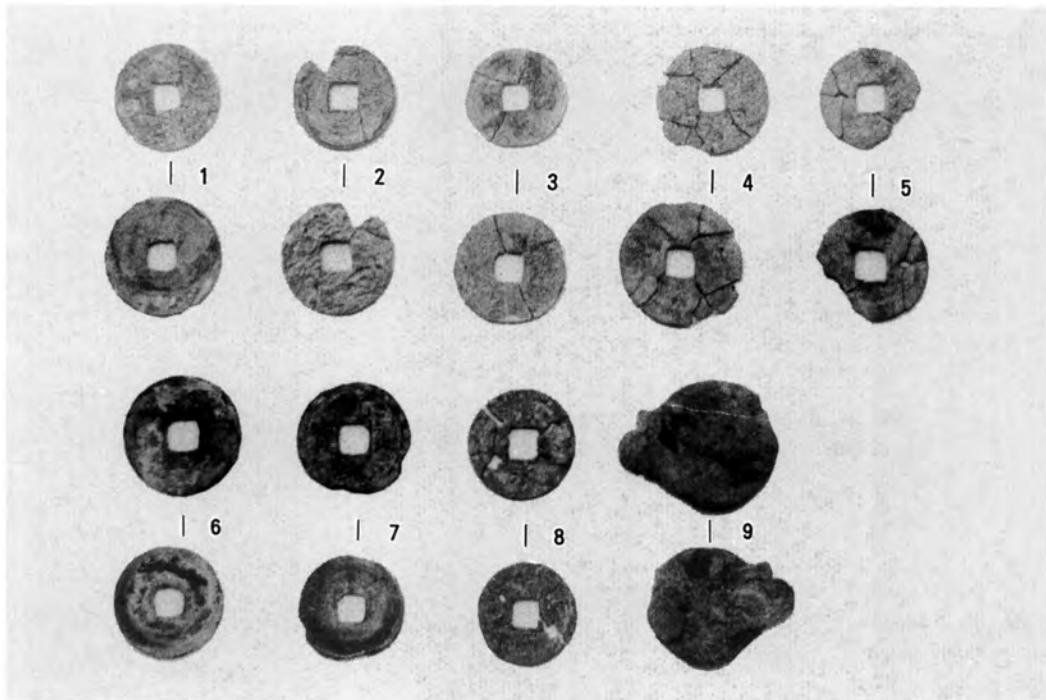


土坑 1 出土遺物（表）

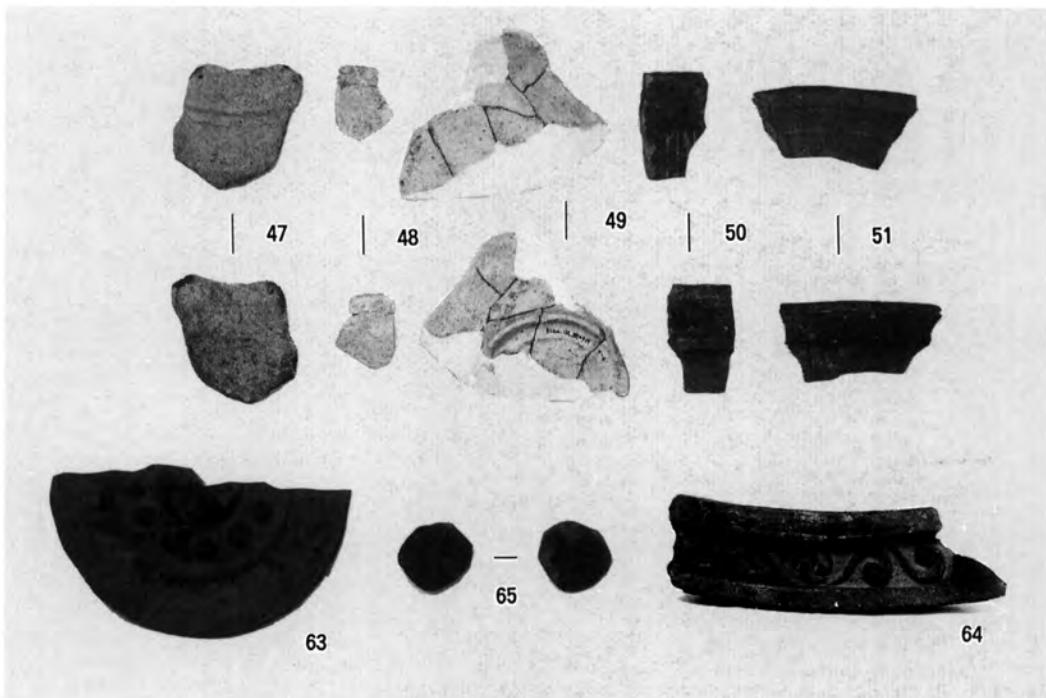


土坑 1 出土遺物（裏）

図版10

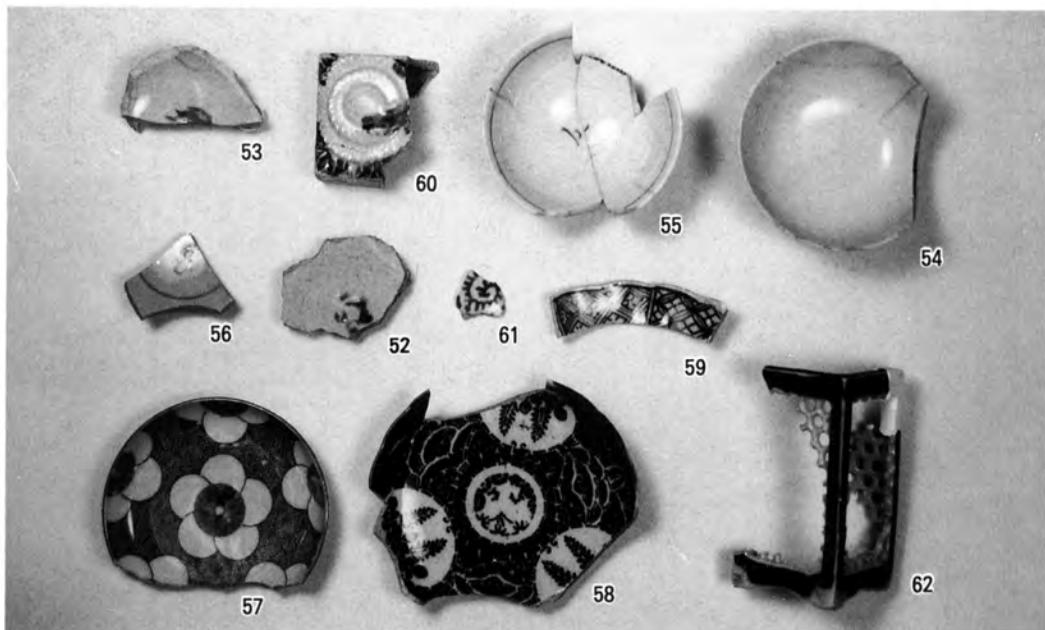


火葬墓出土錢貨

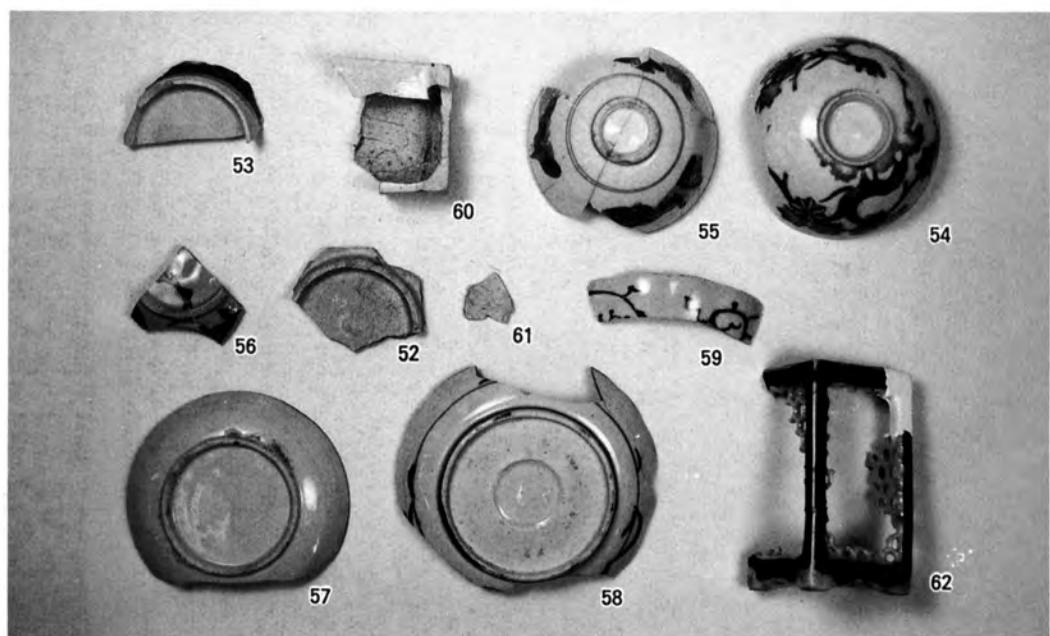
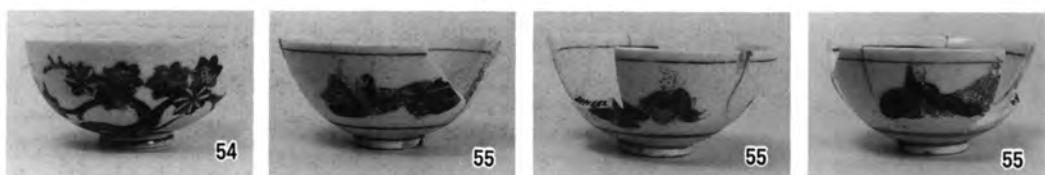


遺構にともなわない遺物

図版11



陶磁器（表）



陶磁器（裏）

図版12



雲上山11号墳調査前（北より）



雲上山11号墳調査後

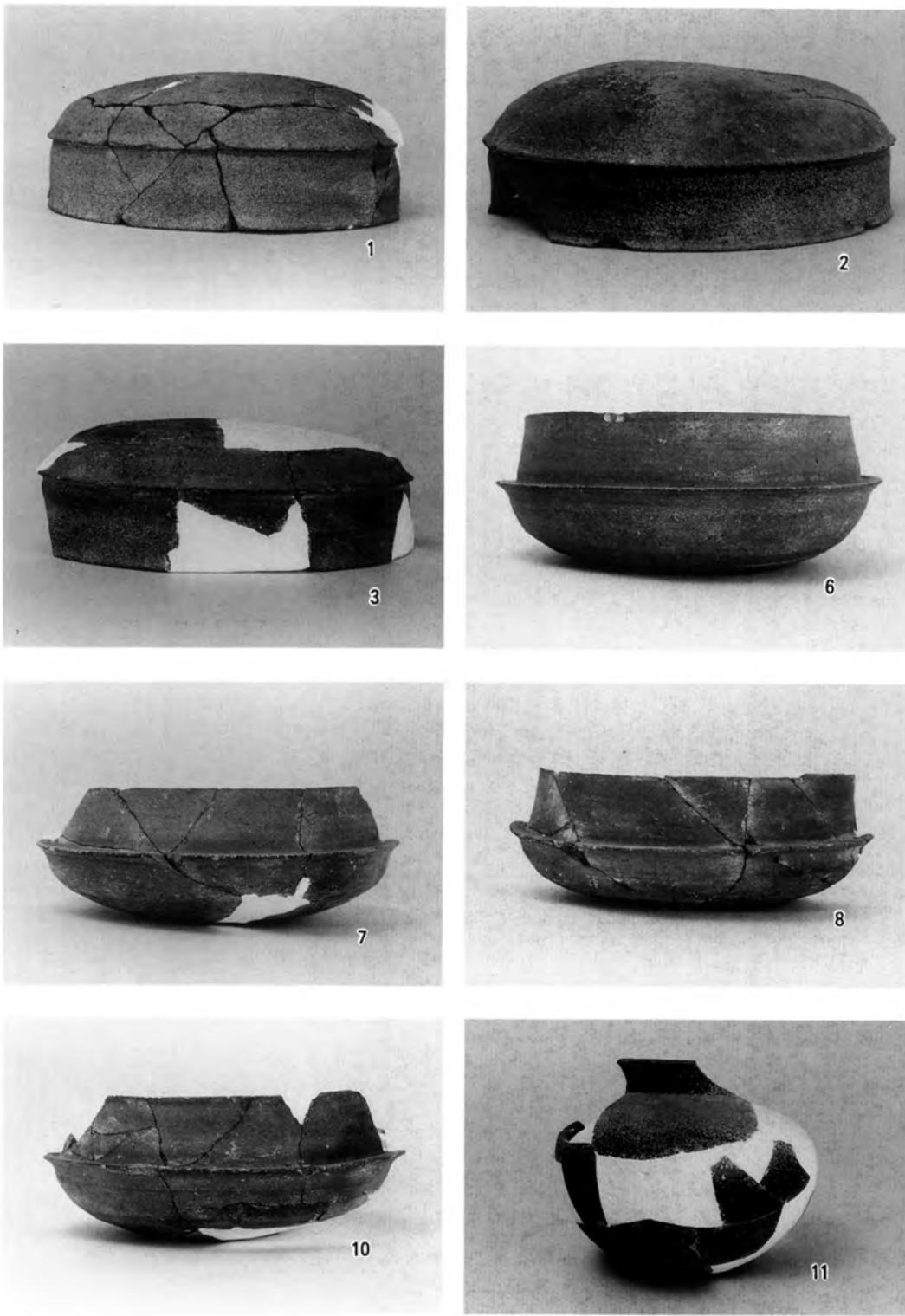


周構の土層断面（北より）



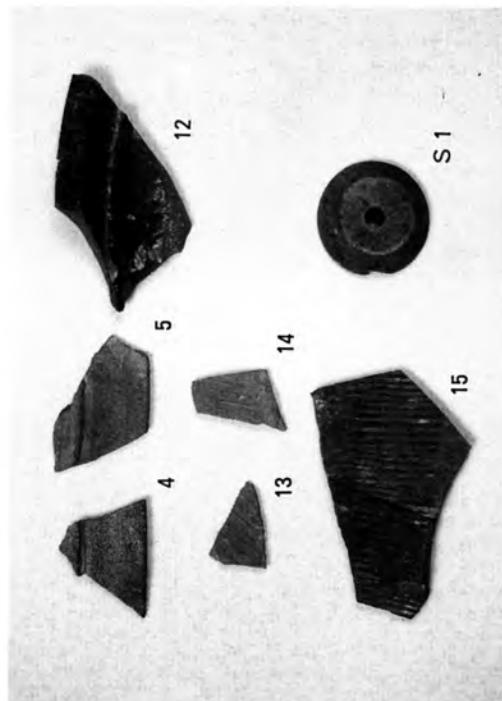
土層断面（東より）

図版14

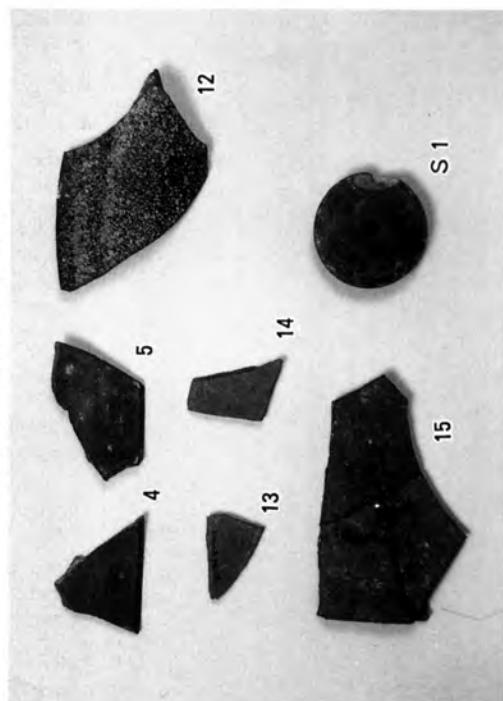


雲上山11号墳出土遺物

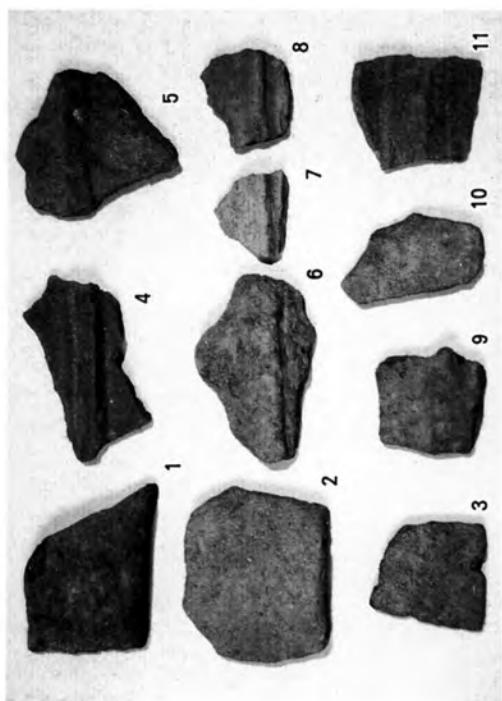
图版15



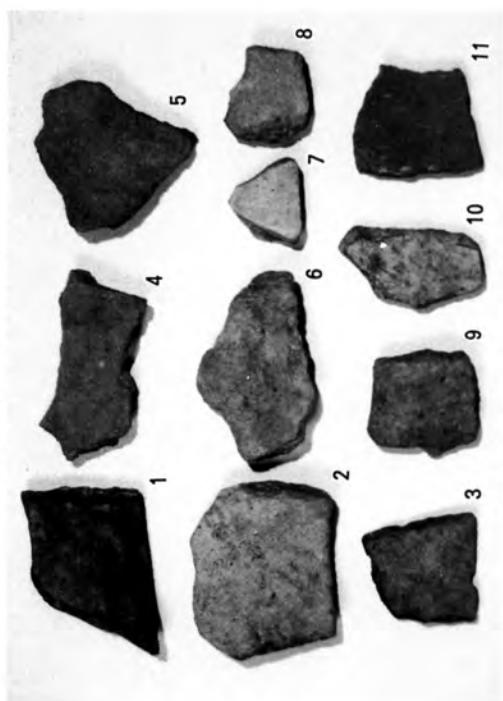
雲上山11号填出土遺物(表)



雲上山11号填出土遺物(裏)



雲上山11号填出土埴輪(表)



雲上山11号填出土埴輪(裏)

図版16



折敷山古墳全景（南より）



法面 崩落状況



説明板

図版17



西トレンチ



西トレンチ・土層

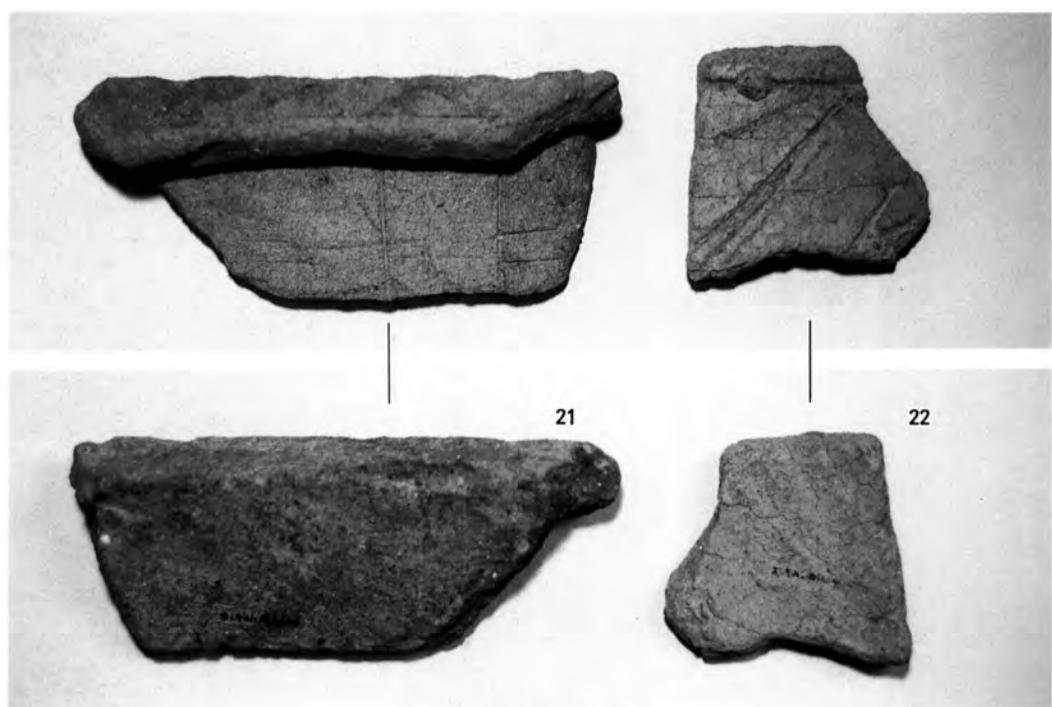
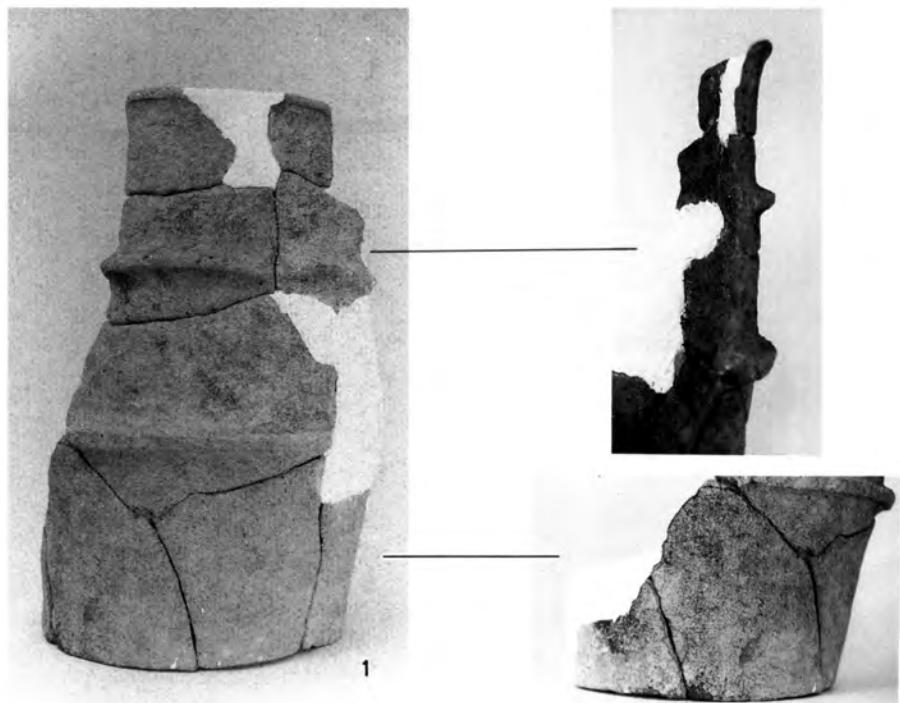


北トレンチ

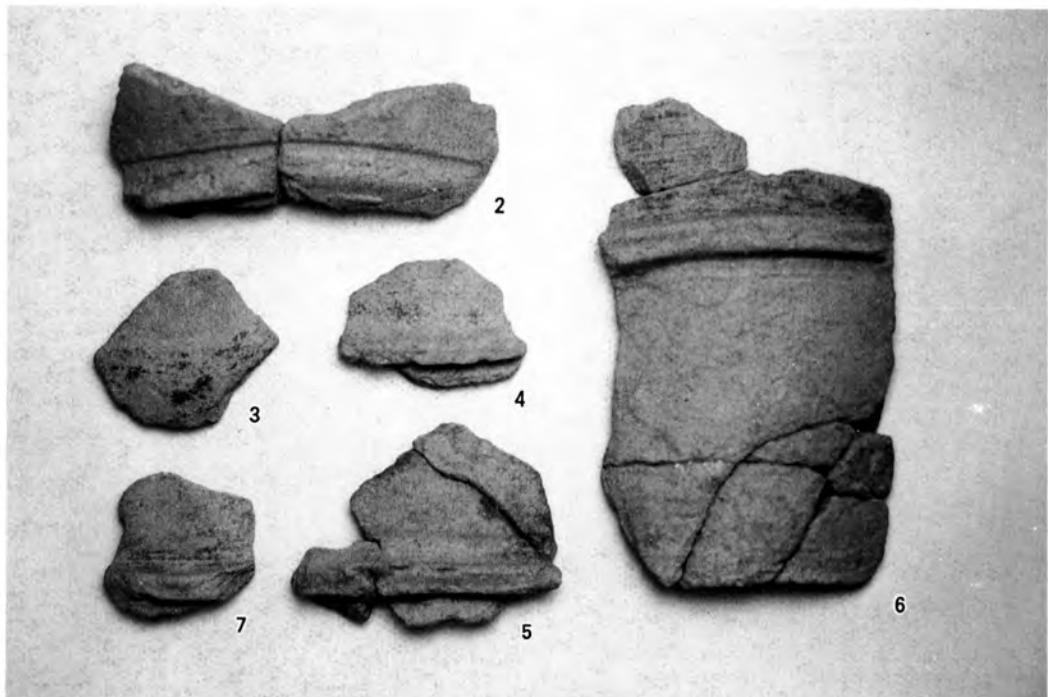


北トレンチ葺石

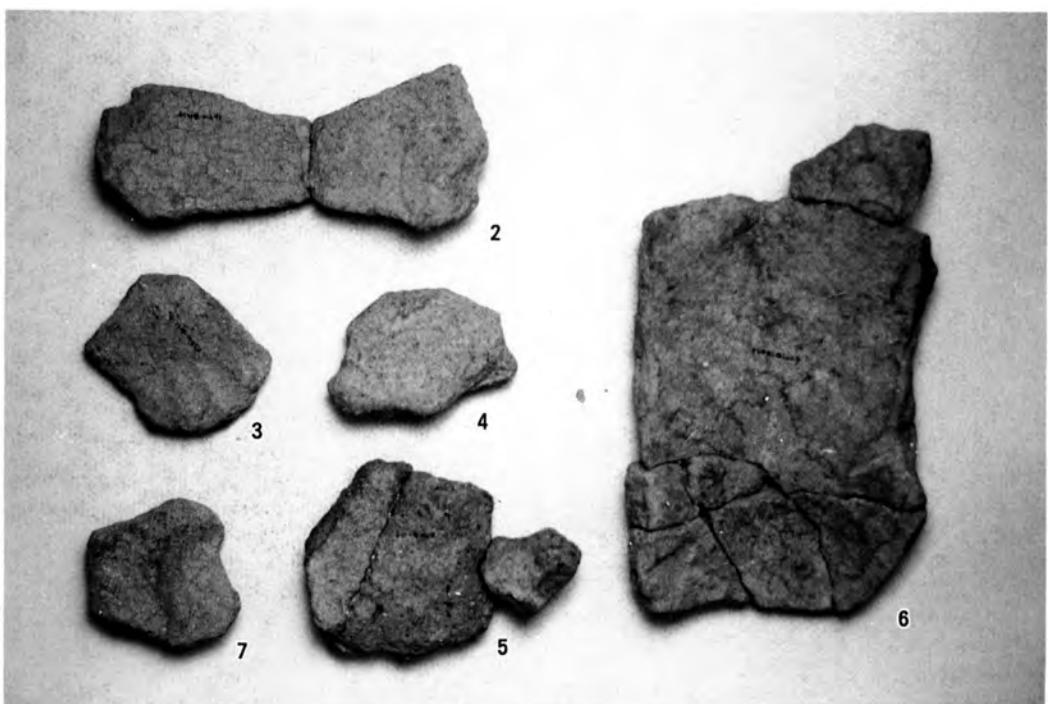
図版18



折敷山古墳出土埴輪 1

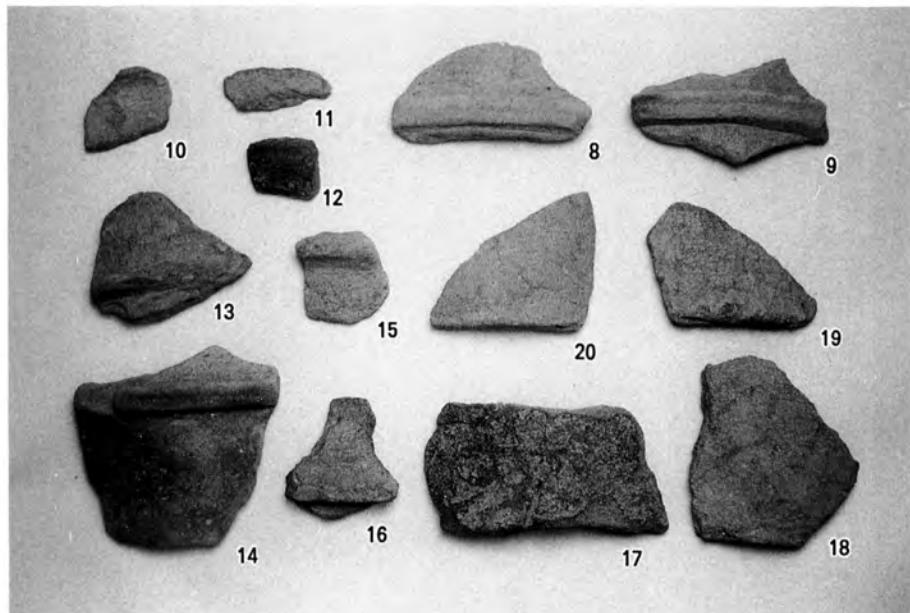


折敷山古墳出土埴輪 2 (表)

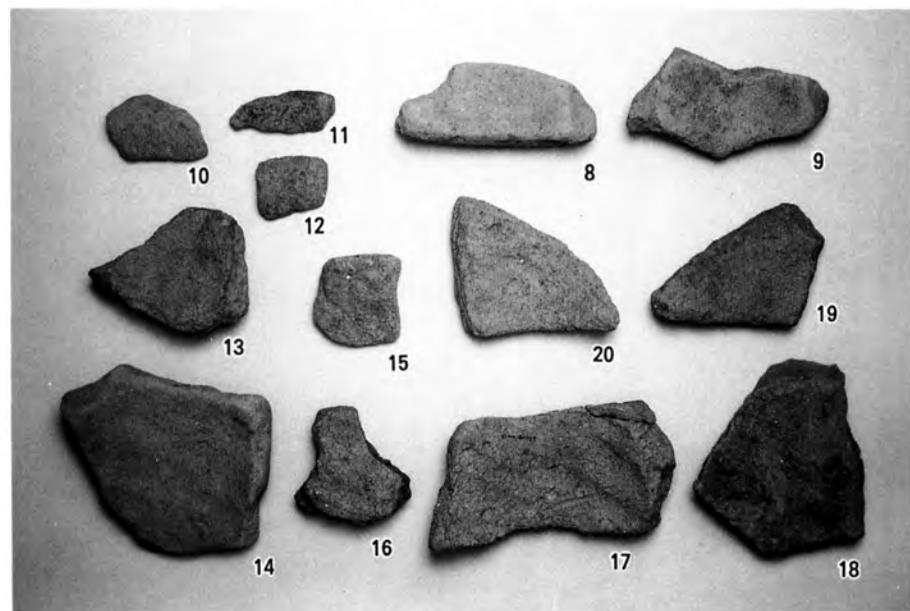


折敷山古墳出土埴輪 2 (裏)

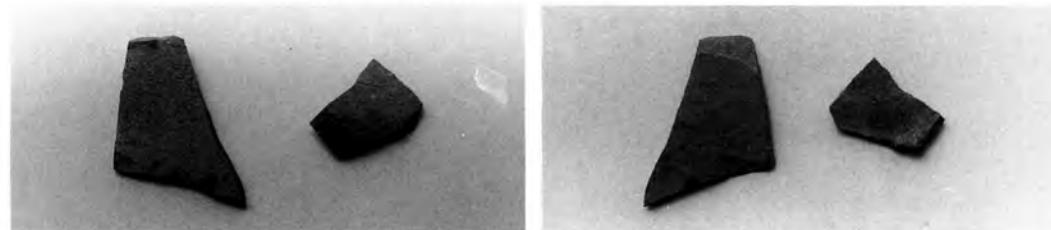
図版20



折敷山古墳出土埴輪 3 (表)

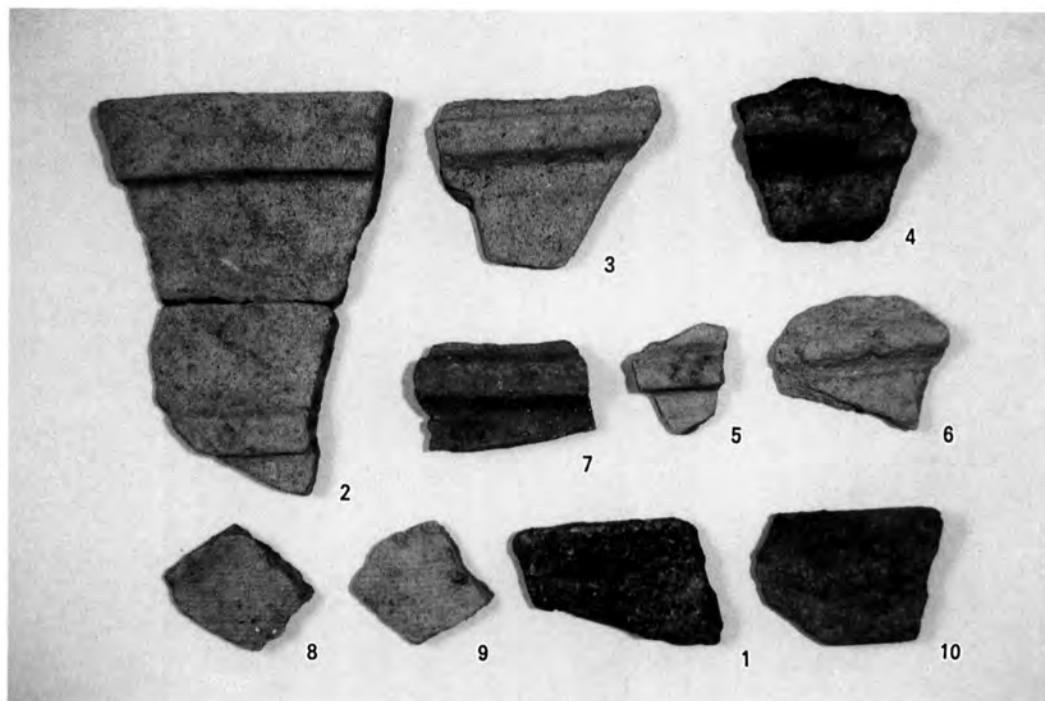


折敷山古墳出土埴輪 3 (裏)

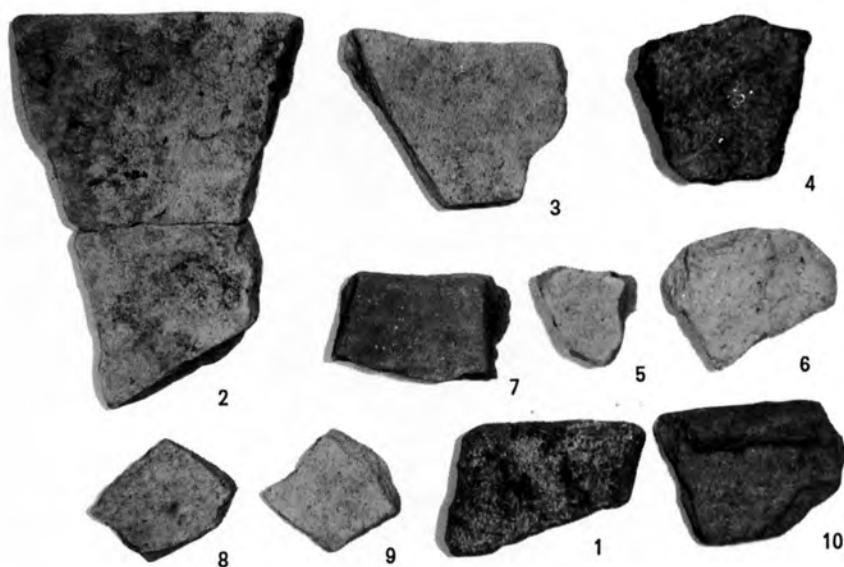


折敷山古墳出土須恵器 (表・裏)

図版21



小造山古墳出土埴輪（表）



小造山古墳出土埴輪（裏）

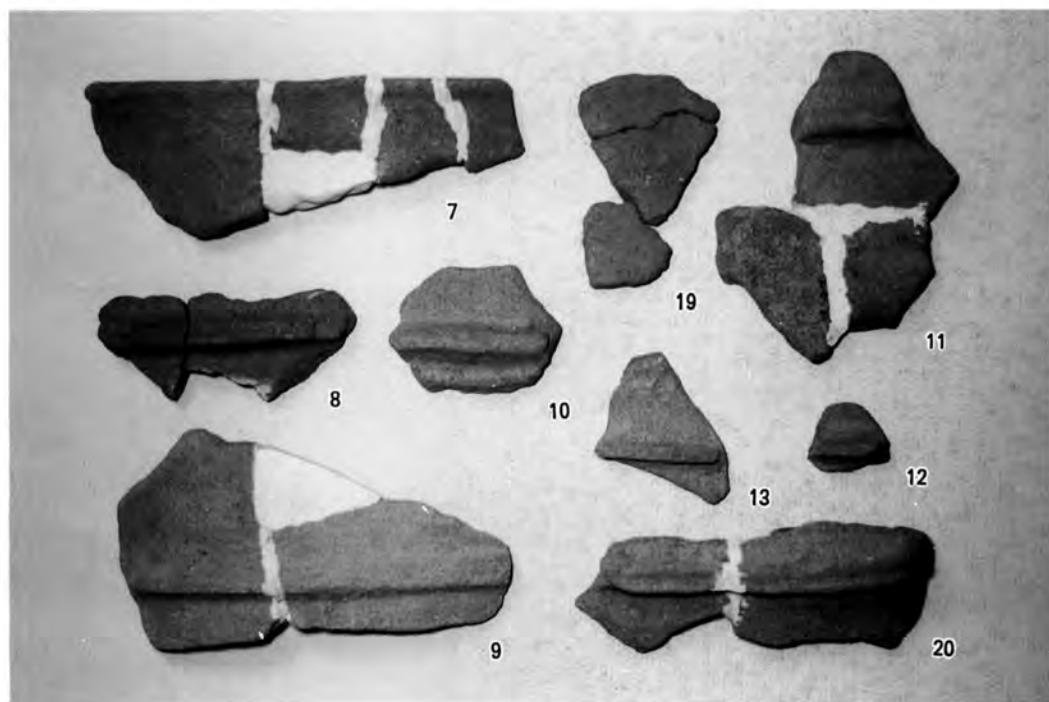
図版22



小造山古墳の崩落状況（東）

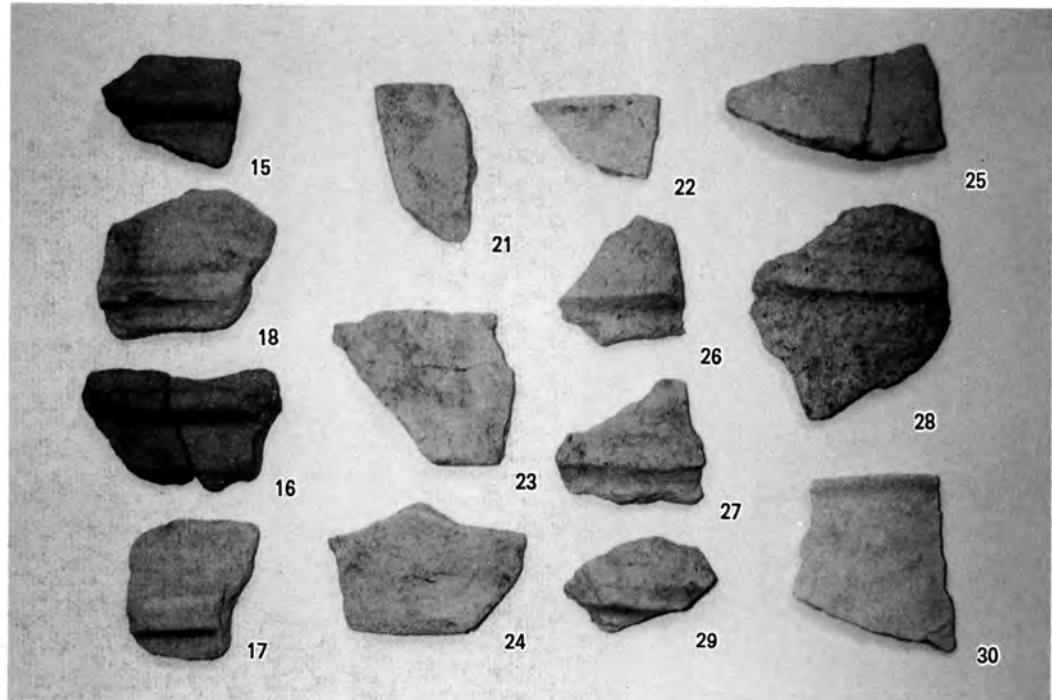


小造山古墳の崩落状況（西）

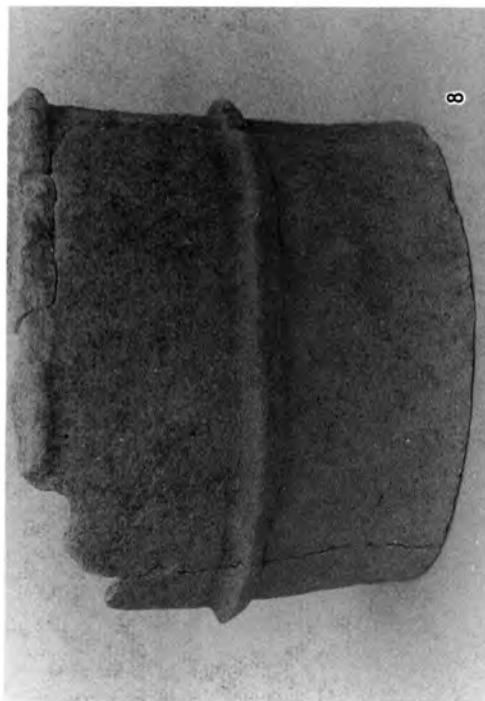


法蓮22号墳出土埴輪

図版23

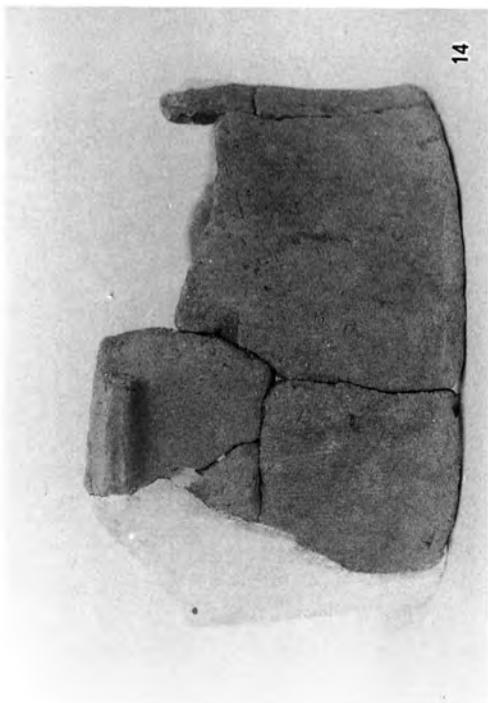


法蓮23・40号墳出土埴輪

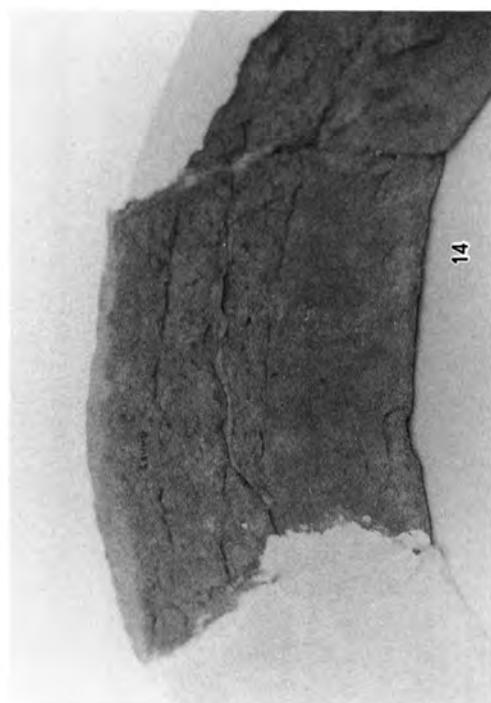


作山古墳採集埴輪 1

図版24



(表)



(裏)



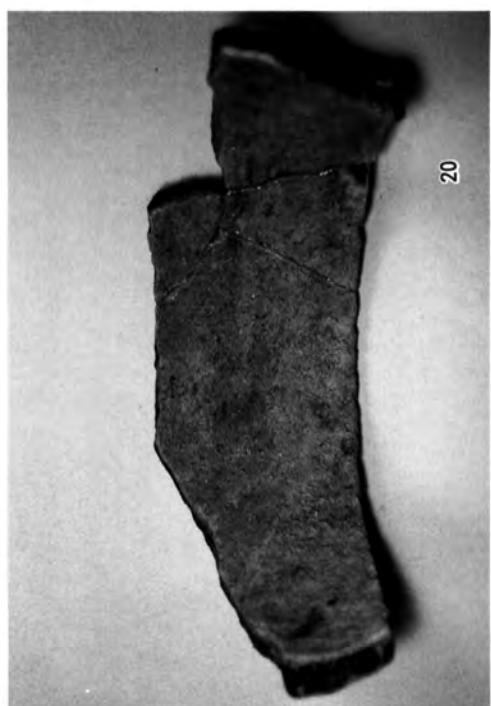
(表)



(裏)

作山古墳採集埴輪2

图版25



(表)

作山古墳采集埴輪 3

(表)

图版26



(表)



(真)



(表)

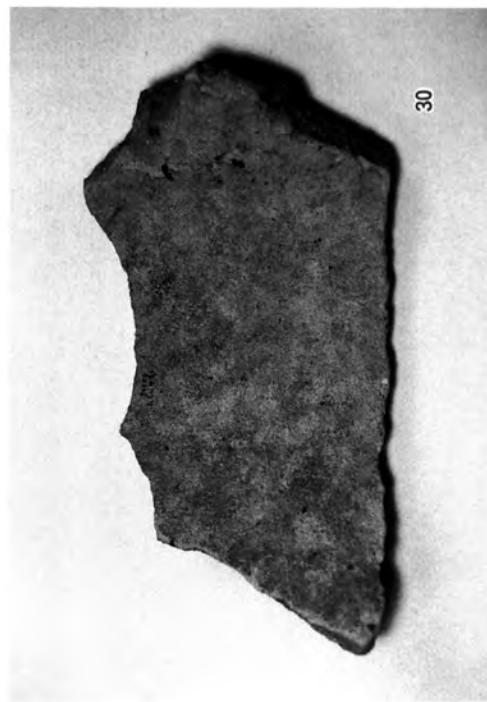


(真)

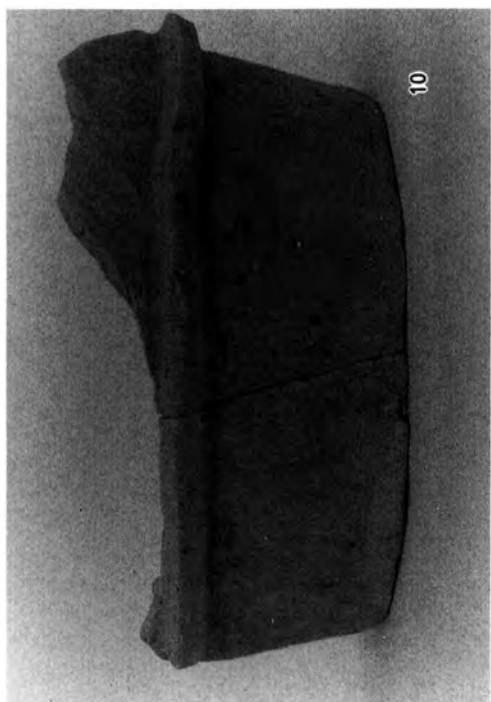
作山古墳采集埴輪 4



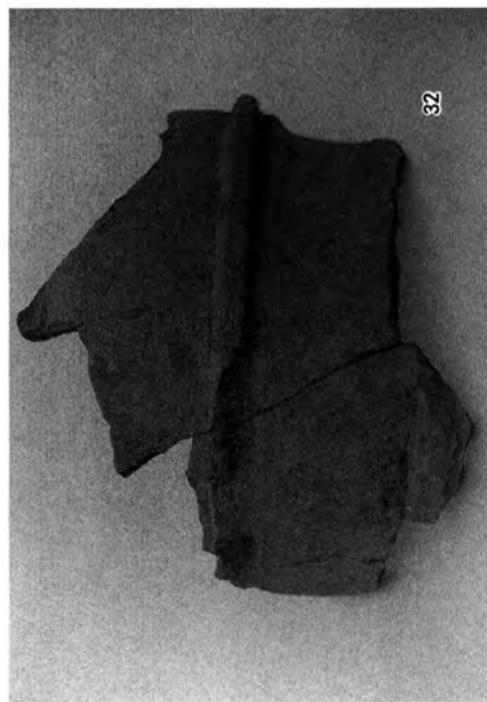
(表)



(裏)

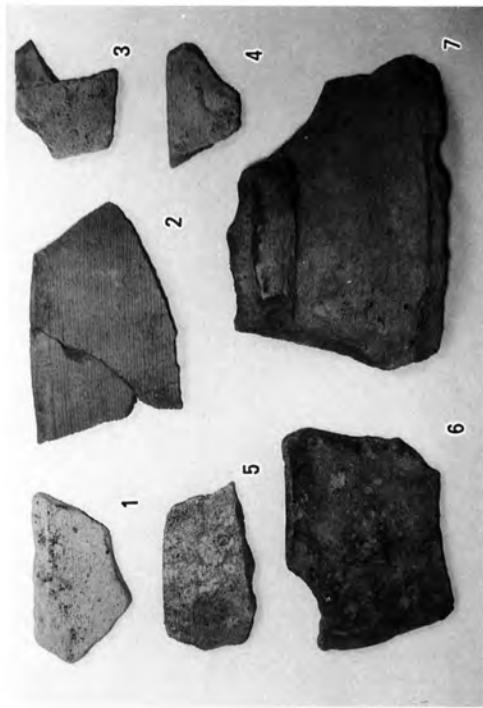


作山古墳

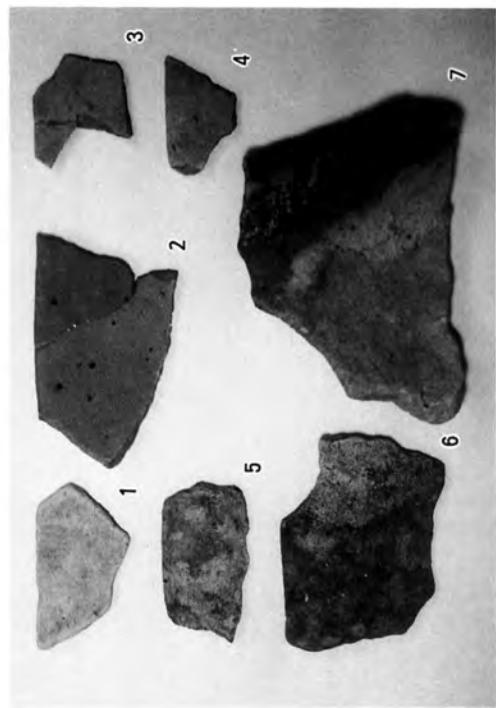


採集埴輪

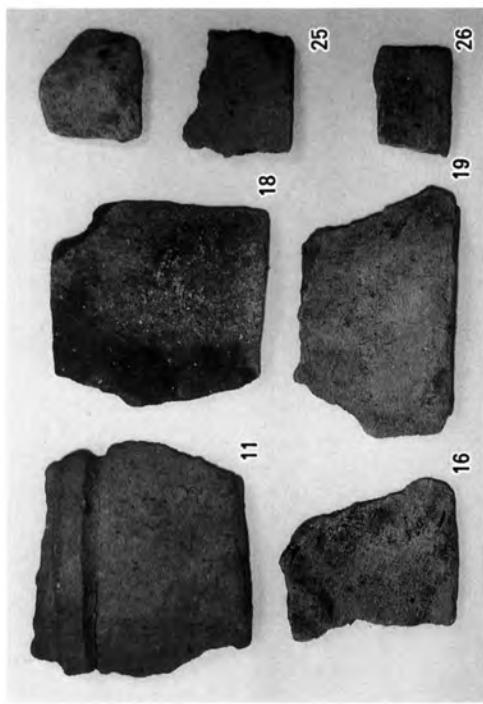
図版28



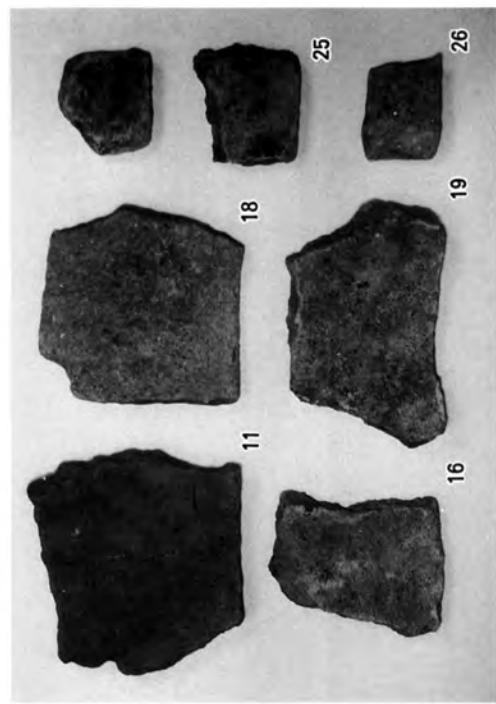
(表)



(裏)



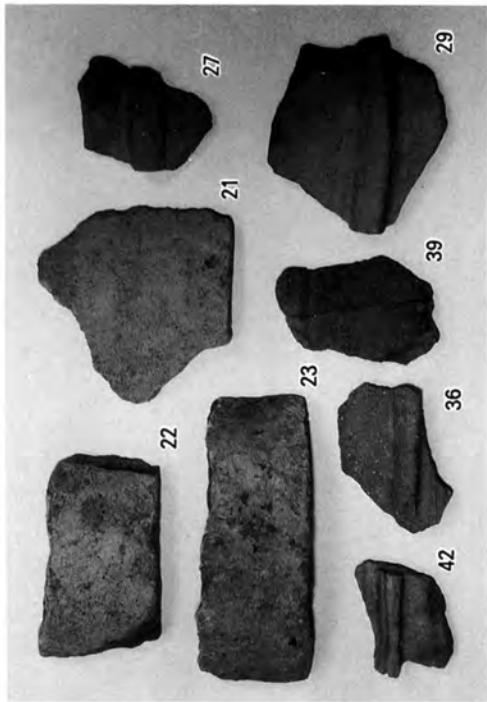
(表)



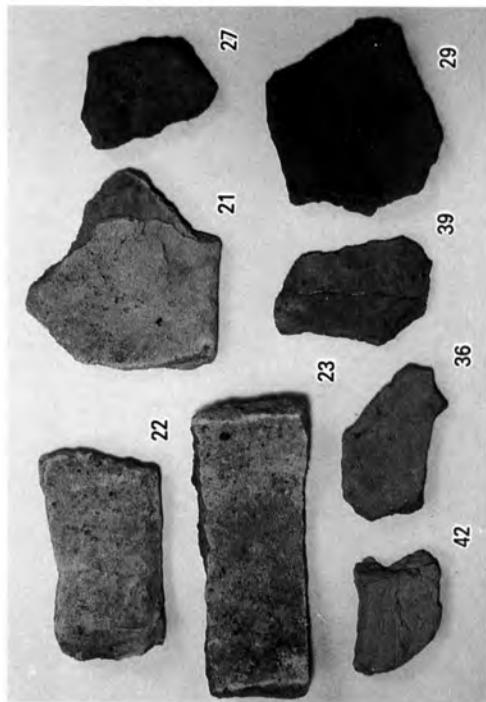
(裏)

作山古墳採集埴輪 6

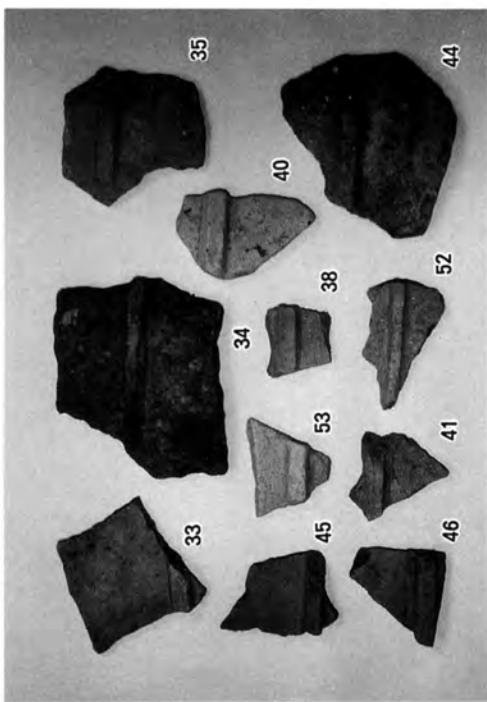
図版29



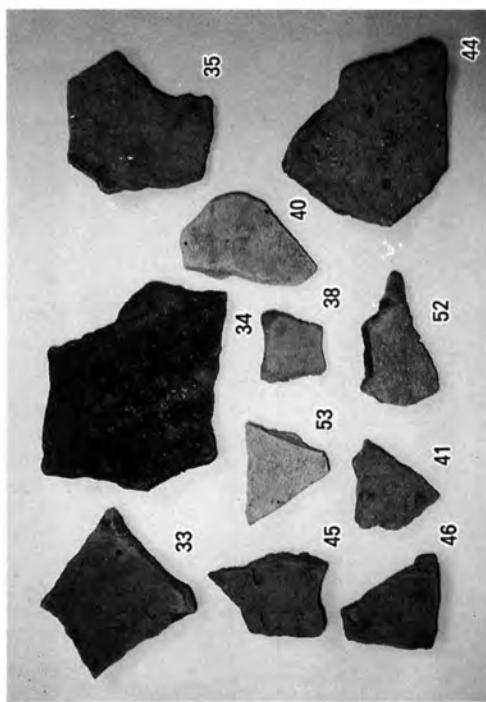
(表)



(実)



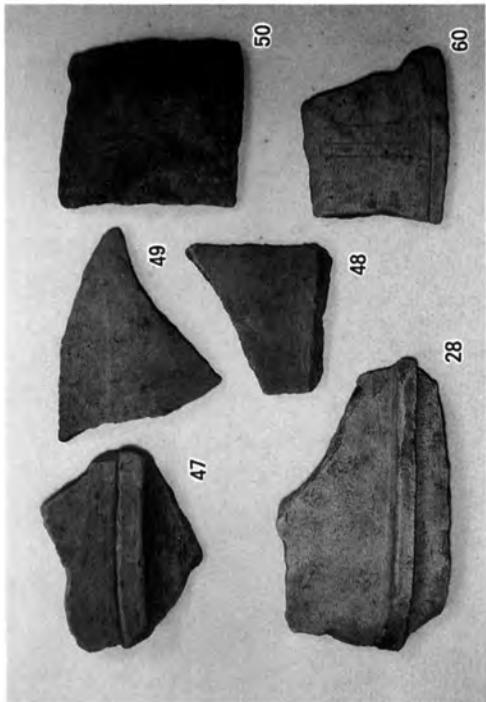
(表)



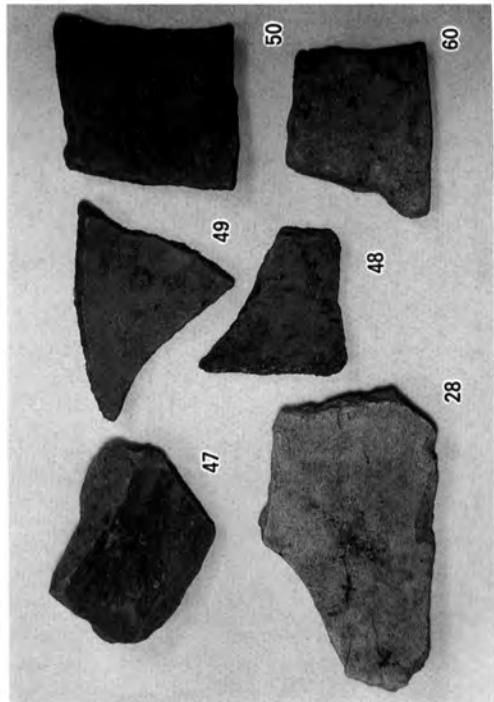
(実)

作山古墳探集埴輪7

図版30



(表)

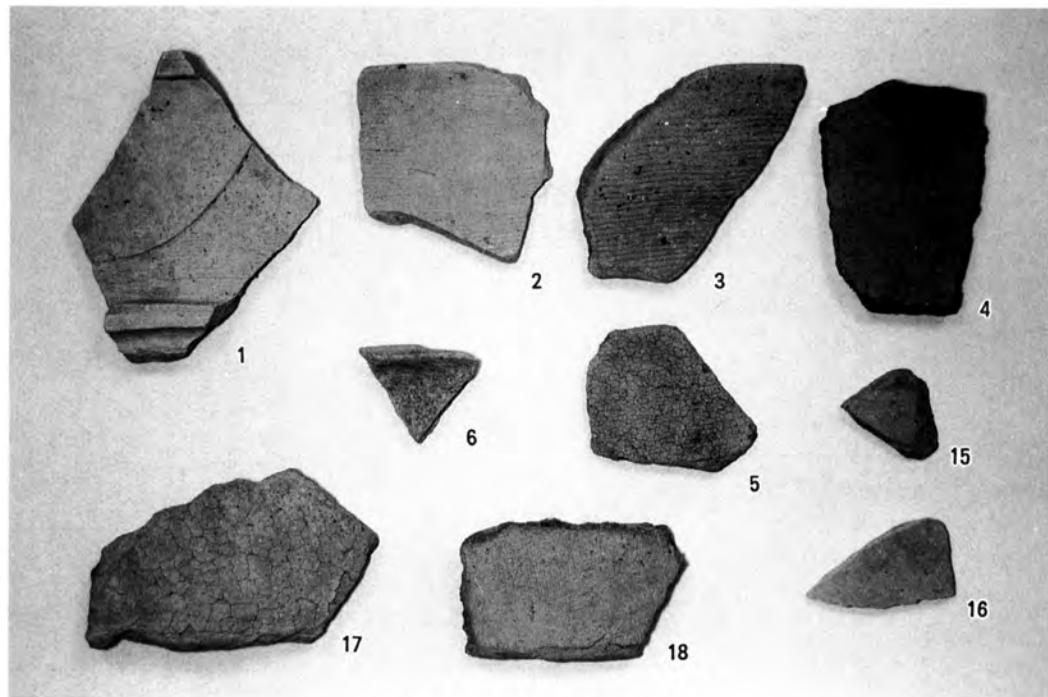


(裏)

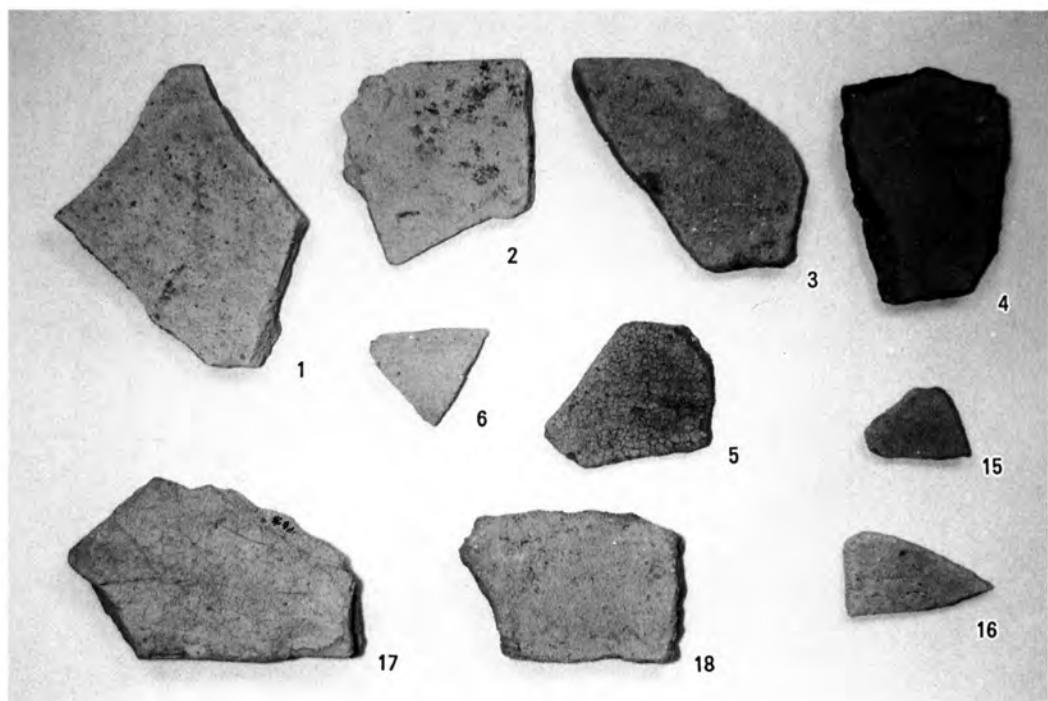


61

作山古墳採集埴輪 8

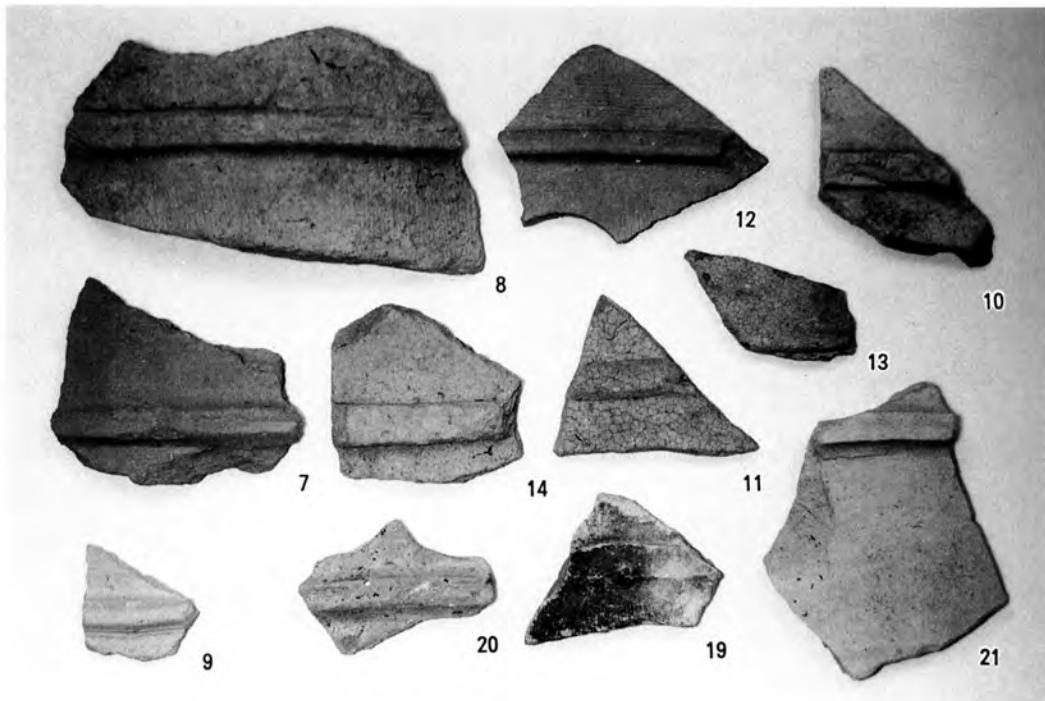


宿寺山古墳採集埴輪 1 (表)

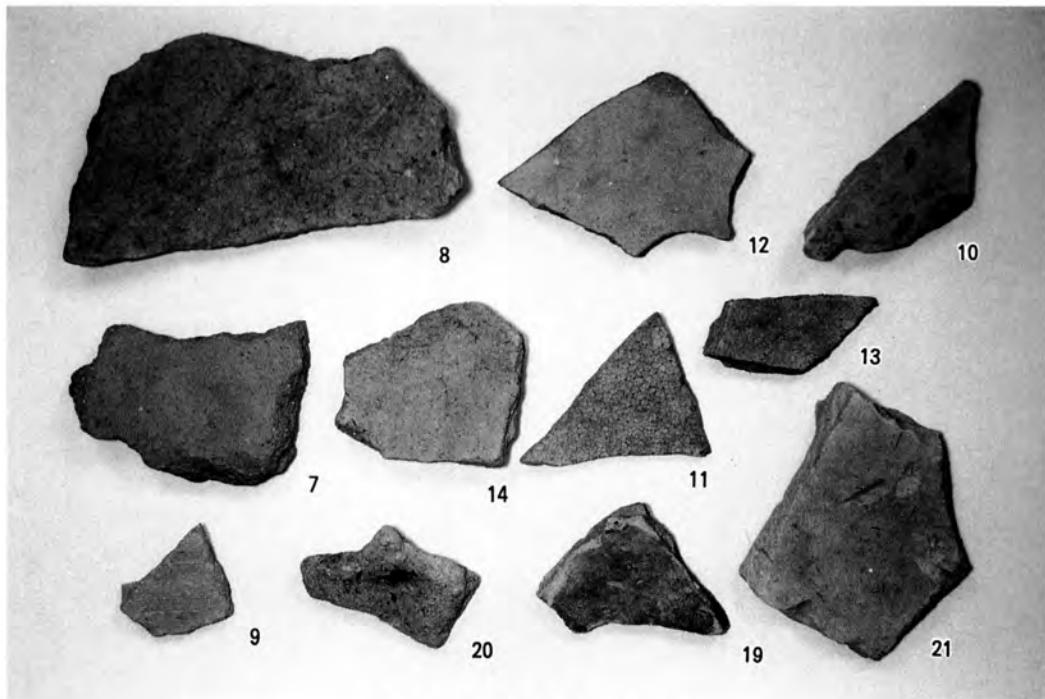


宿寺山古墳採集埴輪 1 (裏)

図版32

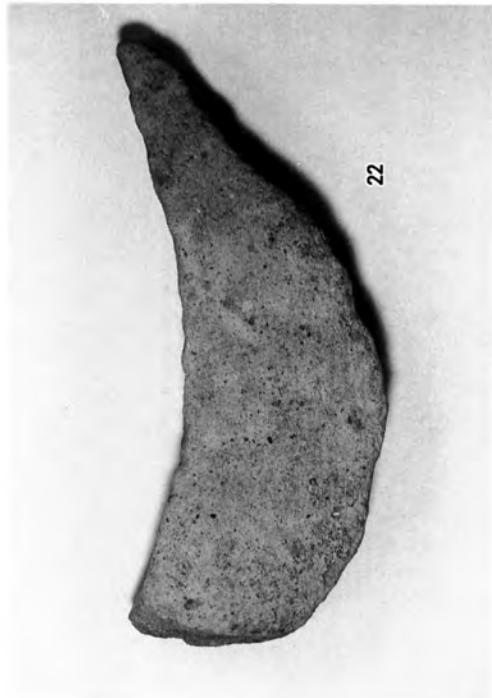


宿寺山古墳採集埴輪 2 (表)



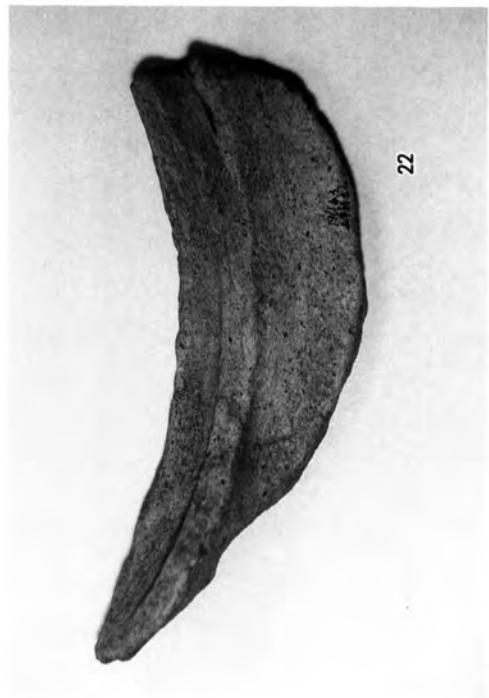
宿寺山古墳採集埴輪 2 (裏)

図版33



22

(表)



22

(裏)



23

(表)



23

(裏)

宿寺山古墳探査埴輪 3

総社市埋蔵文化財発掘調査報告 10

お しき やま
折 敷 山 遺 跡
うん じょう やま
雲 上 山 11 号 墳

1993年3月 印刷
1993年3月 発行

編集発行 総社市教育委員会
総社市中央一丁目1番1号
印刷 柳本印刷株式会社
総社市総社一丁目10番24号

